

# 潤番田遺跡

— 病院建設に伴う潤番田遺跡 2 次調査 —

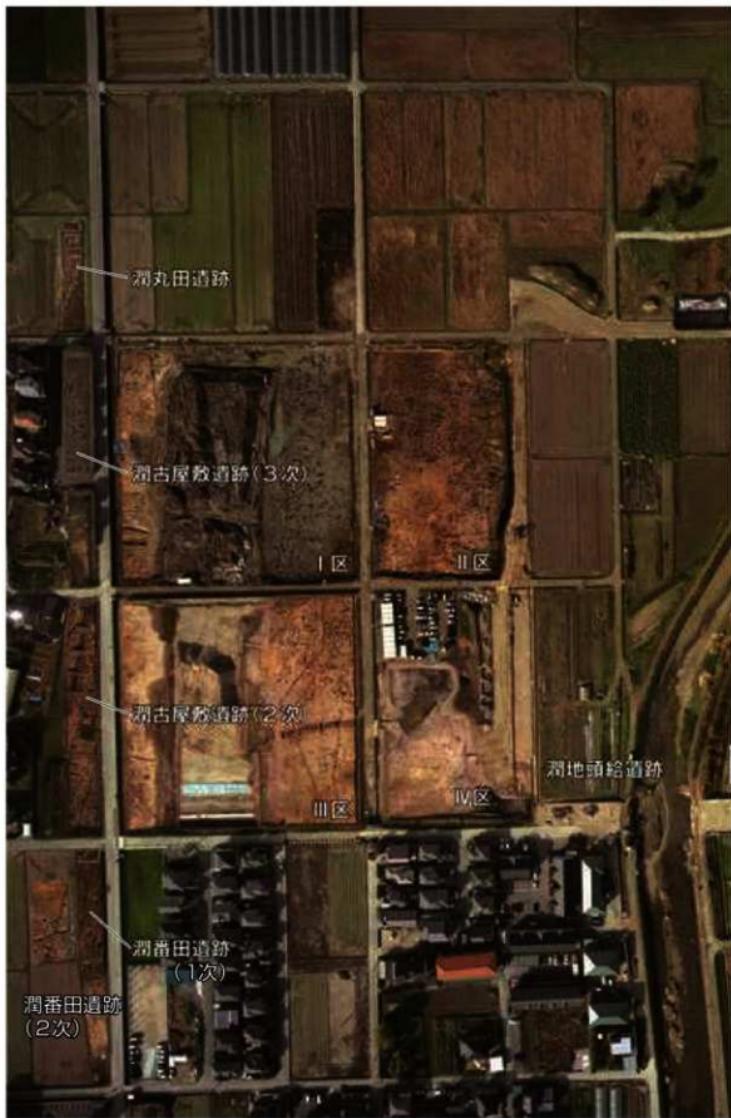
糸島市文化財調査報告書

第 22 集

2020

糸島市教育委員会





潤番田遺跡2次調査区と周辺遺跡

卷頭圖版 2



洞番田遺跡 2 次調査区 全景

# 本文目次

第1章 はじめに（平尾）	1
I 調査の経緯	1
II 調査の組織	1
第2章 位置と環境（秋田）	2
第3章 調査の記録	5
I 調査の概要（平尾）	5
II 遺構と遺物	5
1 挖立柱建物（秋田）	5
2 土坑（平尾）	5
3 井戸（秋田・平尾）	16
4 溝（平尾）	46
5 その他の遺構（秋田）	69
第4章 まとめ 潤遺跡群の変遷について（平尾）	70
第5章 分析	72
潤番田遺跡 2次調査出土の動物遺存体について（屋山）	72

# 挿図目次

第1図 糸島市の所在地	2	第16図 1号井戸出土遺物実測図2(1/3-1/4)	19
第2図 糸島地域主要遺跡分布図	3	第17図 2号井戸出土遺物実測図1(1/3-1/4)	20
第3図 潤番田遺跡 2次調査区周辺の遺跡分布図	4	第18図 2号井戸出土遺物実測図2(1/4)	21
第4図 1号掘立柱建物実測図(1/80)	6	第19図 3号井戸井戸枠2実測図1(1/8)	22
第5図 2号掘立柱建物実測図(1/60)	7	第20図 3号井戸井戸枠2実測図2(1/8)	23
第6図 3号掘立柱建物実測図(1/60)	8	第21図 3号井戸井戸枠3実測図1(1/8)	24
第7図 1～3号土坑実測図、土層断面図(1/60)	9	第22図 3号井戸井戸枠3実測図2(1/8)	25
第8図 1号土坑出土遺物実測図(1/3-1/4)	10	第23図 3号井戸井戸枠4実測図1(1/8)	26
第9図 3号土坑出土遺物実測図(1/3-1/4)	11	第24図 3号井戸井戸枠4実測図2(1/8)	27
第10図 4～8号土坑実測図、土層断面図(1/40)	12	第25図 3号井戸出土遺物実測図1(1/3-1/4)	29
第11図 9・12・13号土坑実測図(1/40)	13	第26図 3号井戸出土遺物実測図2(1/3-1/4)	30
第12図 4～12号土坑出土遺物実測図(1/3-1/6)	14	第27図 5～8号井戸実測図、土層断面図(1/60)	32
第13図 13号土坑出土遺物実測図(1/3)	15	第28図 4～6号井戸出土遺物実測図(1/2-1/3-1/4)	
第14図 1～4号井戸実測図、土層断面図(1/60)	17		33
第15図 1号井戸出土遺物実測図1(1/3-1/4)	18	第29図 7・8号井戸出土遺物実測図(1/3-1/4)	34

第30図	8~10号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4).....	35	第46図	7号溝出土遺物実測図2(1/4).....	56
第31図	9~12号井戸実測図、土層断面図(1/60).....	37	第47図	7号溝出土遺物実測図3(1/4).....	57
第32図	11号井戸出土遺物実測図1(1/3).....	38	第48図	7号溝出土遺物実測図4(1/3・1/4).....	58
第33図	11~12号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4).....	39	第49図	7号溝出土遺物実測図5(1/4).....	59
第34図	13号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4).....	41	第50図	8号溝出土遺物実測図(1/3).....	60
第35図	14号井戸出土遺物実測図1(1/3・1/4).....	42	第51図	9・15号溝、2・6・15号井戸実測図、土層断面図	
第36図	14号井戸出土遺物実測図2(1/4).....	43		(1/40・1/60).....	61
第37図	13~16号井戸実測図、土層断面図(1/60).....	45	第52図	9号溝出土遺物実測図1(1/3・1/4).....	62
第38図	15号井戸出土遺物実測図(1/2・1/4).....	46	第53図	9号溝出土遺物実測図2(1/4・1/6).....	63
第39図	1・3・4・10号溝実測図、土層断面図(1/40・1/100).....	47	第54図	10号溝出土遺物実測図(1/3・1/4).....	64
第40図	1号溝出土遺物実測図(1/3・1/4).....	48	第55図	12~15号溝出土遺物実測図(1/3).....	65
第41図	2・5・8号溝実測図、土層断面図(1/40・1/60).....	49	第56図	16号溝土層断面図(1/40).....	65
第42図	2~6号溝出土遺物実測図(1/3・1/4).....	50	第57図	16号溝出土遺物実測図(1/3・1/6).....	66
第43図	6~14号溝実測図、土層断面図(1/40~1/100)	51	第58図	ピット出土遺物実測図1(1/3).....	67
第44図	7号溝実測図、土層断面図(1/60~1/100).....	52	第59図	ピット出土遺物実測図2(1/3・1/4・1/6).....	68
第45図	7号溝出土遺物実測図1(1/4).....	54	第60図	ピット出土遺物実測図3(1/2・1/3).....	69
			付 図	調査田遺跡2次調査区全体図(1/100)	

## 図 版 目 次

卷頭図版1	調査田遺跡2次調査区と周辺遺跡	図版3-2 9号井戸
卷頭図版2	調査田遺跡2次調査区全景	図版3-3 5号土坑、12号井戸
図版1-1	調査田遺跡2次調査区から北を望む	図版3-4 13号井戸
図版1-2	調査田遺跡2次調査区全景	図版3-5 7号溝
図版2-1	調査区北側全景	図版3-6 16号溝
図版2-2	調査区南側全景	図版4 調査田遺跡2次調査出土遺物①
図版2-3	1・3号土坑、1・5号井戸	図版5 調査田遺跡2次調査出土遺物②
図版2-4	3号井戸、16号溝	図版6 調査田遺跡2次調査出土遺物③
図版2-5	2号井戸	図版7 調査田遺跡2次調査出土遺物④
図版2-6	3号井戸	図版8 調査田遺跡2次調査出土遺物⑤
図版3-1	5号井戸土層断面	図版9 調査田遺跡2次調査出土遺物⑥

## 表 目 次

表1 3号井戸出土井戸枠部材計測表

表2 調査田遺跡2次出土動物遺存

# 序

本書は平成30年度に実施した潤番田遺跡2次調査の成果をまとめたものです。

潤番田遺跡が所在する糸島市は3世紀の歴史書『魏志』倭人伝に登場する伊都国が所在したと考えられる場所で、古来より、中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点として我が国の文化形成に重要な役割を果たしてきました。

糸島市教育委員会では、平成6年度から三雲・井原遺跡の確認調査を継続的に行い、王に次ぐ有力者層の墳墓群や居館の濠と思われる方形区画などの確認、板石硯などを確認し、これまでに知られていた三雲南小路王墓と合わせて、国史跡の指定を目指した取り組みを進め、平成29年10月13日に市内8カ所目の国史跡として指定されました。今後は、市内に数多くの点在する貴重な文化財とともに、歴史と自然が息づく素晴らしい景観を含めて、その保護と活用が必要であり、本書が歴史解明の一助となれば幸いです。

なお、末筆となりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご協力を頂きました関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和2年3月31日

糸島市教育委員会  
教育長 家宇治 正幸

## 例　言

1. 本書は糸島市潤三丁目に所在する潤番田遺跡2次調査の成果をまとめたものである。
2. 本書は令和元年度に有限会社舌間商事の委託をうけ作成した。
3. 遺構の実測は調査を担当した平尾和久・秋田雄也が行った。
4. 遺構の写真は空中写真を(前)空中写真企画 謙山広宣に委託し、その他は秋田が撮影した。
5. 遺物の復元・実測・製図にあたっては、平尾・秋田のはかに藤野さゆり・田中阿早緑・内山久世・藏田和美・稻富良子が行った。
6. 本書の執筆は平尾と秋田が分担し、それぞれの本文末尾に執筆者の氏名を記している。
7. 動物遺存体の分析と所見について、福岡市文化財部埋蔵文化財課の屋山洋氏に執筆頂いた。  
また、1号戸井戸出土木簡の判読は、中牟田寛也（伊都国歴史博物館）が行った。
8. 出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下のとおり。  
■ 丹塗り
9. 本書で用いる座標は世界測地系である。
10. 本書の編集は秋田の協力を得て平尾が行った。



# 第1章 はじめに

## I 調査の経緯

平成30年9月27日に有限会社舌間商事 代表取締役舌間寛士氏より、文化財保護法93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出が糸島市教育委員会に提出されたため、10月11日に試掘調査を実施したところ、病院建設予定地のほぼ全面にわたり遺構が確認された。その後、11月8日に発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

発掘調査は平成30年11月15日～平成31年3月31日まで行った。また、平成31年3月16日には現地説明会を開催した。

報告書作成業務は令和元年5月7日に委託契約を締結し、出土品の洗浄・接合、ならびに実測・製図等を行い、令和2年3月31日に報告書を刊行した。なお、令和元年7月17日から9月16日まで伊都国歴史博物館で開催された「伊都国発掘『令和元年』」展で出土品を公開した。

## II 調査の組織

平成30年度に調査を実施した潤番田遺跡2次調査の調査組織は以下のとおりである。

糸島市教育委員会

	平成30年度（発掘調査）	令和元年度（報告書作成）
総括 教育長	家宇治 正 幸	家宇治 正 幸
教育部長	泊 早 苗	井 上 義 浩
文化課長	岡 部 裕 俊	岡 部 裕 俊
文化課課長補佐兼		
文化・図書館係長	古 川 秀 幸	
文化課課長補佐兼		
文化財係長	村 上 敦	村 上 敦
文化課主幹	平 尾 和 久	平 尾 和 久
文化財係主事	秋 田 雄 也	秋 田 雄 也

発掘作業員

生田弘毅・市丸千賀子・浦上良枝・黒柳政信・中山健介・藤森啓子・和多治子・池田幸介・中西和豊・濱田涼子・吉原明美・宮崎哲雄・火山陽子・堀正三・井手孝義・久間美佐子・松隈耕二・西村民子・井上まり子・山下大樹・春口将輝・山口直哉

整理作業員

藤野さゆり・田中阿早緑・内山久世・藏田和美・福富良子

(平尾和久)

## 第2章 位置と環境

糸島市は福岡県の西端に位置し、西は佐賀県唐津市、南は佐賀市と境を接する。

潤番田遺跡は、糸島市の中心、標高5m未満の糸島低地帯中央部に位置する遺跡であり、本遺跡を含む一帯は潤遺跡群として登録されている。なお、現在の今津湾と加布里湾を結ぶ標高の低い平野部には「糸島水道」が存在したと考えられていたが、貝化石層の分布調査により泊～志登の間は陸地として繋がることが確認されている。

次に「潤」という地名についてであるが、由来は不詳である。戦国期に「潤」姓の有力氏族がいたよう、現在も当地に潤姓の家を確認できる。近世の記録として『筑前国續風土記』や『筑前国續風土記拾遺』があり、潤村は元来唐津街道沿いの旧土師村（現在の土師町辺りか）の北一町（現在の古屋敷付近か）にあったが、元和元（1615）年に土師村の西側に移転し、波多江村に属していた堀内集落を編入したとされる（岡部2017）。

現在は住宅地や水田に開まれているが、潤地頭給遺跡などの調査から、本来は起伏にとんだ地形であったと判明している。周辺の弥生時代初期の代表的な遺跡として志登支石墓群が挙げられる。弥生時代早期から前期の支石墓や前期から中期の甕棺墓などが確認されている。弥生時代前期末から後期前半にかけては潤地頭給遺跡において300基を超える甕棺墓群が検出されている。また、墓域を隔てた東側からは当該期の集落跡も検出されている。潤地頭給遺跡の南東に位置する潤中町遺跡では弥生時代中期～後期にかけての集落跡が、標高7～8mと周辺より高い位置に築かれており、直径約8mの円形に柱穴が集中する区画のほか、2間柱建物など付近とは異なる様相を見せている。弥生時代後期の遺構としては潤古屋敷遺跡で大型の掘立柱建物群が検出さ

れている（岡部2017）。弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて継続的に運営されたと考えられる潤地頭給遺跡の約30棟に及ぶ堅穴住居群は、西日本最大級の玉作り工房群であることが明らかとなっている。工房群から出土した玉の材料となる碧玉は花仙山（島根県松江市）のものが用いられ、山陰系土器も確認されていることから出雲地域と交流があったと考えられる。古墳時代中期から後期にかけては潤地頭給遺跡において堅穴住居が5棟確認されている。

奈良時代の遺構や遺物について、近隣では志登橋本遺跡が挙げられる。奈良時代の井戸を検



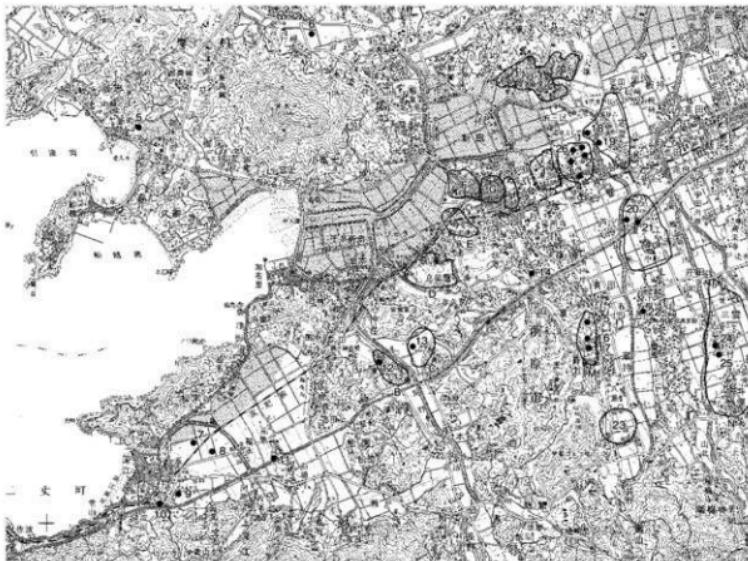
第1図 糸島市の所在地

出しており、中から墨書き土器片が出土している。

調査遺跡群では中世になると環濠居館跡が多く検出される。調古屋敷遺跡では南北約90mにも及ぶ大溝が確認され、両端は屈曲後さらに伸びている。大溝の時期について、13世紀～14世紀に機能し、15世紀には埋没したと報告されている。調古屋敷遺跡の北側には調丸田遺跡が位置し、海に向かって北側へ伸びる中世の石敷道路構造を確認するとともに、北端に段落ちを検出しており、港湾施設の存在が想定される。また調番田遺跡1次調査では象嵌青磁方枕などの高麗青磁が約30点出土しており、調丸田遺跡の石敷道路構造と合わせて朝鮮半島との交易に関係すると考えられる。

近世については現在の国道202号線沿いに唐津街道が通る。唐津街道より南側には篠原東遺跡群があり、近世の集落遺跡が確認されている。L地区では井戸や土坑、溝を検出、K-2地区では近世の甕棺墓や土壙墓を検出している。

以上のように調番田遺跡周辺では各時代に渡って遺跡が確認されており、継続的に人々が生活を営んでいたことがわかる。  
(秋田雄也)



1. 調地頭船跡
  2. 調中町道跡
  3. 調神社古墳
  4. 調志丁道跡
  5. 調床松原遺跡
  6. 一の町道跡
  7. 木舟の森道跡
  8. 木舟・三本松道跡
  9. 深江・弁平田道跡
  10. 塚田道跡
  11. 石崎・曲り田道跡
  12. 東下田道跡
  13. 東五反田道跡
  14. 上野子道跡
  15. 磯持境道跡
  16. 磯持古屋敷道跡
  17. 磯持遺跡
  18. 志登支石墓群
  19. 志登松木道跡
  20. 波多江・波宇屋敷道跡
  21. 波多江道跡
  22. 平原道跡
  23. 三坂七尾道跡
  24. 三雲小路道跡
  25. 井原鍛冶道跡
- A. 調番田・調古屋敷道跡  
B. 東道跡群  
C. 東五反田道跡群  
D. 萩浦道跡群  
E. 尾井町道跡群  
F. 北新地道跡群  
G. 北本町道跡群  
H. 上町向原道跡群  
I. 調志道跡群  
J. 沿道跡群  
K. 志登道跡群  
L. 波多江道跡群  
M. 磯持道跡群  
N. 三雲・井原道跡

第2図 系島地域主要遺跡分布図

(参考文献)

瓜生秀文編2013「潤遺跡群Ⅲ」糸島市文化財調査報告書第11集

江崎靖隆・江野道和編2006「潤地頭給遺跡Ⅰ」前原市文化財調査報告書第93集

江崎靖隆・江野道和編2007「潤地頭給遺跡Ⅱ」前原市文化財調査報告書第96集

江崎靖隆・江野道和編2017「篠原東遺跡群Ⅰ」糸島市文化財調査報告書第15集

岡部裕俊2017「雷山川旧河口域における埋蔵文化財調査の手引き」糸島市立伊都国歴史博物館紀要』

第12号

平尾和久編2011「潤遺跡群Ⅰ」糸島市文化財調査報告書第4集

平尾和久編2012「潤遺跡群Ⅱ」糸島市文化財調査報告書第6集



第3図 潤番田遺跡 2次調査区周辺の遺跡分布図

## 第3章 調査の記録

### I 調査の概要

埋蔵文化財発掘の届出があった糸島市調三丁目456・458・459-1番地は潤畠田遺跡に該当する。今回の届出地の東接地では、平成21年度に道路の拡幅に伴い発掘調査を実施している。北側は潤古屋敷遺跡、北東側は潤地頭給遺跡に接する。調査区内では、弥生時代前期の溝1条、弥生時代中期の大溝1条のほかに中世から近世にかけての井戸、土坑、溝が多く確認された。

(平尾)

### II 遺構と遺物

#### 1 掘立柱建物

**1号掘立柱建物**（第4図） 調査区北西側で検出した掘立柱建物である。3間×2間で、柱間は18m～2.72mを測り、1辺最大南北6.32m、東西5.42mを測る。主軸は南北を示し、棟持柱がつく。土器は小片で図化できなかつたが、陶磁器片はみられず、弥生土器が確認できることから時期は弥生時代と考えられる。

**2号掘立柱建物**（第5図） 調査区北側で確認した1間×1間の掘立柱建物で、1辺は南北4.44m、東西5.42mを測る。主軸は南北を示す。遺物は小片で図化し得なかつたが、近世陶磁器片があるため、時期は近世と考えられる。

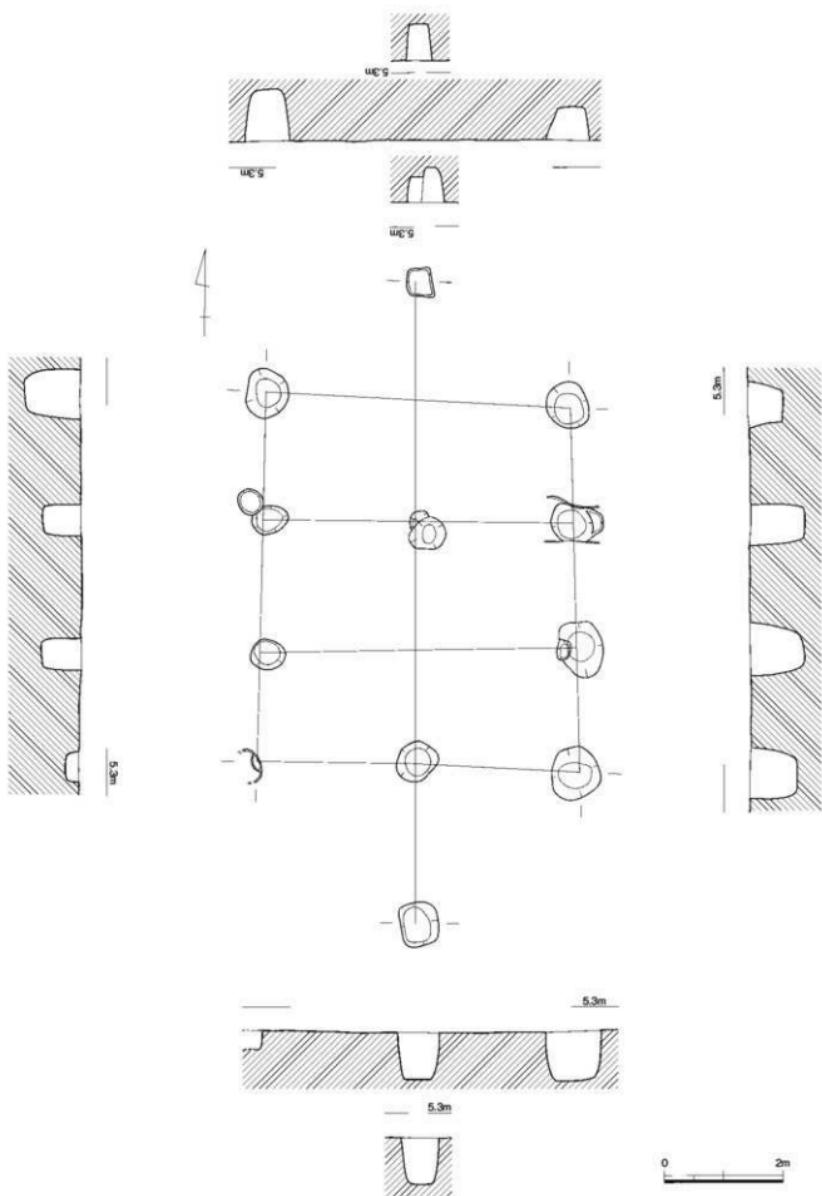
**3号掘立柱建物**（第6図） 調査区北西側、1号掘立柱建物の東側で確認した1間×1間の掘立柱建物である。南北1.98m、東西1.88mを測る。主軸は北北東を示す。2号掘立柱建物同様、遺物は小片のため図化し得ないが、近世陶磁器片を確認できることから時期は近世と考えられる。

(秋田)

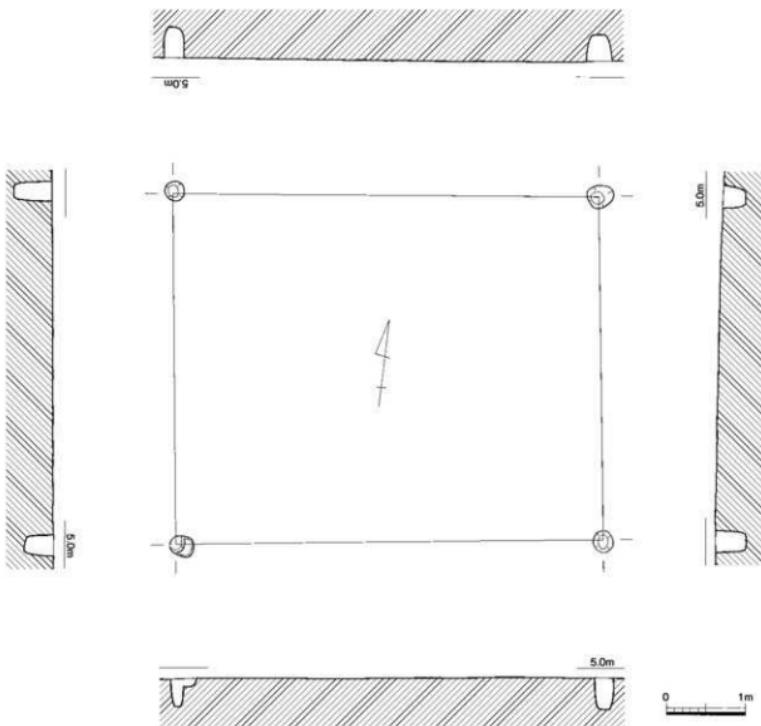
#### 2 土坑

**1号土坑**（第7図1） 調査区南端部中央で確認された大型の土坑で、16号溝と3号土坑を切る。平面は4.80m×2.43mの東西に長軸をもつ楕円形を呈する。検出面から1.35mで底に至る。

**出土遺物**（第8図） 第8図1は陶製の瓶か甕である。底径9.7cmで外面底部付近を除き、全面に鉄釉を施す。底部に粗粒痕がつく。2は土師皿である。1/4程度の破片で、口径7.3cm、器高1.3cm、底径6.0cmを測り、回転糸切痕を残す。3は擂鉢底部である。底径10.0cmである。擂目は8本一單位で櫛状の工具を用いる。4は鉄滓である。断面は椀形で、裏面に炭が付着する。上面には幅2.0cm、長さ6.3cmの板状鉄製品が融着している。長さ48cm、幅8.7cm、厚さ1.8cm、重さ113.8g。5・6は下駄である。5は差歎式の下駄で、長さ20.8cm、厚さ2.0cm、幅は欠損部分が多く復元できない。6は連歎式の下駄で、長さ17.5cm、幅約8.4cm、歎を含む厚さ3.9cmを測る。7は漆器の椀である。内面は赤漆、外表面は黒漆塗りで、中央の円文と三葉文は黄褐色、円文の内部の点は赤漆で表現している。高台径5.0cmで、底部をはじめ全体的に肉厚である。8は横槌である。上端部を欠くが、長さ21.7cm、槌部径5.2cm、柄部径4.0cmである。槌部の径が小さく、叩



第4図 1号掘立柱建物実測図 (1/80)



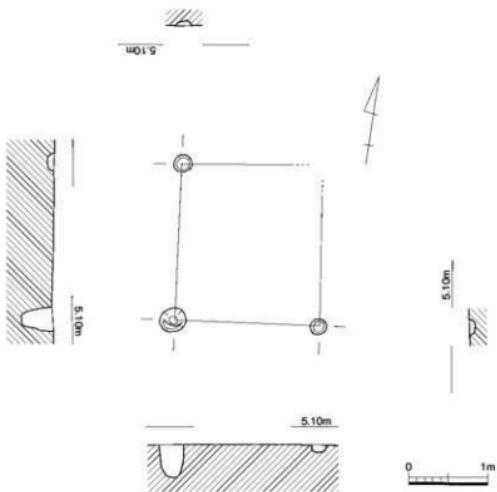
第5図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

いた痕跡があまり見られないことに不安な面がある。9はゆがみの大きい板状部材である。長さ25.7cm、幅7.6cm、厚さ0.9cmで、黒色化している部分が多い。

**2号土坑**（第7図2）調査区南端部付近で確認された土坑で、平面 $1.68\text{m} \times 1.71\text{m}$ の略方形を呈する。検出面から0.33m下が床面である。出土遺物はない。

**3号土坑**（第7図3）調査区の南端部付近で確認された土坑で、1号土坑・1号井戸・1号溝に切られる。平面 $3.42\text{m} \times 3.60\text{m}$ の不整円形を呈すると思われる。検出面から0.63m下が床面である。

**出土遺物**（第9図）第9図1は青磁碗である。口径16.0cmで口縁端部を外側に広げる。全体的に釉を厚くかける。2は白磁碗の高台片である。焼成は甘く、釉も黄灰色を呈する。高台径6.0



第6図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)

cm。3は大型の土鍋である。口径35.5cmを測る。内面は横ハケ、外面は縦ハケを施すが、外面はスス・コゲが厚く付着する。4は瓦質土器の釜である。接合面はないが、1号井戸出土釜と同一個体であろう（第15図9）。直立気味の口縁部をもち、肩部に三巴文のスタンプをうつ。5は瓦質の擂鉢底部である。櫛状工具で12本一単位の擂目を入れる。見込にも×印状に擂目を入れるが詳細不明。6は瓦質の足鍋である。口縁は長く伸び、口縁端部は内部へつまみ出

す。胴部と口縁部の境の内外面には明瞭な稜が入る。底部は欠くが、底部付近に格子タタキが残る。外面はスス・コゲが大量に付着し、内面も黒色化する。長安分類のIV型式である（長安2017）。7は土師器の壺である。1/2弱の破片で、口径11.0cm、器高22cm、底径7.0cmを測る。底部に回転糸切痕を残す。8も壺か。底径10.0cmで回転糸切痕を残す。

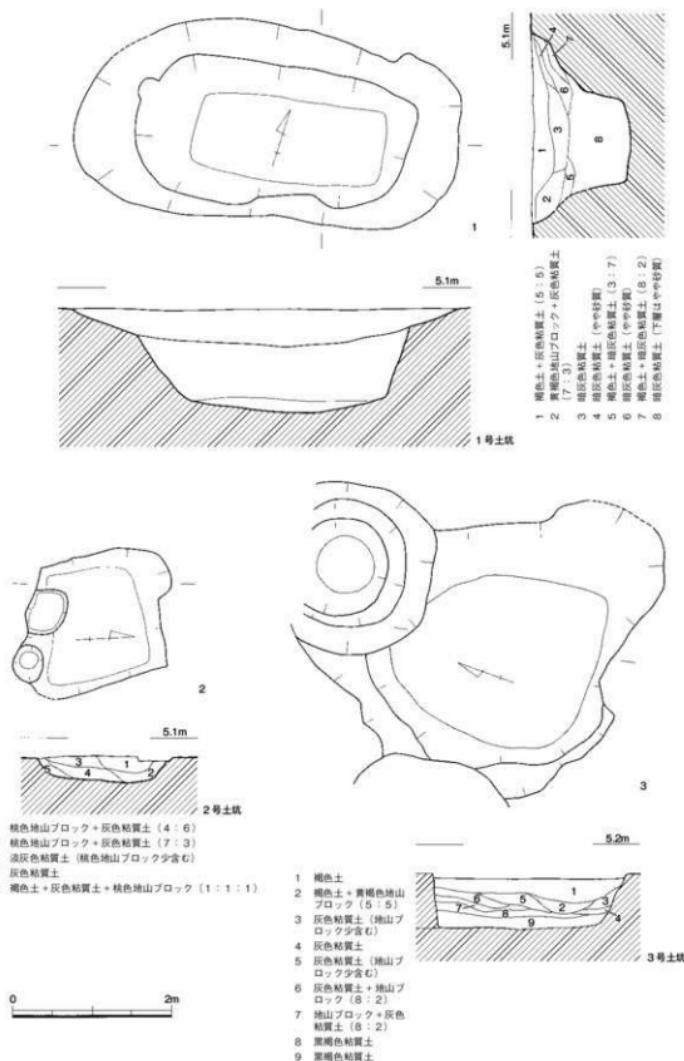
9～11は弥生土器である。9は壺の上半部で、口縁が内傾する。10・11は壺の底部でいずれも平底である。12は楕円形の鉄滓である。現存長7.7cm、幅6.6cm、厚さ3.5cm、重さ275.33gである。

**4号土坑**（第10図1）調査区北端部中央で確認された土坑で、平面208m×160mの方形を呈する。検出面から0.35mで底に至る。埋土に地山ブロックが混在しており、人為的に埋め戻されたと思われる。

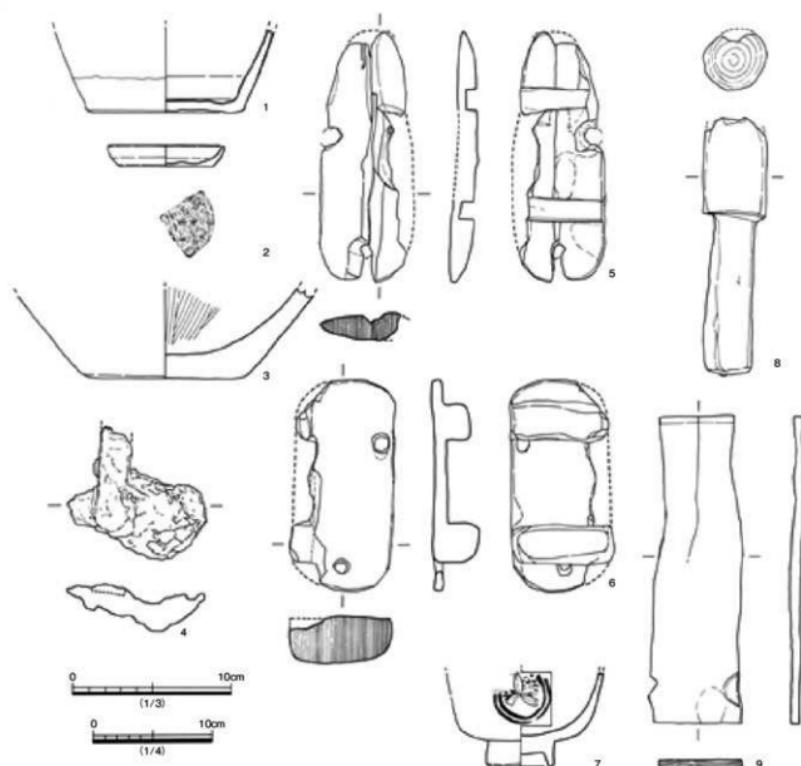
**出土遺物**（第12図1～3）第12図1は陶器の皿で、やや深みがある。外面に透明釉、内面に白色釉をかけ、緑釉と鉄釉で模様を描くが、小片のため詳細不明。口径23.3cm。2は土師皿で、底部に板状圧痕を残す。口径8.7cm、器高1.5cm、底径7.0cm。3は弥生土器の壺である。口径26.1cm。

**5号土坑**（第10図2）調査区北側中央部で確認された土坑で、12号井戸を切る。平面1.94m×2.04mの円形を呈する。検出面から0.46mで底に至る。埋土最下層は黒褐色土であるが、しまりが弱い。

**出土遺物**（第12図4～8）第12図4～7は弥生土器である。4は素口縁の鉢で内面丹塗りである。口径17.9cm。5は壺の口縁部で口径23.9cmを測る。6は口縁部の下に三角突帯がめぐる壺



第7図 1～3号土坑実測図、土層断面図 (1/60)



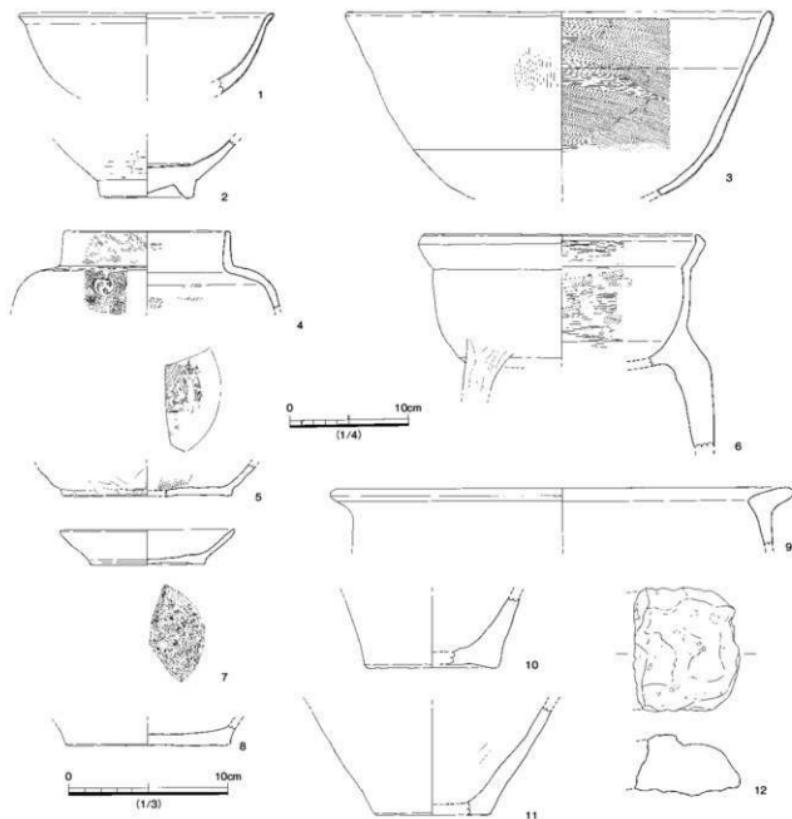
第8図 1号土坑出土遺物実測図 (1/3・1/4)

で、口径23.2cmを測る。7は甕の底部である。底径10.0cm。8は大型の砥石である。長さ35.6cm、幅13.3cm、厚さ5.6cm。重さ3.80kgを測る。砂岩製で縁辺部に円孔があることから、海辺で採集されたものと思われる。図の右上と左下を欠くが、本来は長方形を意識した形と思われる。小口部分は自然面が少し研磨されている程度で、図の上面と右側面を主に用いている。

**6号土坑（第10図3）**調査区北側の東端部で確認された土坑で、6号溝を切る。平面1.60m×1.30mの楕円形を呈し、検出面から0.18mで底に至る。

**出土遺物（第12図9）**第12図9は弥生土器の甕である。平底で、外面に縦ハケを施す。底径7.4cm。

**7号土坑（第10図4）**調査区北端部中央で確認された土坑で、4号土坑の東に隣接する。平



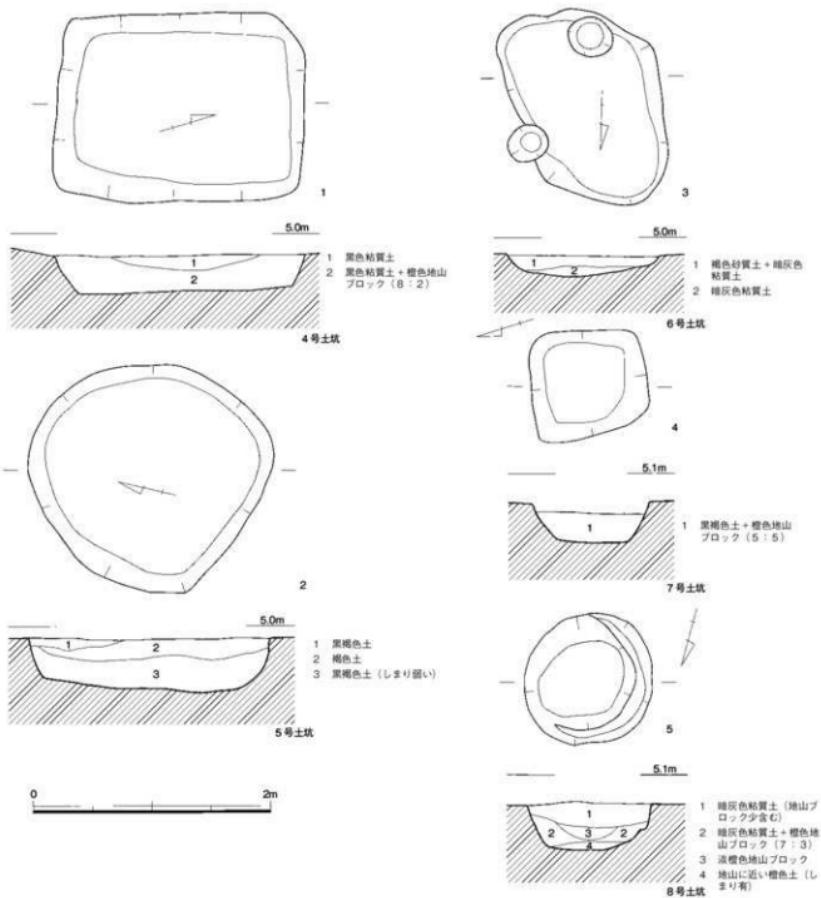
第9図 3号土坑出土遺物実測図 (1/3・1/4)

面 $0.90\text{m} \times 1.00\text{m}$ の方形を呈する。埋土は黒褐色土に橙色地山ブロックが半分ほど混じるもので、人為的に埋め戻したものと考えられる。

**出土遺物 (第12図10)** 第12図10は土師器環である。底径7.0cmで回転糸切痕を残す。

**8号土坑 (第10図5)** 調査区北端部西側で確認された土坑で、直径1.08mの円形を呈する。検出面から0.42mで底に至る。

**出土遺物 (第12図11)** 第12図11は土鍋である。小片のため口径は復元できない。内面に縦ハ

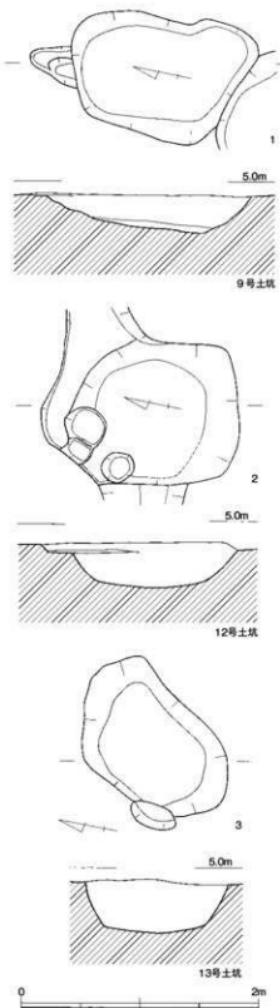


第10図 4～8号土坑実測図、土層断面図 (1/40)

ケと横ハケ、外面に縦ハケを施すが、外面はスス・コゲが付着し不鮮明となっている。

**9号土坑**（第11図1）調査区北側の東端部で確認された土坑で、6号溝を切り、6号土坑に接する。南北方向に長軸をもち、長さ1.40m、幅1.04m、深さ0.34mを測る。

**出土遺物**（第12図12・13・14）第12図12は壺の底部である。平底で外面に縦ハケを施す。底径9.1cm。13は器台の下半部である。全体的に器壁が薄く、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。



第11図 9・12・13号土坑実測図 (1/40)

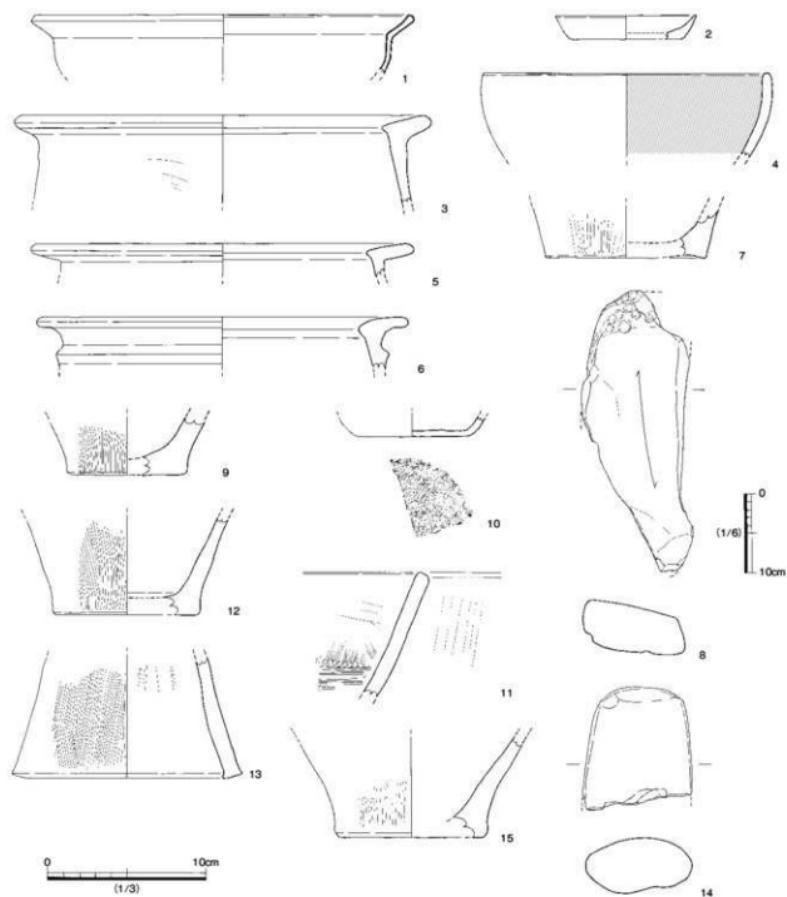
脚径14.4cm。14は太型蛤刃石斧の基部である。現存長7.4cm、幅6.7cm、厚さ3.3cmで、石材は玄武岩である。

**12号土坑** (第11図2) 調査区の南側西寄りで確認された土坑で、1号土坑の西に位置する。南北方向に長軸をもち、平面1.40m×1.20mの楕円形を呈し、深さ0.38mを有する。

**出土遺物** (第12図15) 第12図15は壺の底部である。平底で、外面に縦ハケを施す。底径9.0cm。

**13号土坑** (第11図3) 調査区中央部や北寄りで確認された土坑で、東西方向に長軸をもつ。平面1.50m×0.90mの不整円形を呈し、深さ0.46mを測る。

**出土遺物** (第13図1~12) 1は壺の口頭部である。発達しない鋤先口縁をもち、頭部のしまりは緩い。頭部外面に暗文状の縦ミガキ、内面に横ミガキを施す。内面は淡黄褐色~淡橙色、外面は淡褐色を呈する。口径21.5cm。2~5は壺の上半部である。2は内傾する口縁部をもつもので、その断面は二等辺三角形である。胴の張りは弱い。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。口径24.2cm。3は水平に伸びる口縁をもつもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。口径25.3cm。4は内傾する口縁をもつもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。外面はスヌが付着し、器表面の一部が剥離している。口径26.6cm。5は口径21.0cmの壺で、口縁は水平に伸びる。外面に縦ハケを施し、内面に横ハケが一部残る。6~8は壺の底部である。6はやや上げ底で、外面に縦ハケを施す。底径7.7cm。7は肉厚な上げ底で、底径6.0cmを測る。外面に縦ハケを施す。8は

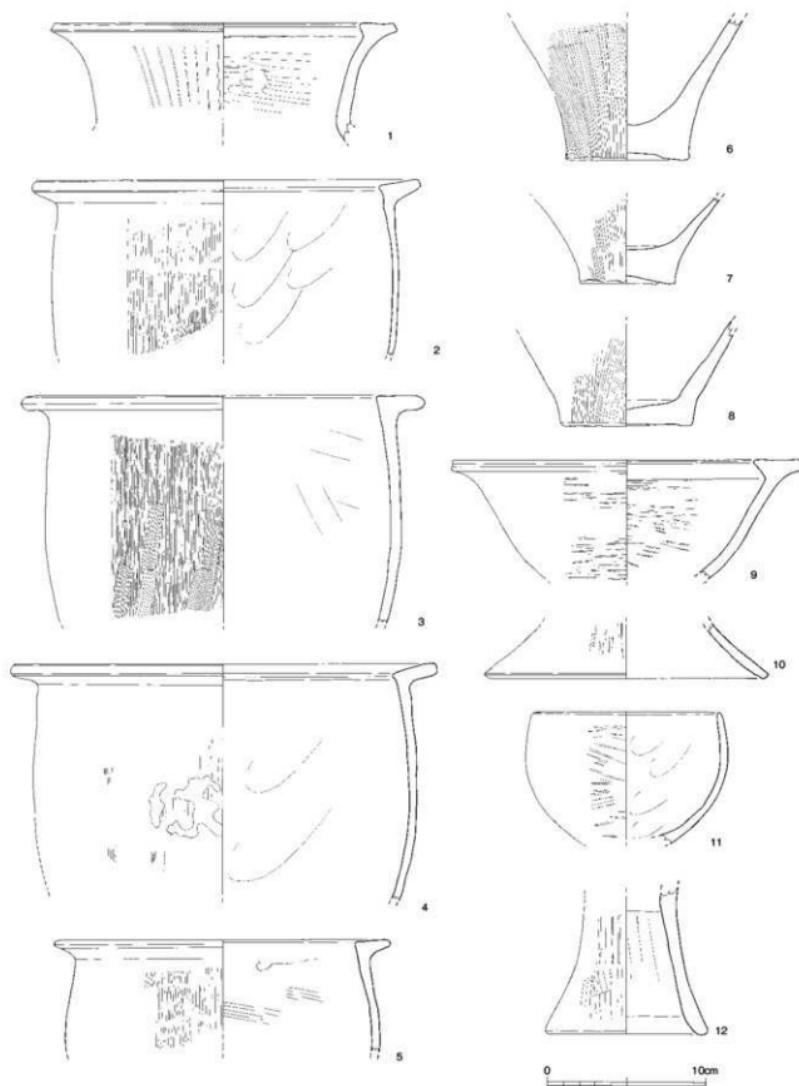


第12図 4～12号土坑出土遺物実測図 (1/3・1/6)

平底で、器壁は薄い。底径8.0cmで、外面に縦ハケを施す。

9は高坏の坏部である。伸びのない鋸先口縁をもち、口縁端部は断面M字を呈する。内外面ともに横ミガキを施す。口径22.0cm。10は高坏の脚裾部か。外面に縦ミガキを残す。脚径17.8cm。

11は碗である。胴が張る球状で、口径12.0cmを測る。外面に横ミガキ、内面に丁寧なナデを施



第13図 13号土坑出土遺物実測図 (1/3)

す。底部を欠くが、少し外反する部分があることから、丸底ではなく、小さな平底が想定される。

12は器台の下半部である。脚径10.3cmで、外面に縦ハケ、内面に縦ナデと横ナデを施す。図の上位と断面に黒変部分があり、二次的な被熱をうけたものであろう。 (平尾)

### 3 井戸

**1号井戸** (第14図1) 調査区の南端部付近で確認された素掘の井戸で、3号土坑を切る。平面は2.25m × 2.16mのほぼ正円形を呈し、検出面から2.25m下が井戸底である。断面は二段あるが、上の段は崩落に伴うものか。湧水が著しく下段以下は袋状に抉れていたが、井戸底付近は砂質の埋土であった。

**出土遺物** (第15・16図) 第15図1は土師器の小型丸底壺である。胴部はやや扁平で外面上部に縦ハケ、下部に横～斜ハケを施す。肩部には円形透を設ける。内面はヘラケズリである。

2は青磁碗の高台部片である。見込部は釉を搔きとっているが、実際にはそこまで釉が広がっていない。外面の釉のかかりに濃淡がある。

3～8は陶器である。3は碗で、内外面に灰色釉をかけるが、外面下部には及ばない。被熱で口縁部の一部を欠く。口径7.2cm、器高5.0cm、高台径3.6cm。4～8は皿である。4は口径12.0cm、器高3.1cm、高台径3.7cmで内外面に淡褐色釉を施すが、外面下部には及ばない。内面見込の3か所に砂目地が残り、高台にも砂目地が残る。5は内外面に黄灰色釉を施す。高台径4.2cmである。6は内外面に灰釉を施し、口径13.8cmで口唇部に溝を巡らす。7はやや丸みをもつ皿の下半部である。見込には砂目地が4か所残り、貫入が多い。高台径4.2cm。8は溝線皿の上半部である。内外面ともに緑灰色釉をかける。口径12.2cm。17世紀中頃～後半か。

9は瓦質の釜である。直立気味の口縁に張りの弱い肩をもち、縦耳をつける。耳の下には低い突帯を巡らせる。外面は横ナデ、内面に横ハケと横ナデを施す。内外面ともに部分的に黒色化しており、割断面にも及ぶことから、火災等の二次的な被熱痕と思われる。10も釜か。破片から復元しているため耳は確認できていない。肩に三巴のスタンプ文を施す。

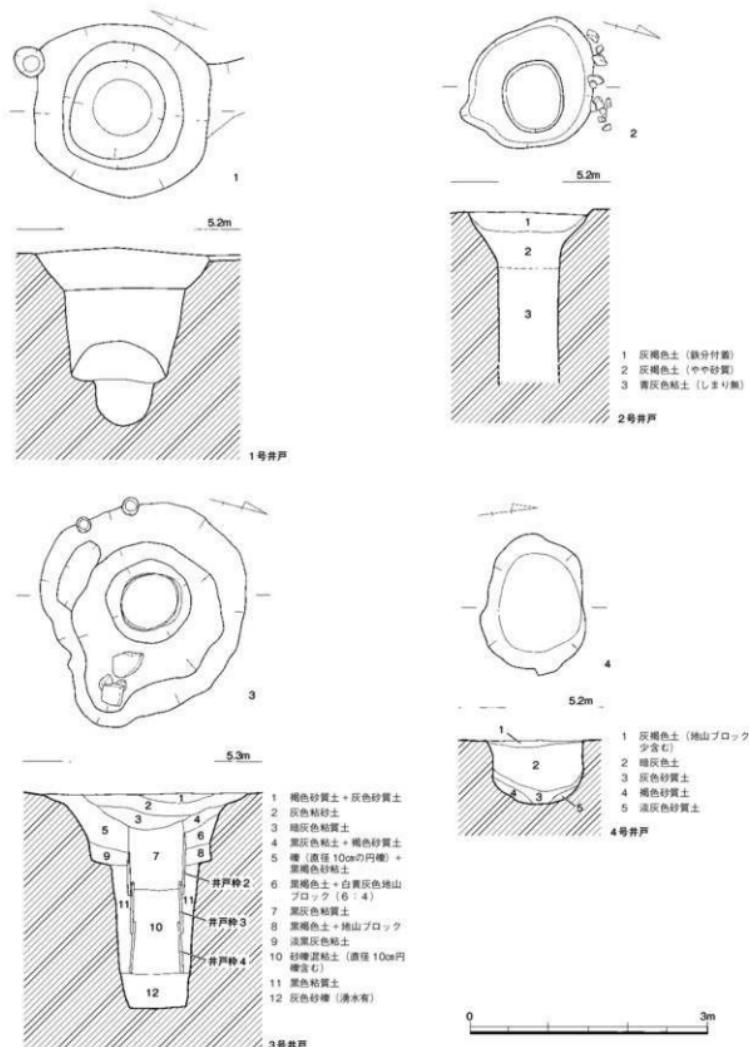
11は土師質の壺で、バケツ状を呈する。口径30.9cm、器高25.0cm、底径22.0cmを測る。素口縁で、口縁部下に三角突帯を巡らせる。内面には白黄灰色の物質が付着している。

12・13は瓦質の壺である。12は外面にタタキの後にナデ、内面に横ハケを施すもので、底径11.8cmを測る。13は小片であり、底部も薄いため底径に不安が残るが、24.3cmに復元された。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

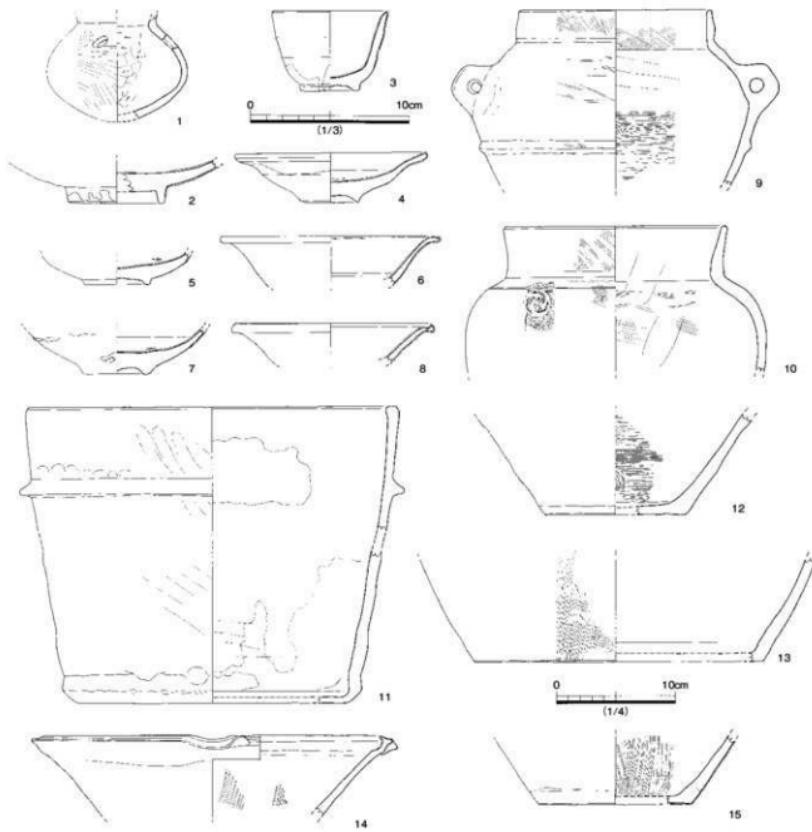
14・15は陶製の擂鉢である。14は口径30.3cmを測り、内外面に突出させる。口縁部には鉄釉をかけ、櫛状工具で擂目を入れ、端部をそろえない。15は擂鉢の底部である。硬質陶製で内面は灰色、外面は全面に鉄釉がかかる。内面の擂目は粗い印象をうける。底径12.9cm。

第16図1は煙管である。火皿は少し歪んでおり、内部には灰が付着している。福岡市埋蔵文化財センターで科学分析をしていただいたところ、材質は真鍮製で、火皿と胴部は蝋付けと呼ばれる方法で接着されていることが判明した。火皿付け根の補強帯やその跡痕は確認できず、小泉編年IV期のものでおおよそ18世紀頃と考えられる(小泉1983)。また胴部に近い部分には敲打痕が複数確認できる。

2は鉄滓である。長さ3.9cm、幅4.5cm、厚さ2.3cm、重さ24.7gで、左側に釘か刀子状のものを



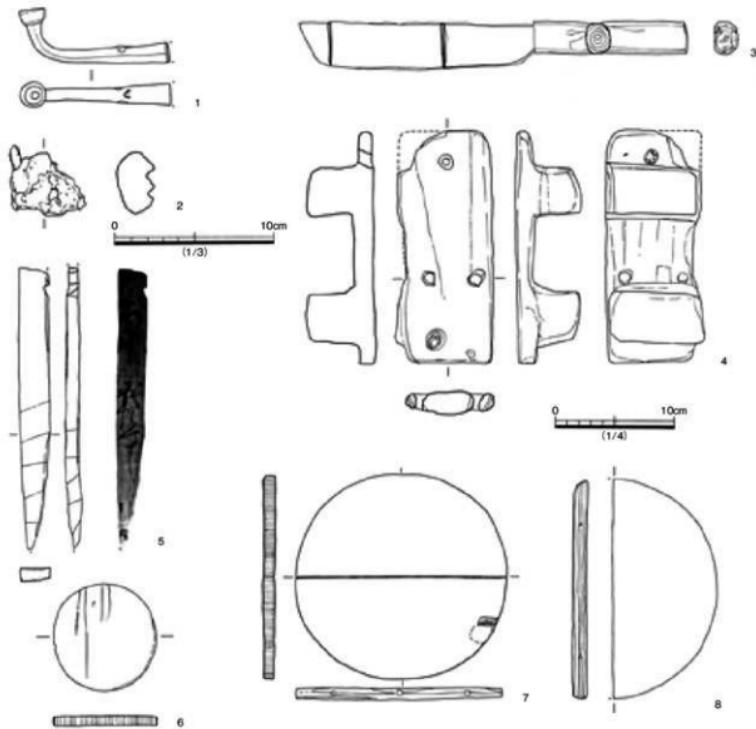
第14図 1～4号井戸実測図、土層断面図 (1/60)



第15図 1号井戸出土遺物実測図1 (1/3・1/4)

含む。全体的に黒色の部分が多く、中央部分は流れたような状態で、右側は暗紫色を呈する。

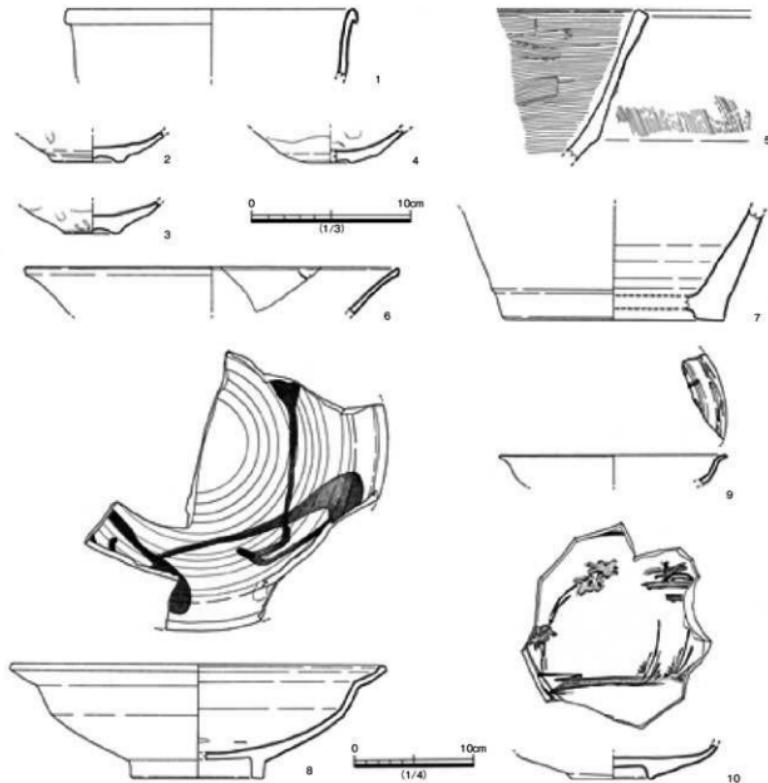
3は包丁である。柄を伴う状態で出土した。全長32.6cm、刃部長19.7cm、刃部幅3.7cm、刃部厚2.5mm、柄長12.9cm、柄幅2.8cmである。茎は直径3～4mm程度で、柄の基部でも確認されることから、少なくとも茎の長さは12.9cm以上と判断される。4は連歯式の下駄で、長さ19.5cm、幅8.0cm、歯を含めた厚さ5.5cmを測る。平面は前方の角が丸みを帯びるが基本的には長方形を呈す



第16図 1号井戸出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

る。なお、鼻緒の孔にはひもが残る。5は本筒である。現存長17.7cm、現存幅1.9cm、厚さ0.8cmを測る。右側面上位に抉りがあることから、上の欠損部は小さいと思われる。左側は欠損部分が多く、下部は尖らせたものか。墨書きが認められるが一番上の文字は判読不能で、それ以下「□左衛門」とあり、□は茂の可能性がある。荷札の一種か。6は小型の曲物の底板である。直径8.9cm、厚さ0.8cm。側面の4か所に目釘が残る。7は曲物の底板で組み合わせ式である。接合するための目釘が3か所で残る。直径17.6cm、厚さ1.2cm。8は曲物の底板である。組み合わせ式で2か所に目釘が残る。長さ18.4cm、幅8.8cm、厚さ1.6cm。

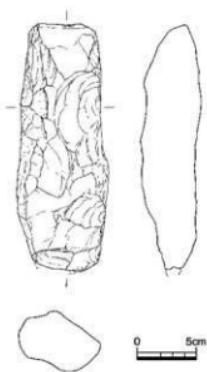
**2号井戸**（第14図2）調査区中央部で確認された素掘の井戸で、9号溝の合流部に接する。平面は1.59m×1.56mのはば正円形で、井筒は0.75～0.9mの楕円形を呈する。井戸の北側に長



第17図 2号井戸出土遺物実測図1 (1/3・1/4)

さ10~20cmの石が散乱していたが、井戸に伴うものかわからない。検出面から21m下まで掘り下げたが、湧水が著しく、壁面にヒビが確認されたため、掘り下げを中断した。

**出土遺物（第17・18図）** 第17図1は陶器の鉢で玉縁の口縁をもち、上端部は露胎である。内外面ともに透明釉をかける。口径18.0cm。2~4は陶器皿の底部片である。2の見込には砂目地が面的に残り、釉に貫入が多い。外面は一部釉のたれが残るが、基本的に露胎。高台径4.5cmを測り、高台内側に砂目地が残る。3は見込みの4か所に砂目地が残る。外面は露胎で、点々と釉が付着する。高台径3.7cm。4は灰色釉をかけるが、一部気泡が混じり焼成に失敗したのか。



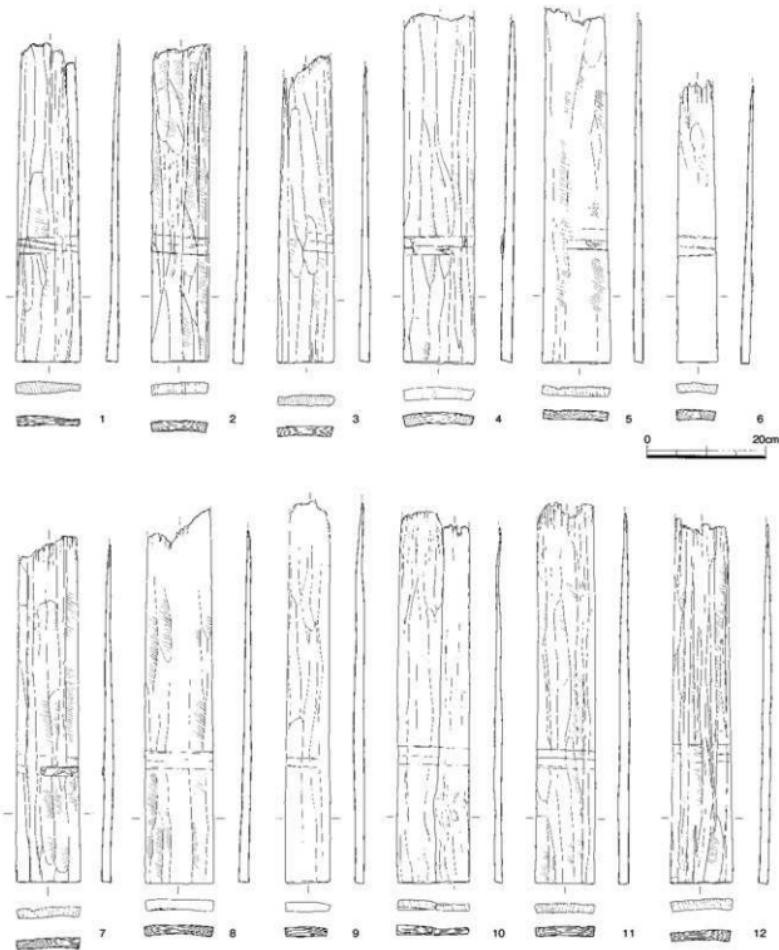
第18図 2号井戸出土遺物実測図2 (1/4)

高台径3.1cm。5は土鍋である。小片であるため断面のみ図化したが、口径が大きく、浅いものか。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。外面にはスヌ・コゲが付着する。6は陶器の皿か。内外面ともに透明釉をかける。端のほうに線が見えるが、欠損部分が多く詳細不明。口径31.5cm。7は陶器壺の底部である。内面に強い回転ナデ痕を残す。外面最下段には強いナデを施し、段をなす。底部は高台を伴うか。8は陶器の大型皿である。口径31.7cm、器高9.6cm、高台径11.2cmを測る。大型の高台から丸みを持つつ広がり、胴部で上方に屈曲し、口縁部が広がる。外面全面には鉄釉をかけ、内面には鉄釉と白釉をハケで塗り分けたのち、その上に黒緑色の釉で文様を描く。見込には砂目地が残る。17世紀後半で。9は染付の皿の口縁部片である。10は染付の皿の底部付近である。見込部に風景を描く。第18図は太型蛤刃石斧の打裂段階の未完成品である。長さ20.7cm、幅7.6cm、厚さ4.7cm、重さ1.18kgで、玄武岩製である。図の右側上部の打裂は最も新しいもので、大きく抉りすぎたため廃棄されたものか。基部付近は石材の風化の様子が異なるため、転石の表面の可能性がある。左側面には敲打痕が残る。混入品である。

**3号井戸**（第14図3）調査区北側東端で確認された井戸で、16号溝を切る。平面29.7m×2.64mのやや東西に長い円形を呈する。東側は地山を掘り下げて階段状に石を配する。井筒掘方は直径1.11～0.75mで下に行くほど狭くなる。検出面から2.73m下が井戸底で、底から0.45mほど灰色砂礫を敷き詰め、その上に直径0.6mの結筒を四段重ねて井戸枠とする。なお、最上段の結筒は攪乱を受け、部材1点のみの確認であったが（第26図1）、以下の三段は一部風化が進む個所もあるものの、全体的に遺存状況は良かった（以下、上から井戸枠1～4と称する）。ただ、竹製の簾が完全に腐食しており、取り上げ時に断片化してしまった。結筒を井戸枠とするものは11世紀後半から博多や大宰府で確認され、13世紀後半では北部九州で展開し、13世紀後半から14世紀にかけて本州でも確認されだし、15世紀以降に全国展開するが（鈴木2019）、本例は出土遺物から16世紀後半に位置付けられ、全国的な結筒普及期の井戸といえる。ただ、結筒を井戸枠とする井戸は糸島市内では初めての確認事例であることから、部材を取り上げ、実測を行った（第19～24図）。本来、井戸枠は造構として報告すべきであるが、個々の部材については次の遺物の項で報告する。まとめを先に述べると、本例は底板等をはめ込む加工がなく、部材の端部加工が粗く、面がそろわないことから結筒ではなく結筒であること。また、結筒は23～24点の部材からなり、側面加工に鏝状工具を用いることから、結筒そのものも15世紀代以降の特徴を示すことが確認された。なお、最下層よりカメ類の甲羅が出土している。詳細は第5章で屋山洋氏にまとめていただいた。

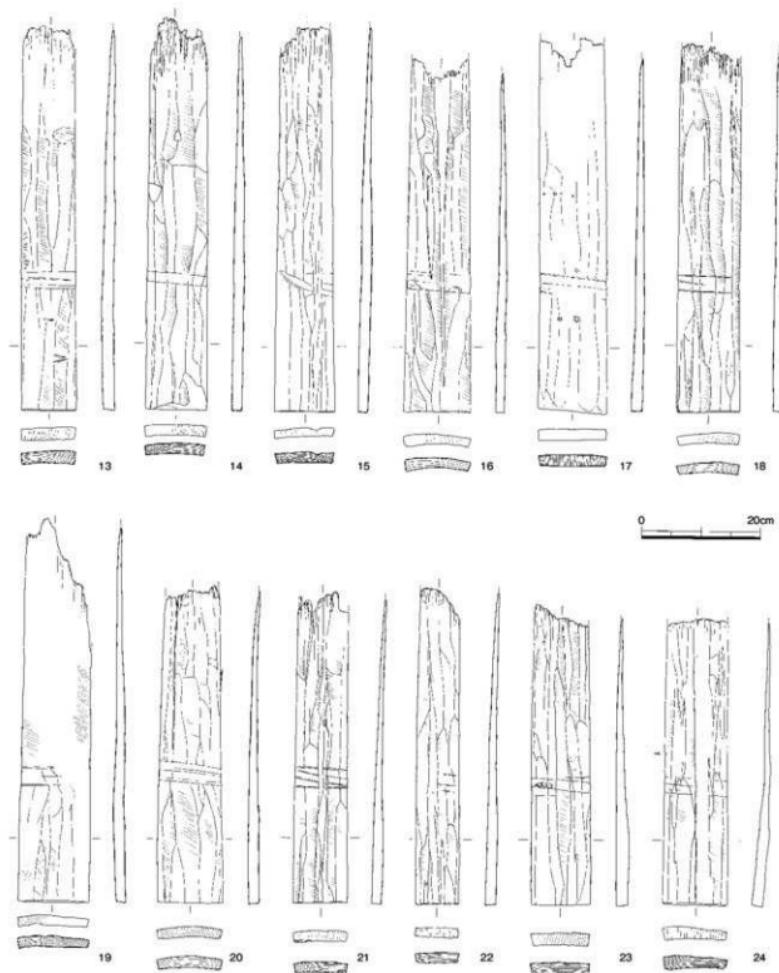
**出土遺物（第19～26図）** 最上段の井戸枠は後世の攪乱で大半の部材はなくなっているが、第26図1のみが確認された。現存長17.7cm、幅9.3cm、厚さ3.2cmを測る。

井戸枠の部材は外面、縦断面、下辺の小口の加工痕と年輪を図化している。第19・20図は井戸枠2の部材である。24枚の部材で一つの組となる。すべての上端部は腐食しており詳細は不



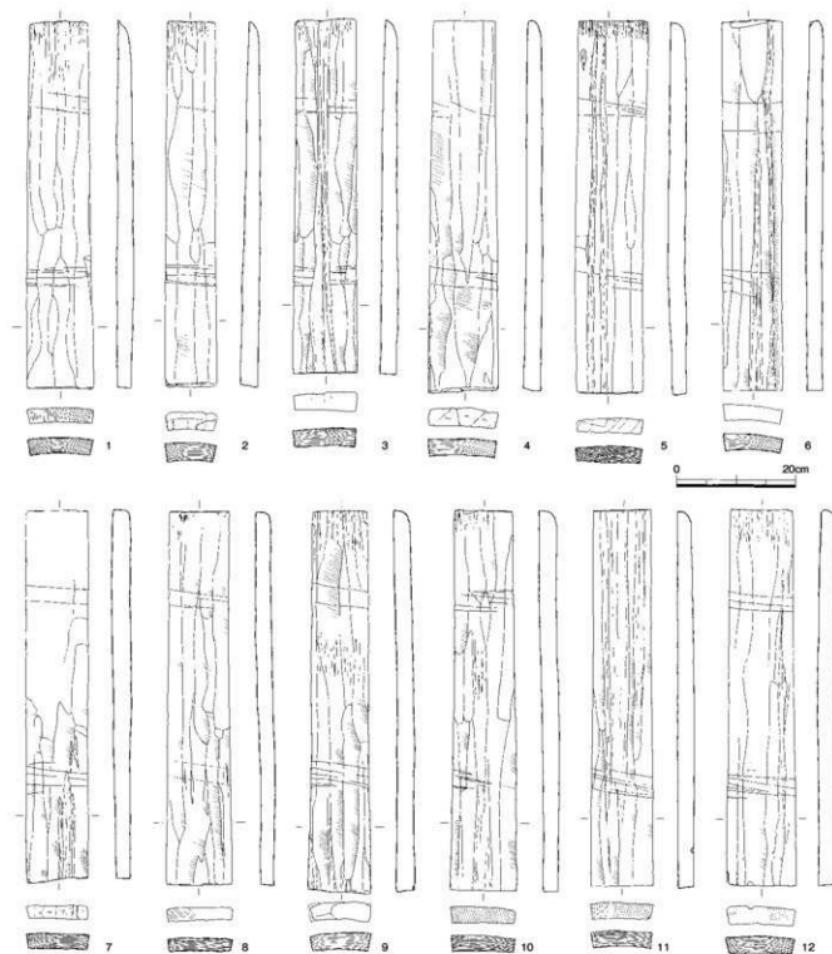
第19図 3号井戸井戸枠2実測図1 (1/8)

明であるが、最も長い第20図14は66.2cmであることから、67cm前後に長さの平均がくる可能性がある。幅は最も狭い第19図6が6.9cm、最も広いものは第20図19の12.0cmであり（第19図10が12.2cmであるが、左右に割れており本来の幅はもう少し狭い）、10cm台のものが多い。厚さは



第20図 3号井戸井戸枠2実測図2 (1/8)

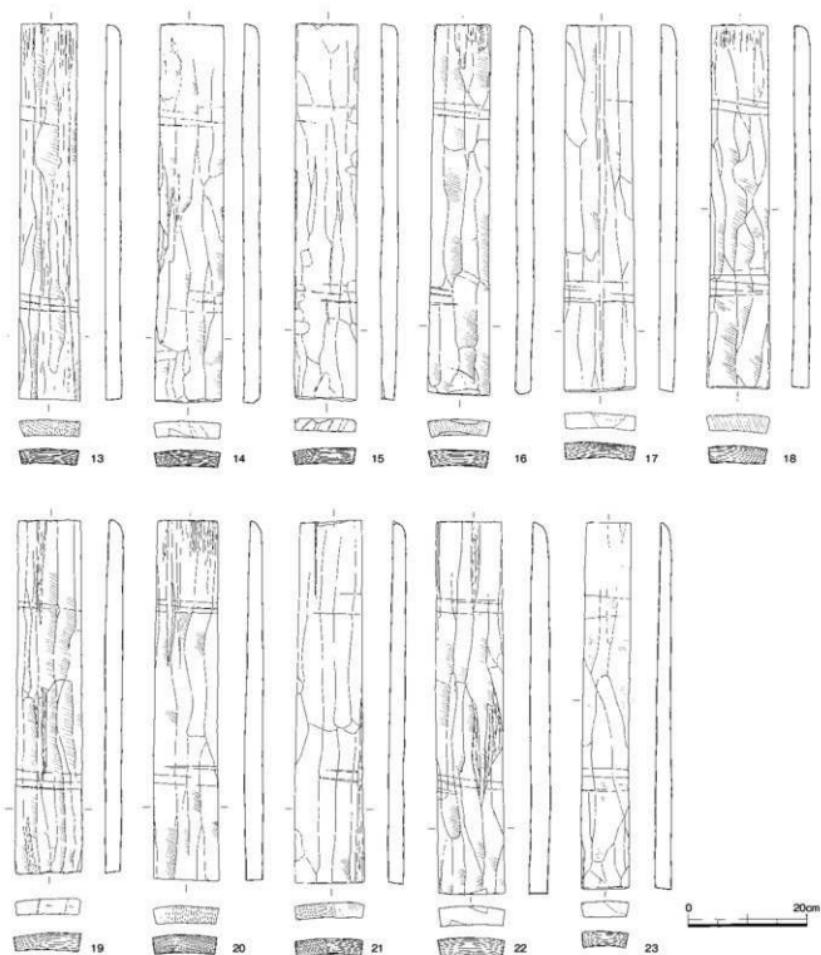
第20図23が2.1cmを測るほかは1.5~2.0cmに収まる。井戸枠2の部材は外面にヤリガンナ痕を残すが、内面は平滑に仕上げている。側面には鍛状工具痕を残す。部材は基本的に柾目板を用いるが、第20図17は板目板である。この部材は所々に円孔があることから、転用された部材の可能



第21図 3号井戸井戸枠3実測図1 (1/8)

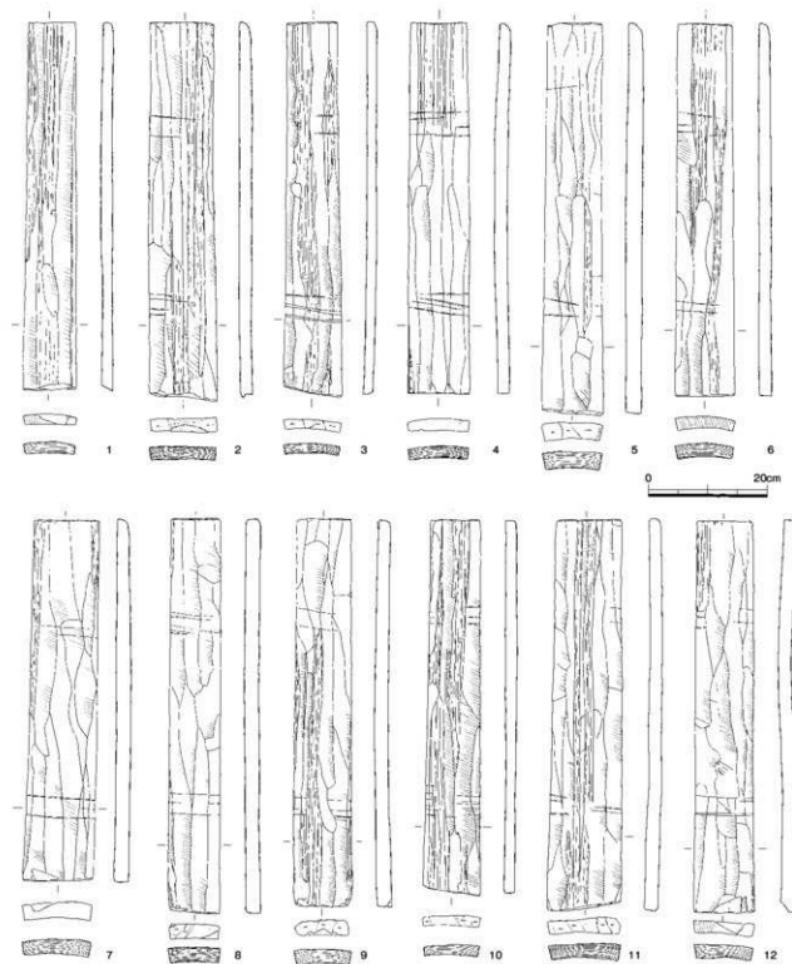
性がある。下端部から20cm程度の箇所に竹製の籠が残っていたが、取り上げ時に細片化してしまった。第19図4には部材に籠が付着しており、幅1.6cm程度の籠を二重に回している。本来は上方にも存在したはずであるが、痕跡は認められない。下辺小口部分にも工具痕を残す。

第21・22図は井戸枠3の部材で、部分的に腐食している箇所があるが、全体的に残りがよい。



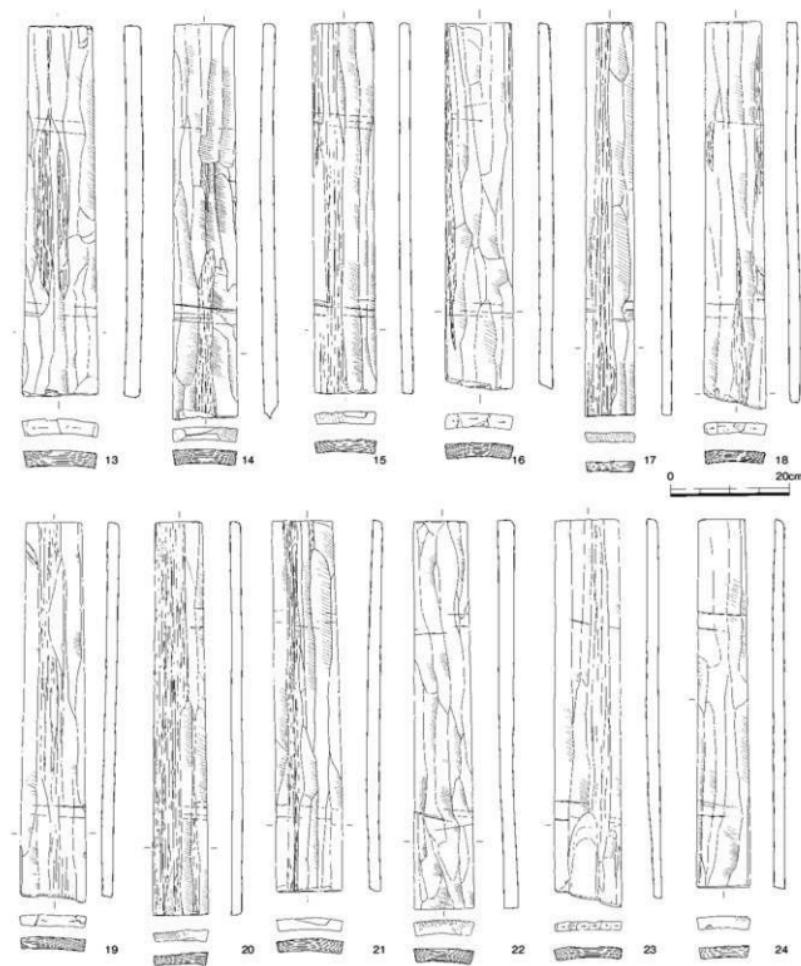
第22図 3号井戸井戸枠3実測図2 (1/8)

23枚の部材で一つの組となる。長さは第21図3が59.6cmと最も短く、第21図9が64.6cmと5cmの差がある。部材それぞれの縦断面形を見てわかるように上辺は内面を少し削り込み丸みを帯びさせるなど丁寧な加工を施すことに対し、下辺は工具の削り痕を明瞭に残すことから、基本的に



第23図 3号井戸井戸枠4実測図1 (1/8)

上辺を合わせてくみ上げ、下辺の若干の凹凸は気にしなかったようだ。また、内面には桶の底板をはめた痕跡が認められないことから、これらは井戸枠専用の結筒であると判断される。幅は10.0~12.0cmの間に集中し、厚さは2.6~3.4cmと全体的に肉厚である。表面はヤリガンナ痕を残



第24図 3号井戸井戸枠4実測図2 (1/8)

すが製材時にできた割裂痕も残る。側面には鎌状工具痕を残し、下辺には横方向の削り込みが認められるが、第22図14・16・22のように切り込みをもつものもある。

第23・24図は井戸枠4の部材である。24枚の部材で一組となる。長さは第24図16が61.7cmと最も短く、第24図14が66.8cmと長く、両者には5.1cmの差がある。表面、側面の加工は井戸枠3

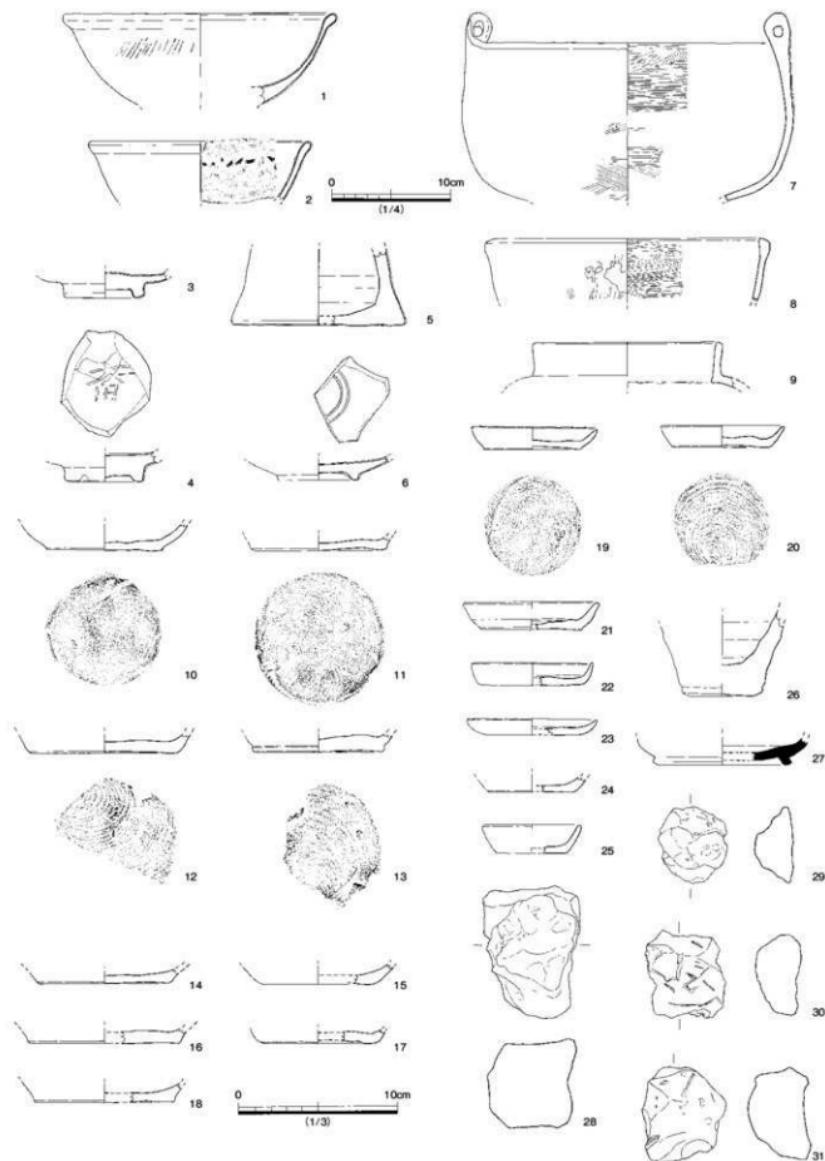
とほは同じであるが、下辺の加工はより雑な印象を受ける。とくに第24図16や18・23などは下辺が斜めになっており、井戸の最下層に配する結筒ということで人目につかないという意識と地面に食い込ませて固定する意図が働いたものか。幅は10.0~128cmで、厚さは1.9~28cmの幅がある。また、約半分の部材に下辺への切り込みがある。井戸枠2~4の計測値は表1に示している。

第25図1は青磁碗である。全体的に丸みがあり、口縁端部は玉線状になる。オリーブ色の釉をかける。口径17.2cm。2は白磁碗である。口径14.0cmで、口縁端部は小さな玉線状になる。内面上部には花弁状のスタンプ文を施すが詳細不明。3は青磁碗の底部である。高台径は5.1cmで、豊付は部分的に露胎である。4も青磁碗の底部で、見込に文字状のスタンプ文を施す。高台径は5.0cmで豊付は露胎である。5は高麗青磁梅瓶で底径11.0cmを測る。内傾しながら立ち上がる。内面と底部裏面は露胎であるが、底部裏面には砂目地が残る。6は朝鮮雜釉陶器皿の破片である。見込み部に二重の円文を施すが象嵌にはなっていない。外面の釉は白色化しており、焼成不良の可能性がある。高台径5.1cm。

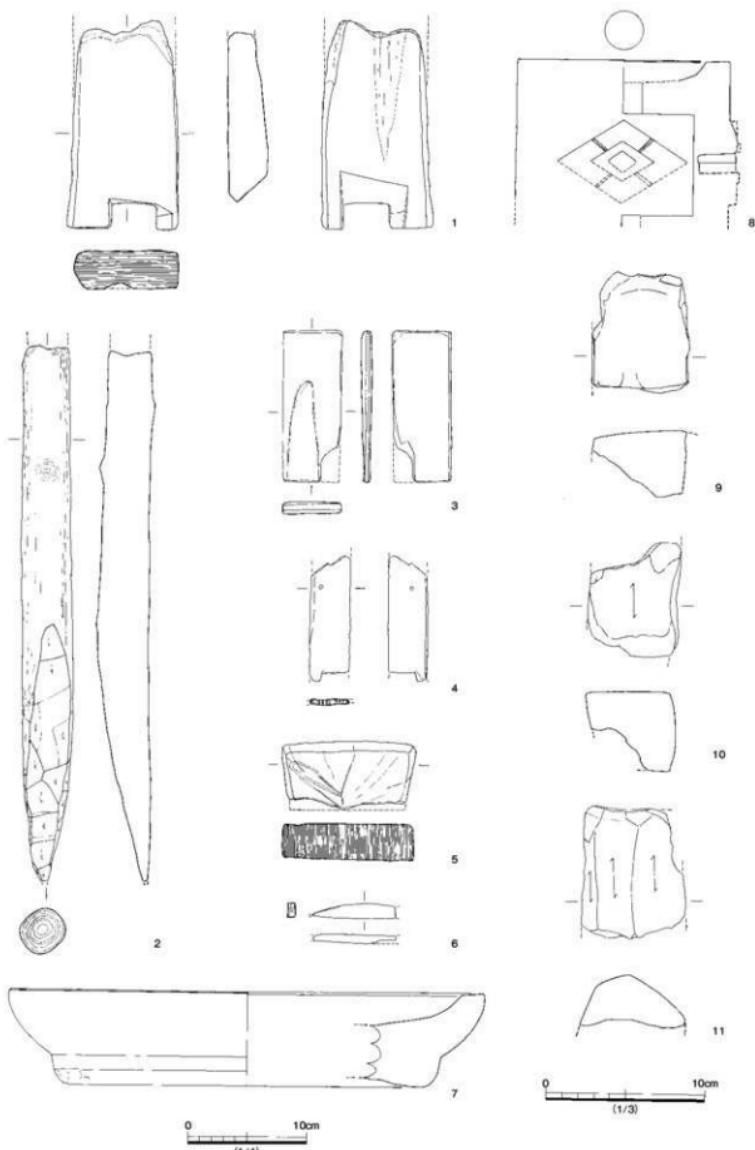
7は耳付土鍋で、口径27.4cmを測る。内外面ともに横ハケを施すが、外面はススやコゲが付着する。とくに上半部に著しい。8は土鍋の口縁部片で外面にスス・コゲが付着する。外面に継ハケ、内面に横ハケを施し、口径24.0cmを測る。9は土釜の口縁部か。口径16.0cm。10~18は土師器の坏である。10は底径7.2cmで、回転糸切痕を残す。11は底径8.0cmで、回転糸切痕を残す。12は底径9.3cmで、回転糸切痕を残す。13は底径8.0cmで、回転糸切痕を残す。底部が肉厚で、立ち

表1 3号井戸出土井戸枠部材計測表

博国	件	部位	長さ	幅(上)	幅(下)	厚さ	抜き	備考	博国	件	部位	長さ	幅(上)	幅(下)	厚さ	抜き	備考	
19-1	2	3	540	-	108	19	-	上端を欠く	22-13	3	13	635	93	302	27	-		
19-2	2	2	530	-	85	17	-	上端を欠く	22-14	3	14	640	107	311	29	下外	下端は手削で加工	
19-3	2	1	520	-	95	17	-	上端を欠く	22-15	3	15	636	105	303	28	-	下端は手削で加工	
19-4	2	4	588	-	120	17	-	上端を欠く	22-16	3	16	626	92	305	29	T外		
19-5	2	2	600	-	114	15	-	上端を欠く	22-17	3	17	618	108	320	28	-	下端は手削で加工	
19-6	2	1	47.0	-	6.9	15	-	上端を欠く	22-18	3	18	612	94	307	28	-		
19-7	2	5	57.9	-	107	16	-	上端を欠く	22-19	3	19	597	102	310	29	-	下端は手削で加工	
19-8	2	6	600	-	115	17	-	上端を欠く	22-20	3	20	609	102	311	30	-		
19-9	2	7	648	-	76	16	-	上端を欠く	22-21	3	21	613	104	317	26	上外		
19-10	2	8	8.9	602	-	122	12	-	上端を欠く	22-22	3	22	634	110	113	34	T内凹	
19-11	2	10	645	-	100	16	-	上端を欠く	22-23	3	23	619	76	80	30	-	下端は手削で加工	
19-12	2	11	607	-	105	16	-	上端を欠く	23-1	4	1	621	80	90	20	下外		
20-13	2	12	644	-	92	19	-	上端を欠く	23-2	4	2	635	103	114	21	T内	下端は手削で加工	
20-14	2	13	662	-	104	17	-	上端を欠く	23-3	4	3	624	85	94	17	-		
20-15	2	14	650	-	102	17	-	上端を欠く	23-4	4	4	624	96	104	23	-		
20-16	2	15	590	-	114	16	-	上端を欠く	23-5	4	5	657	93	104	28	-	下端は手削で加工	
20-17	2	16	595	-	115	18	-	上端を欠く・椎貝殻(軸用具 か)・穿孔有り	23-6	4	6	626	93	101	21	-		
20-18	2	17	616	-	101	17	-	上端を欠く	23-7	4	7	610	110	119	25	T外		
20-19	2	18	650	-	120	18	-	上端を欠く	23-8	4	8	667	84	87	24	-	下端は手削で加工	
20-20	2	19	528	-	110	18	-	上端を欠く	23-9	4	9	655	92	100	25	-	下端は手削で加工	
20-21	2	20	526	-	91	17	-	上端を欠く	23-10	4	10	630	84	92	19	-	下端は手削で加工	
20-22	2	21	533	-	73	17	-	下端は手削で加工・上端を欠く	23-11	4	11	657	112	124	24	-	下端は手削で加工	
20-23	2	22	508	-	99	21	-	上端を欠く	23-12	4	12	663	93	103	26	T外		
20-24	2	23	485	-	109	18	-	上端を欠く	23-13	4	13	628	102	128	27	-	下端は手削で加工	
21-1	3	1	629	98	112	28	-		23-14	4	14	668	102	110	24	T内凹		
21-2	3	2	617	81	86	30	-	下端は手削で加工	24-15	4	15	640	104	102	19	T外		
21-3	3	3	596	102	110	29	-		24-16	4	16	617	112	114	23	-	下端は手削で加工	
21-4	3	4	624	106	118	30	-	下端は手削で加工	24-17	4	17	666	80	84	17	-		
21-5	3	5	629	116	111	29	-	上端が幅広	24-18	4	18	644	96	104	18	-	下端は手削で加工	
21-6	3	6	625	102	100	29	上外	24-19	4	19	634	95	112	19	-	下端は手削で加工		
21-7	3	7	625	104	102	32	-	下端は手削で加工	24-20	4	20	665	80	92	17	T内		
21-8	3	8	633	101	111	28	-		24-21	4	21	622	102	110	22	T外		
21-9	3	9	646	99	106	32	-	下端は手削で加工	24-22	4	22	656	91	101	28	-		
21-10	3	10	643	98	111	29	上外	24-23	4	23	663	108	113	21	T外	下端は手削で加工		
21-11	3	11	637	97	104	28	-	内面下部に朱質漆の凹孔	24-24	4	24	624	78	91	18	T内		
21-12	3	12	637	104	117	30	-											



第25図 3号井戸出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



第26図 3号戸戸出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

上がり部の調整が粗い。14の底径は8.0cm、15の底径は7.0cm、16の底径は9.4cm、17の底径は7.0cm、18の底径は8.8cmで、いずれも回転糸切痕を残す。19～25は土師皿である。19は井戸の最下層から出土した完形の土師皿で口径7.9cm、器高1.4cm、底径6.0cmを測る。底部は回転糸切痕を残し、内面見込を中心に黒色化しており、灯明皿の可能性がある。20はほぼ完形の土師皿で口径7.8cm、器高1.4cm、底径6.1cmを測る。底部は回転糸切痕を残す。21～25は1/4程度の破片から復元したものである。21は口径8.3cm、器高1.7cm、底径6.4cmで回転糸切痕を残す。22は井戸掘方内から出土したもので口径7.6cm、器高1.4cm、底径6.4cmで、底部は板状圧痕を残す。23は口径8.0cm、器高1.2cm、底径6.0cmで、回転糸切痕を残す。24は底径5.4cmで回転糸切痕を残す。25は口径6.1cm、器高1.8cm、底径4.4cmを測る。

26は陶器の小壺であるが、径はやや不安が残る。内面に回転横ナデ痕を明瞭に残す。底部は凹凸がある。底径5.0cm。27は須恵器の坏身である。混入品と考えられる。28～31は焼土塊である。

第26図2は杭で樹皮が残る直径4.2cmの棒の先端を刀子状の工具で削り、尖らせている。基部は欠けているが45.1cmを測る。3・4は板状の部材である。3は長さ12.7cm、幅4.9cm、厚さ1.1cm、4は現存長10.4cm、幅3.4cm、厚さ0.5cmで、上部に孔をもつ。5は肉厚の部材である。現存長5.6cm、幅11.1cm、厚さ3.1cm。6は板材片で、現存長7.2cm、幅1.2cm、厚さ0.75cm。

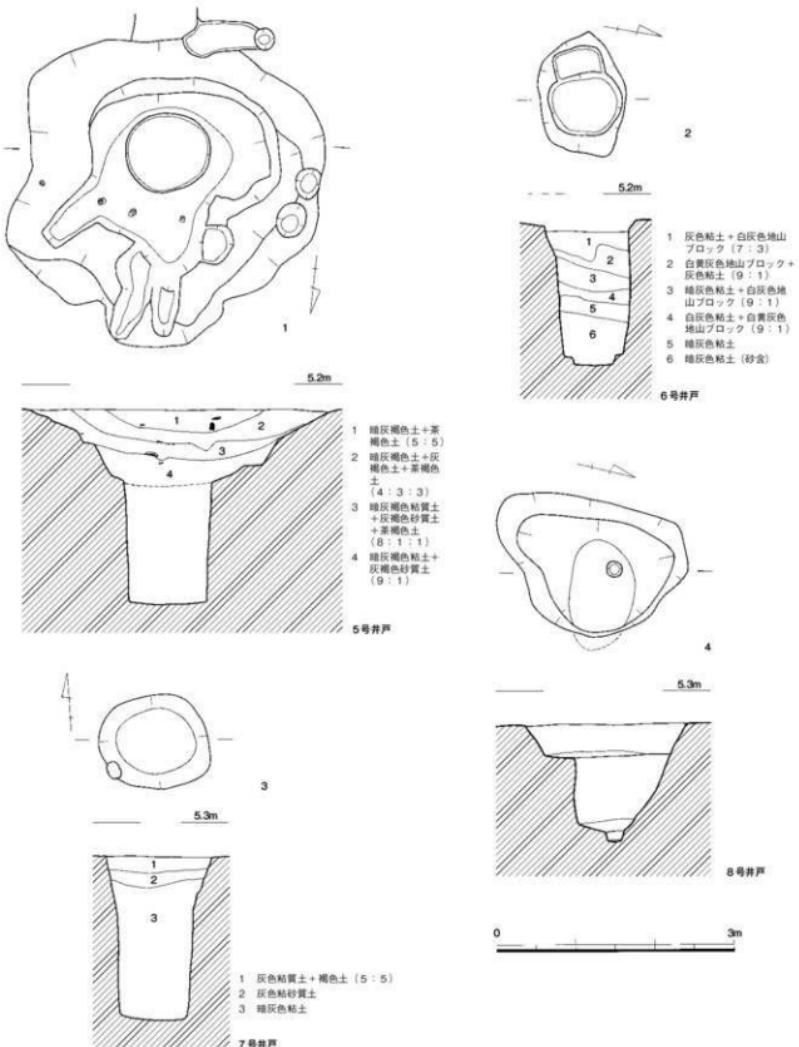
7は茶白の下臼で受け皿と台部が残る。受け皿径40.0cm、台部径30.0cm。8は茶白の上臼である。直径18.0cm、供給孔径3.2cmで、菱形の台座文様をもち、挽木孔も菱形文に合わせている。9～11は砥石である。いずれも被熱のため欠けや変色がみられる。

**4号井戸**（第14図4）調査区の北寄りで確認された井戸で、平面は18m×1.2mの楕円形を呈し、検出面から0.81m下が底になる。湧水は認められるが、ほかの井戸と形状が大きく異なることから、土坑の可能性もある。

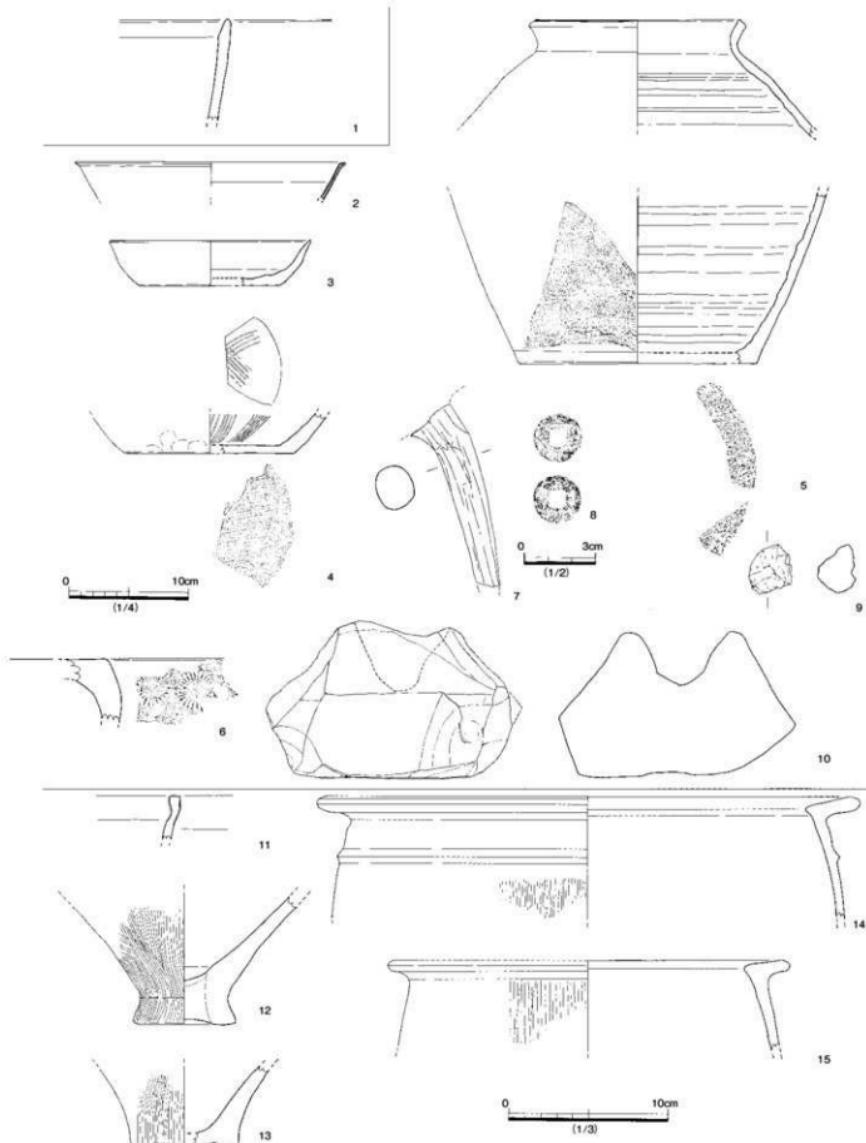
**出土遺物**（第28図1）第28図1は土鍋の口縁部である。小片のために口径は復元できなかつたが、外面にはススやコゲが付着し、内面口縁部直下に段がつく。

**5号井戸**（第27図1）調査区の南側中央部で確認された素掘りの井戸で、16号溝を切る。平面は3.60m×3.90mの不整円形を呈する。検出面から0.72m下がテラス上になっており、本来は二段掘りの井戸であったと思われる。井筒は1.11m～0.99mで直線的に窄まる。検出面から2.49m下が底で、湧水が著しい。

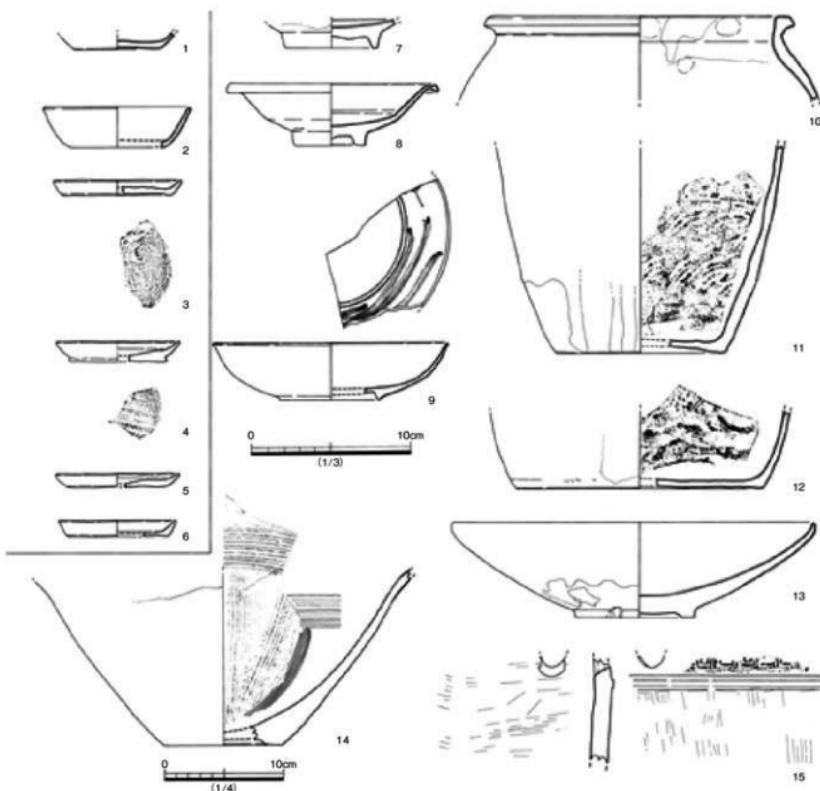
**出土遺物**（第28図2～10）2は白磁碗の口縁部である。口径17.0cm。3は土師器の坏である。口径12.5cm、器高2.8cm、底径8.7cmを測り、見込にスス状のものが付着していることから、灯明皿として用いた可能性もある。4は瓦質の擂鉢で被熱のため内面にもスス状のものが付着する。櫛状の工具で6本一単位の擂目を入れ、見込にも×状の擂目を入れる。5は須恵器質の壺で、上下の接点はないが、胎土の質感や調整から同一個体と判断した。やや大ぶりの平底から直線的に広がりながら立ち上がるもので、外面には叩板の痕が残る。内面にはやや強で強い回転ナデを施す。上半部も同様で、内面には強い横ナデを施し、頸部から口縁部にかけて弱い横ナデを施す。口縁部は短く広がりも弱い。口縁端部はやや丸みを帯びるが、口縁下端は鋭い。なお、底部裏面には糊の圧痕が多く残る。6は瓦質の浅鉢形火鉢で、丸みのある胴部と内側に突出する口縁部をもつ。胴部最上段に菊花文をスタンプする。7は瓦質の足鍋の足部でその先端を欠く。上半部にはススが付着する。



第27図 5～8号井戸実測図、土層断面図 (1/60)



第28図 4～6号井戸出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)



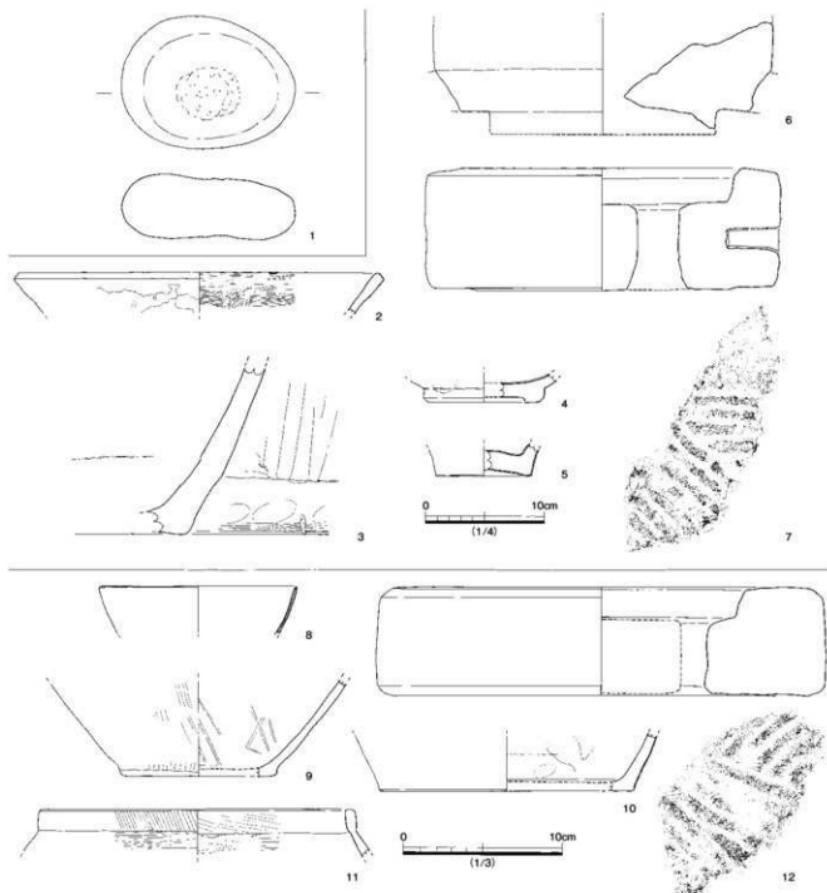
第29図 7・8号井戸出土遺物実測図 (1/3・1/4)

8は無文鏡である。直径2.05～2.08cm、方孔は一辺0.76cm、厚さは0.5mmである。平面のゆがみが大きく、方孔付近が窪むことから鑿状の工具で打ち抜いたものか。方孔自体も正方形ではない。

9は鉄滓である。井戸上層から出土している。長さ2.8cm、幅2.6cm、厚さ2.2cm、重さ11.98g。10は五輪塔の火輪である。高さ13.2cm、幅20.6cm、重さ5.66kgを測る。砂岩製でつくりは粗い。また、転用を試みたようで、形状の改変が認められる。

**6号井戸**（第27図2）調査区中央部やや南寄りで確認された素掘りの井戸で、平面は1.08m×1.50mの楕円形を呈するが、井筒は直径0.9m程度である。検出面から1.8m下が底である。井戸の下半部は暗灰色粘土が堆積し、下層では砂も混じるが、上半は白灰色粘土で埋め戻されたと考えられる。なお、6号井戸は9号溝と接しており、両者は関連性を持つものと思われる。

出土遺物（第28図11～15）第28図11は陶器の小片である。口縁部を立てた状態で図化して



第30図 8～10号井戸出土遺物実測図 (1/3・1/4)

いるが、皿の可能性がある。口縁端部は方形で、端部を中心に褐色釉がかかる。12～15は混入した弥生土器である。12は厚底で裾がやや広がる底部をもつ壺で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。13は壺の底部で平底である。14は壺の上半部で、口縁部は内傾する。口縁部下に小さな三角突帯が巡る。15も壺の上半部で、口縁部の伸びは小さい。外面に縦ハケを施す。

7号井戸（第27図3）調査区の中央、やや東寄りで確認された素掘りの井戸で、14号溝を切る。平面は141m×120mの楕円形を呈し、検出面から2.1mで底に至る。当初は半裁し、土

層を確認しながら掘り下げていたが、湧水が著しく崩壊したため、下半部の土層は確認できていない。

**出土遺物**（第29図1～6）第29図1は白磁の皿である。底径5.8cm。2は土師器の壺である。口径9.3cm、底部を欠くが、器高2.5cm、底径5.9cm。3～6は土師皿である。いずれも1/4～1/2程度の破片から径を復元している。3は口径8.0cm、器高1.0cm、底径6.8cmで裏面に回転糸切痕を残す。4は口径7.8cm、器高1.3cm、底径6.2cmで、裏面は板状圧痕と回転糸切痕を残す。5は口径7.8cm、器高0.9cm、底径6.3cm、6は口径7.4cm、器高1.0cm、底径6.2cmを測る。

**8号井戸**（第27図4）調査区の中央部東端部で確認された2段掘りの井戸である。平面は1.71m×2.52mの不整楕円形を呈する。井筒は推定で0.75m程度か。検出面から1.50mで底に至るが、その中央に直径20cmの柱穴を確認した。湧水も著しいため、井戸としたが、土坑など異なる遺構の可能性もある。

**出土遺物**（第29図7～15・30図1）第29図7は白磁碗高台部片である。8は陶器の皿である。胴部が屈曲し口縁部にいたるが、口縁端部を上方につまみ出し溝が巡るような形状を呈する。見込部には細かい砂目地が4か所に残る。内外面ともに透明釉をかけるが、高台疊付は無釉である。口径13.2cm、器高39cm、高台径4.5cm。17世紀中頃か。9は磁器の皿である。口径14.8cm、器高3.6cmで、小さな露胎の高台を伴う。内面口縁部に鳥を描く。17世紀中頃～後半。

10～12は小型の甕である。10は甕の口縁部で口径19.4cmを測る。外面は鉄釉が薄くかかるが、口縁上端部には積み重ね痕が残る。内面は釉薬が垂れた状態で残っている。11は甕の底部で底径10.6cmを測る。外面は黒色の飴釉が厚くかかり、底部付近は雨垂れ状になっている。内面は同心円文の当具痕を残し、白色化した釉が薄くかかる。12も底部片で底径15.4cmに復元される。内外面ともに薄い鉄釉が基本で、外面の一部に飴釉がかかる。内面には同心円文の当具痕が残る。

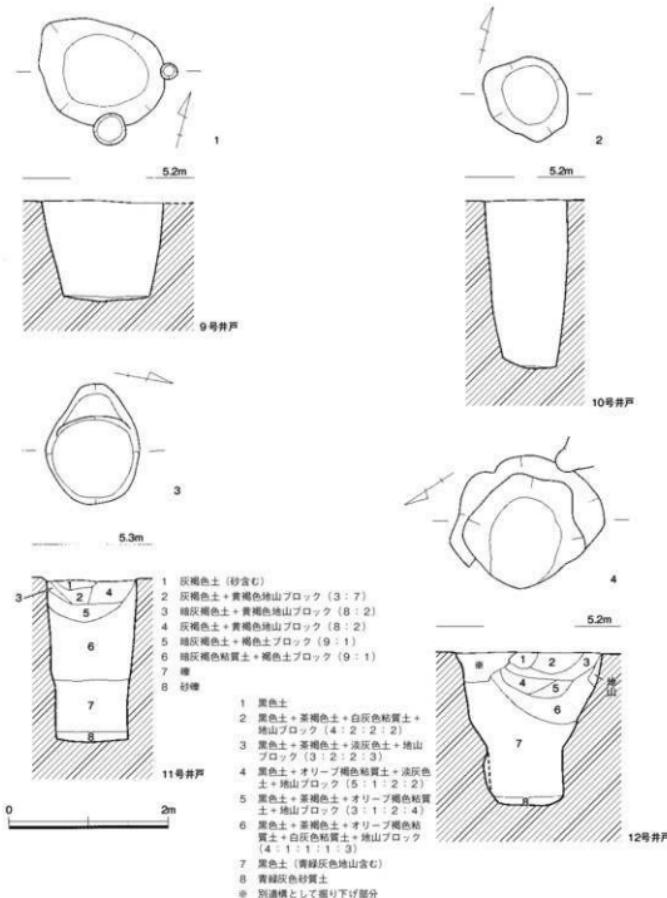
13は陶器の皿で、内外面に黒釉がかかるが、高台部付近は雨垂れ状になる。口径22.9cm、器高6.0cm、高台径7.5cm。形態的には17世紀中ごろか。14は陶製の擂鉢である。口縁部内外面に飴釉をかける。飴釉成型で擂目は櫛書きで先端をそろえておらず、その上端部は横位に施された櫛書き文に切られる。底径は9.9cmであるが、その数値は小片からの復元であるため少し怪しい。ただ、底部は上底である。全体的な形状からは17世紀前半に位置付けられよう。15は瓦質の火鉢片である。小片であるため径は復元できない。突帯の上に雷文を巡らし、その一部に円形透を設ける。

第30図1は敲石である。被熱し全面にススが付着する。長さ10.9cm、幅8.4cm、厚さ4.1cm。

**9号井戸**（第31図1）調査区の中央部東端部で確認された素掘りの井戸で、8号井戸の南に位置し、2号・7号溝を切る。平面は1.59m×1.32mの楕円形を呈する。断面は逆台形で、検出面から1.29m下で底に至る。8号井戸と同様に湧水が著しいことから井戸としたが土坑の可能性もある。

**出土遺物**（第30図2～7）第30図2は土鍋の口縁部か。内面に横ハケを施し、外面にスス・コゲが付着する。3は備前焼の大甕底部片である。小片のため、底径は復元できなかった。4は陶器皿の高台部付近である。見込には砂目地が残り、外面は露胎である。5は陶製の茶入底部片か。外面と底部に茶褐釉、内面に灰綠釉が薄くかかる。底部には砂目地が残る。

6は茶臼の下臼片で、受け皿や台部を欠く。臼部直徑は28.6cmで、火成岩系の石材で作られている。7は石臼の上臼片で、直徑30cm、供給孔径3.5cm、高さ10.3cmを測る。側面には方形の挽

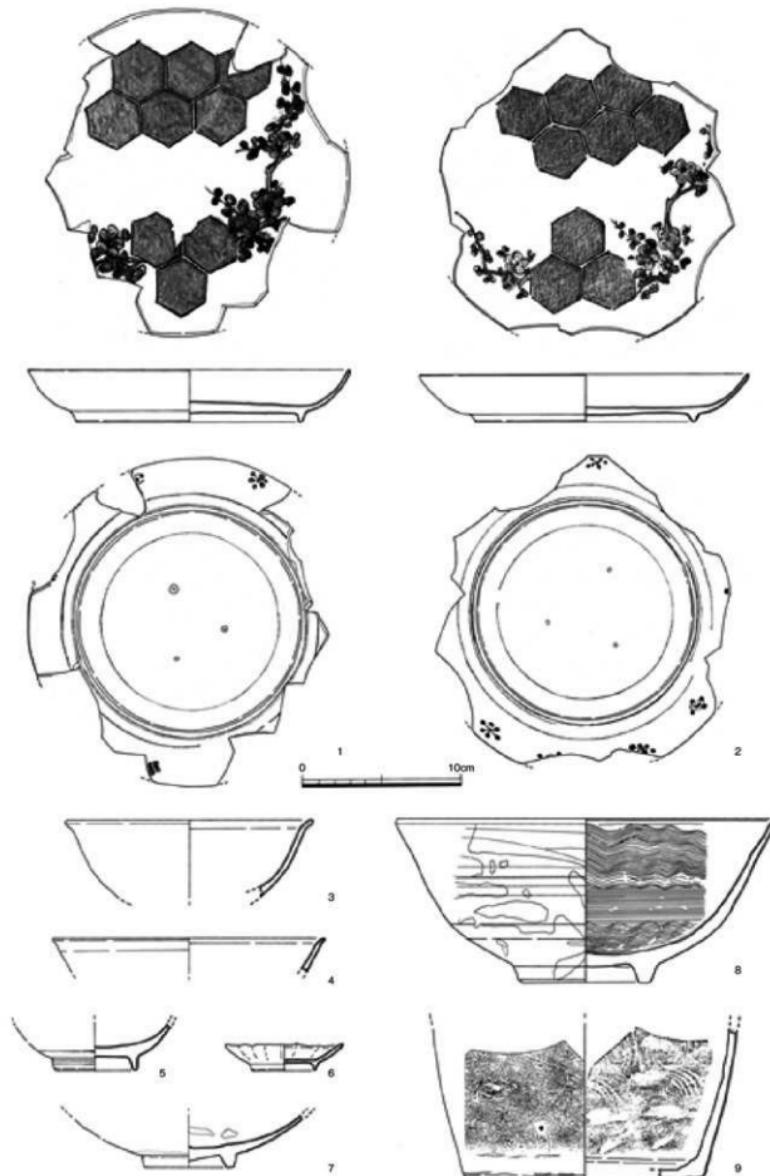


第31図 9～12号井戸実測図、土層断面図 (1/60)

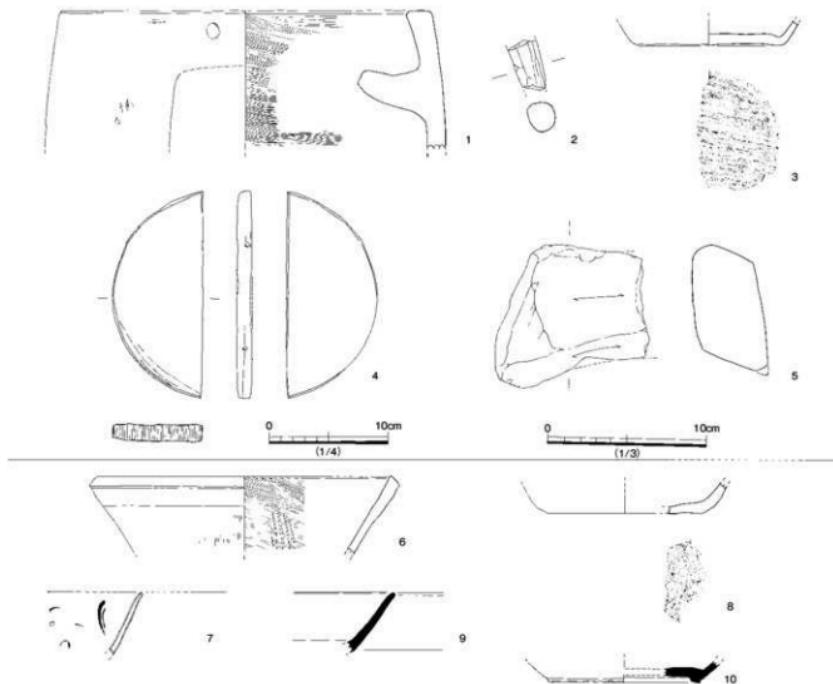
手孔をもつ。目の詳細は不明であるが六分画か八分画である。石材は粗砂岩である。

**10号井戸** (第31図2) 調査区の北側中央で確認された素掘りの井戸である。平面は直径1.05mの不整円形で、検出面から21.6m下で底になる。湧水も著しい。

**出土遺物** (第30図8～12) 第30図8は器壁が薄い白磁碗片である。やや軟質で口径12.4cmを測る。9は瓦質の壺である。底径10.0cmに復元される平底から、直線的に広がりながら立ち上がる。10は陶器の甕か。器壁が薄く、外面に茶褐釉薬を薄くかけ、内面には釉薬がこぼれた状態で付



第32図 11号井戸出土遺物実測図1 (1/3)



第33図 11・12号井戸出土遺物実測図 (1/3・1/4)

着する。胎土は淡い赤褐色を呈する。11は土師質の土器で、甕形に固化したがやや不安がある。

12は石臼の上白片で、直径38.0cm、供給孔径22cm、高さ9.2cmを測る。石材は角閃石を多く含む火成岩系で、目の詳細は不明であるが六分画か八分画である。

**11号井戸**（第31図3）調査区中央部やや南寄りで確認された素掘りの井戸で、7号溝を切る。平面は1.56m×1.20mで、検出面から2.04mで底に至る。なお、井戸の下層には拳大から人頭大的礫が投げ込まれており、その下から染付の皿2枚が出土した。

**出土遺物**（第32図1～9、第33図1～5）第32図1～9は井戸の最下層から出土した磁器の皿である。ほぼ同形で、内面の文様も亀甲繁文と梅で同じであることから、セット関係になると思われる。裏面に3か所の目地がのこる。1は口径20.1cm、器高3.3cm、高台径13.8cmで、2は口径20.5cm、器高3.0cm、高台径13.8cmである。

3は青磁の碗である。口縁部は如意形に広がり、碗部は丸みをもつ。口径15.5cm。4は白磁の碗口縁部である。口径17.0cm。5は陶器の碗である。高台径5.0cmを測り、豊付は露胎である。

6は小型の白磁皿で、花弁状を呈する。型打成型か。口径7.4cm、器高1.7cm、高台径4.0cm。

7は陶器碗の下半部で、高台径5.6cmを測る。内外面ともに黄褐色がかかり、外面高台部付近は露胎である。内面は黄褐色のうえに緑色釉をかける。8は内外面に白化粧の刷毛目装飾を施す鉢である。外面上半部と内面全体に鉢軸がかかる。高台内部の削りが深く、高台端部外側を斜めに削り落としている。口径23.8cm、器高10.3cm、高台径8.1cm。18世紀代か。9は小型壺の下半部で底径15.0cmを測る。平底の底部からやや丸みを持ちつつ立ち上がる。外面には鉢軸をかけるが、内面は無釉である。内面には同心円文當具痕、外面には平行叩き板痕を残す。

第33図1は瓦質の七輪か。内面に把手状の受部をもつ。口径30.7cm。2は瓦質の棒状品である。足鍋の足部片か。3は土師器坏の底部片である。板状压痕と回転糸切痕を残す。底径9.0cm。

4は曲物底板部材である。直辺部側面に木釘が残る。長さ17.5cm、幅7.6cm、厚さ1.4cm。

5は砂岩製の砥石である。四側面すべて砥石として用いる。

**12号井戸**（第31図4）調査区の北側中央部で確認された素掘り井戸で5号土坑に切られる。平面で直径1.80m程度の不整円形を呈する。検出面から1.95mで底に至る。湧水が著しく、井筒部がえぐれている。

**出土遺物**（第33図6～10）第33図6は瓦質の播鉢である。口径25.8cmで口縁端部に面をつくる。内面は斜ハケのうち播目を入れる。7は青磁碗である。内面に割花文を施す。8は土師器の坏である。底径9.8cmに復元され、糸切痕を残す。9・10は須恵器の高台付坏である。流れ込みか。

**13号井戸**（第37図1）調査区の中央部で確認された井戸で、6号溝を切る。平面は3.21m×1.92mの楕円形を呈する。検出面から0.93mで底に至る。湧水が著しいことから、井戸として掘り進めたが、底が2.10m×0.87mの平らな床面として広がっていることから、大型の土坑や溜井の可能性が高い。

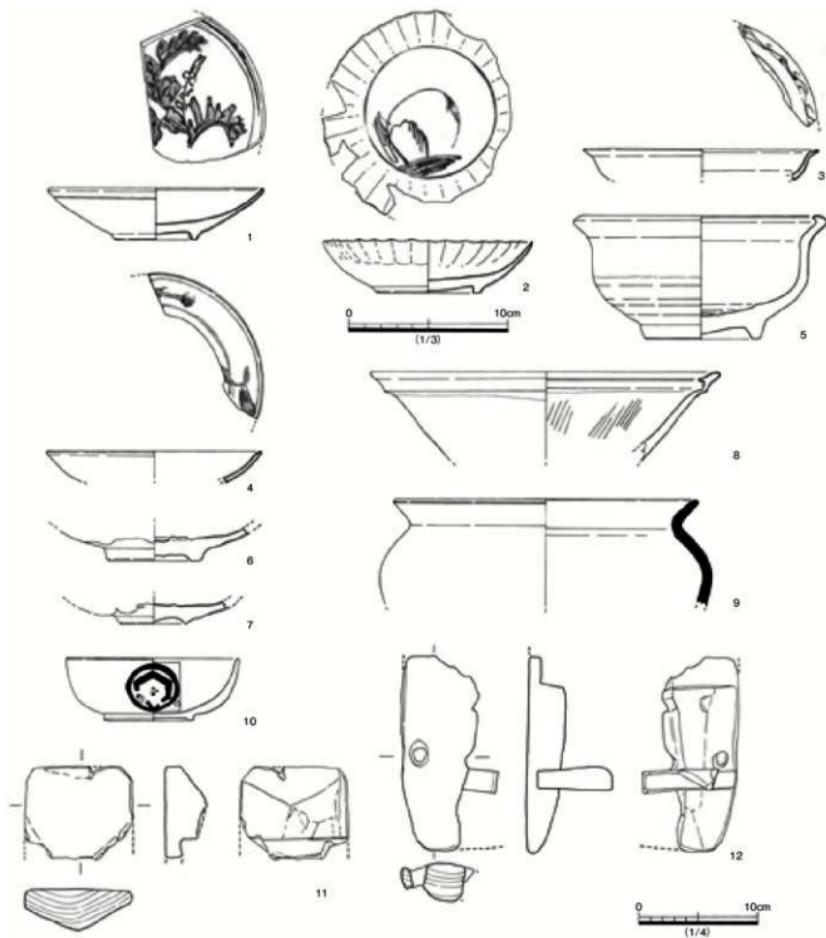
**出土遺物**（第34図1～12）1は皿で磁器である。見込部に草花文を描き、口縁部内外面に廻線を巡らせる。高台疊付は無釉で、高台内面には砂目地が残る。口径13.5cm、器高3.3cm、高台径5.1cm。2は菊花形皿で型打成型か。焼成が悪く軟質である。見込部に柳を描く。高台疊付は釉が剥ぎ取られている。口径13.6cm、器高3.3cm、高台径6.6cm。3は皿口縁部の小片で磁器である。口縁反転部に蕨手文を描く。口径14.8cm。4は口縁部の小片で、内面に図柄を描く。口径13.6cm。

5は陶製の楕形火入か。外面上半部に褐色釉をかけ、外面下半部と内面は無釉である。口径15.9cm、器高7.8cm、高台径7.2cm。6・7は陶器の皿の高台部片である。いずれも内外面に釉をかけ、見込み部に砂目地が残る。8は陶器製の播鉢である。口縁部内外面に鉄釉をかける。楕形成型で播目は櫛書きで先端をそろえていない。播目は8本一単位である。口径29.0cm。

9は須恵器質の壺である。胴の張りが強く、口縁部が短く広がる。口径19.0cm。

10は小型の楕で、内面は赤漆塗で、外面は黒漆塗である。外面の家紋状の文様は先に縁取りして、内部を赤漆で充填する。口径10.7cm。器高4.0cm。11・12は下駄である。

**14号井戸**（第37図2）調査区中央部や西寄りに位置する素掘り井戸で、13号井戸の西に位置し、6号溝を切る。平面は直径2.30mほどの隅丸方形を呈するが、井筒は直径0.90m程度である。検出面から2.04mで底に至る。井戸の上半部西側のみ人頭大の石材を壁状に積み重ねるが、石組井戸とは異なり、張り付けた感じである。

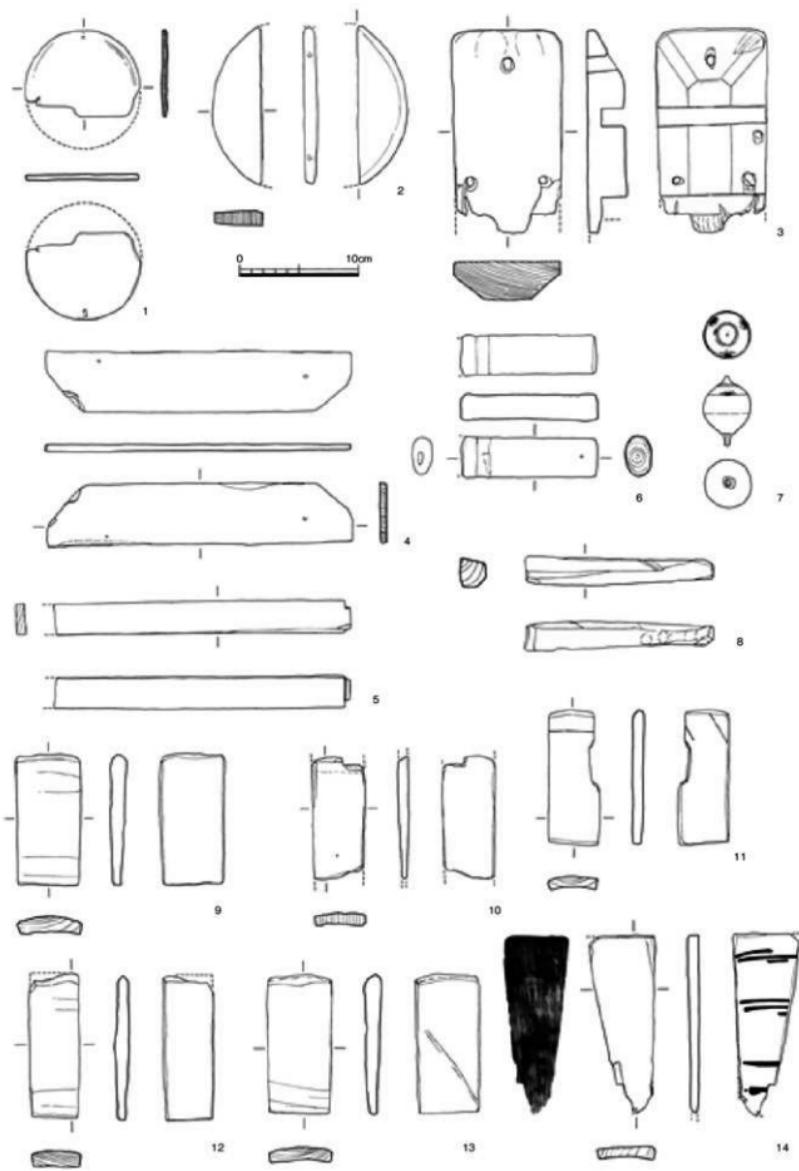


第34図 13号井戸出土遺物実測図 (1/3・1/4)

出土遺物（第35・36図）第35図1は青磁碗である。外面は鎮蓮弁文、内面は割花文を施す。ただ、内外面ともに盛り上がり部など釉が剥げているところが多く、長期間の使用に伴う劣化の可能性が高い。2～6は磁器である。2は皿で見込中央に草花文を描く。口径13.4cm、器高3.2cm、高台径4.8cm。高台疊付は露胎で、砂が付着する。3も皿で、見込にウサギと麦状の植物を描く。口径13.2m、器高3.0cm、高台径5.8cmで型打成型か。口縁部の一部はススが付着し、釉が



第35図 14号井戸出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



第36図 14号井戸出土遺物実測図2 (1/4)

剥がれているため、火を受け廃棄された可能性がある。4は皿で、見込に蝶のような十字文を配し、口縁部に向けて崩れた如意頭文を配する。口径13.6cm、器高3.5cm、高台径4.4cmで、豊付には砂が付着する。5は皿の口縁部片で口径12.2cmである。口縁部内面に日足文を配する。6は口縁部を菊花状に型打成型した皿で、口径13.1cm、器高3.3cm、高台径5.1cmを測り、豊付は露胎で砂が付着する。7・8は磁器の碗である。7は口径10.7cmで外面に風景を描く。8はゆがみの大きい完形の碗で、口径10.1～11.3cm、器高7.3cm、高台径5.0cmで、高台豊付には砂が付着する。内面見込み中央部には直径1.0cmの円文、外面には牡丹を3か所に描く。

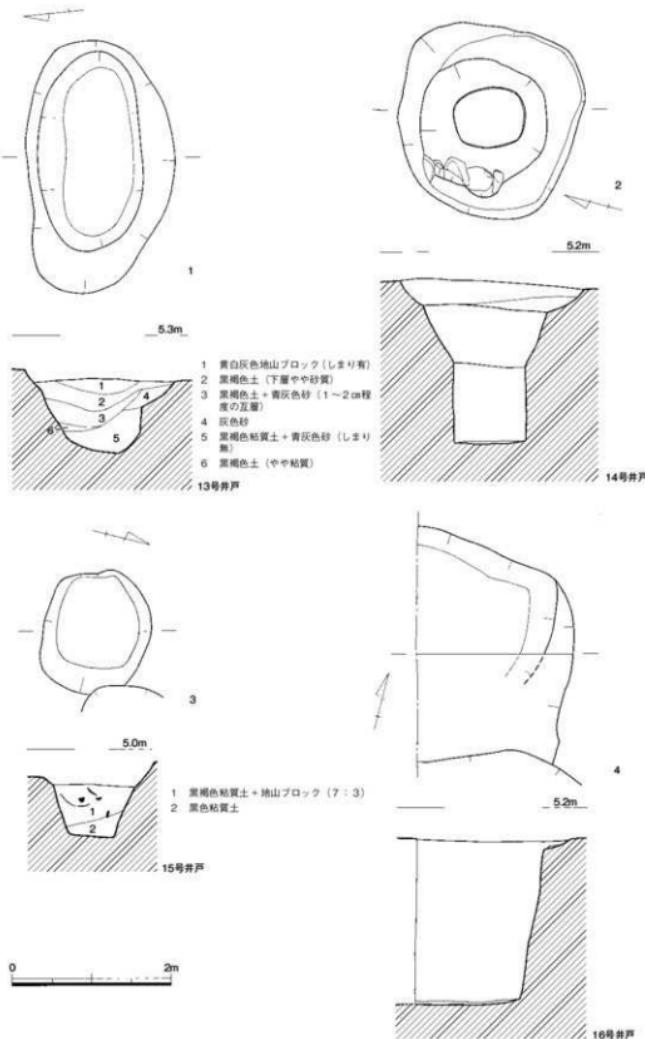
9～11は陶器の皿である。いずれも胴部が屈曲し、口唇部に溝を巡らす溝縁皿である。9は口径13.1cm、器高3.3cm、高台径4.1cmで、全面に釉がまわり、高台豊付の3か所に砂目地痕が残る。10は胴部の屈曲が強い皿で、口径13.8cm、器高4.6cm、高台径4.7cmを測る。高台付近は露胎で、見込・高台豊付それぞれに砂目地がのこる。11は口径13.2cm、器高3.6cm、高台径4.5cmの皿で、高台部付近は露胎である。見込・高台豊付それぞれ3か所に砂目地が残る。17世紀中頃か。12は碗である。口径11.0cmで外面に青紫色、内面に淡黄褐色の釉がかかる。13は瓶である。底径8.6cmで裏面に回転糸切痕を残す。断面を見るとやや上げ底気味である。外面は胴部に褐釉、頸部に白釉をかける。17世紀前半～中頃か。14は擂鉢である。輥轆成形で器壁は薄く、内面に櫛状工具で8本一単位の擂目を入れる。口縁部には鉄軸をかける。

15は土師質の土鍋である。小片のため、径は復元できなかった。外面にはススやコゲが付着する。内外面ともに横ナデを施す。16・17は土師皿である。いずれも回転糸切痕を残す。16は底径5.7cm、17は口径9.0cm、器高1.5cm、底径6.0cm。18は砂岩製の砥石で現存長9.2cmを測る。

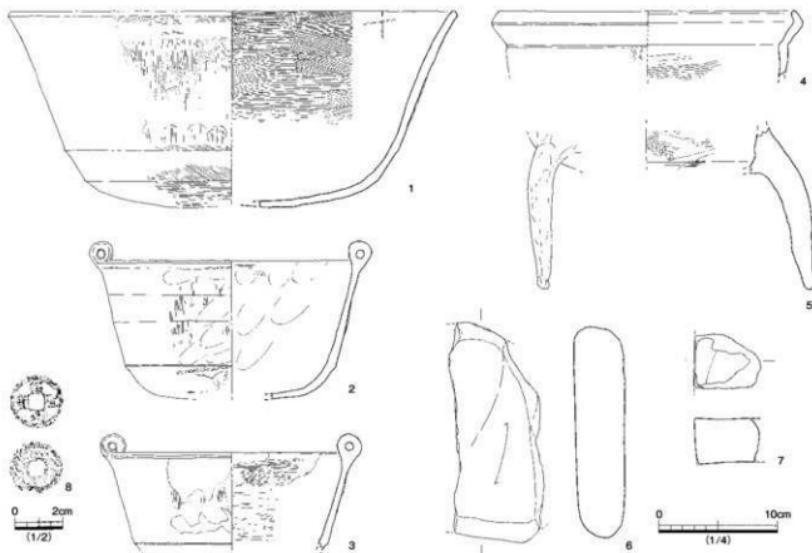
第36図1は小型の曲物の底板で、樹皮製の緊縛具が一部残る。直径約9.6cm、厚さ0.4cm。2も曲物の底板片で縦13.0cm、横4.1cmの半月状を呈する。断面に直径0.3cmの木釘が残っており、本来は複数の部材をつなげて底板にしたと思われる。3は差蓋式の下駄である。縦17.0+a cm、横9.0cm、厚さ3.1cmである。4は幅広の台形を呈する板材で折敷片である。平面の2か所に0.3cmの穿孔がある。長さ25.5cm、幅5.2cm、厚さ0.6cm。5は板材で折敷の部材か。長さ24.0+a cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmを測る。側面には黒色で漆が塗布された可能性があり、本来は組み合わせて用いる部材の可能性がある。6は刃物の柄である。長さ11.3cm、幅3.4cm、厚さ2.2cmで、柄の中には刃物の茎が残っている。刃側には1.2cmの幅で窪むが、これは刃物が抜け落ちないように締めた痕跡であろう。また、柄端部から1.2cmの箇所に目釘が残っている。7は擬宝珠形の独楽である。直径3.9cm、高さ5.0cm、独楽の鉄軸を含めると5.9cmである。軸の径は0.3cmで、この軸が持ち手である可能性も考えたが、図の上部に漆で文様が描かれていたため、図のような上下の配置とした。8は角材片である。長さ15+a cm、幅2.3+a cm、厚さ2.0+a cmで、加工痕が多く残る。9～14は桶の部材か。いずれも横断面形が弧を描く。14の外面には横線をひき、内面に達磨のような人面を描く。

15号井戸（第37図3）調査区中央やや西寄りで確認された井戸である。平面1.35m×1.59mの隅丸方形を呈する。検出面から0.69mで底に達するが、湧水が著しいことから井戸として報告した。溜井的な機能を持つものか。

**出土遺物**（第38図1～7）1は口径37.7cm、器高16.2cmを測る大型の土鍋である。外面上部は縦ハケ、内面と外面下半部は横ハケを施し、外面にススやコゲが付着する。口縁部内面にヘラで×印をつける。順序は横線のあとに縦線を刻む。2・3は口縁部に耳をもつ土鍋



第37図 13～16号井戸実測図、土層断面図 (1/60)



第38図 15号井戸出土遺物実測図 (1/2・1/4)

で、いずれも外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。外面全面にスス・コゲが付着する。2は口径23.4cm、耳を含む器高13.5cm、3は口径21.6cmを測る。

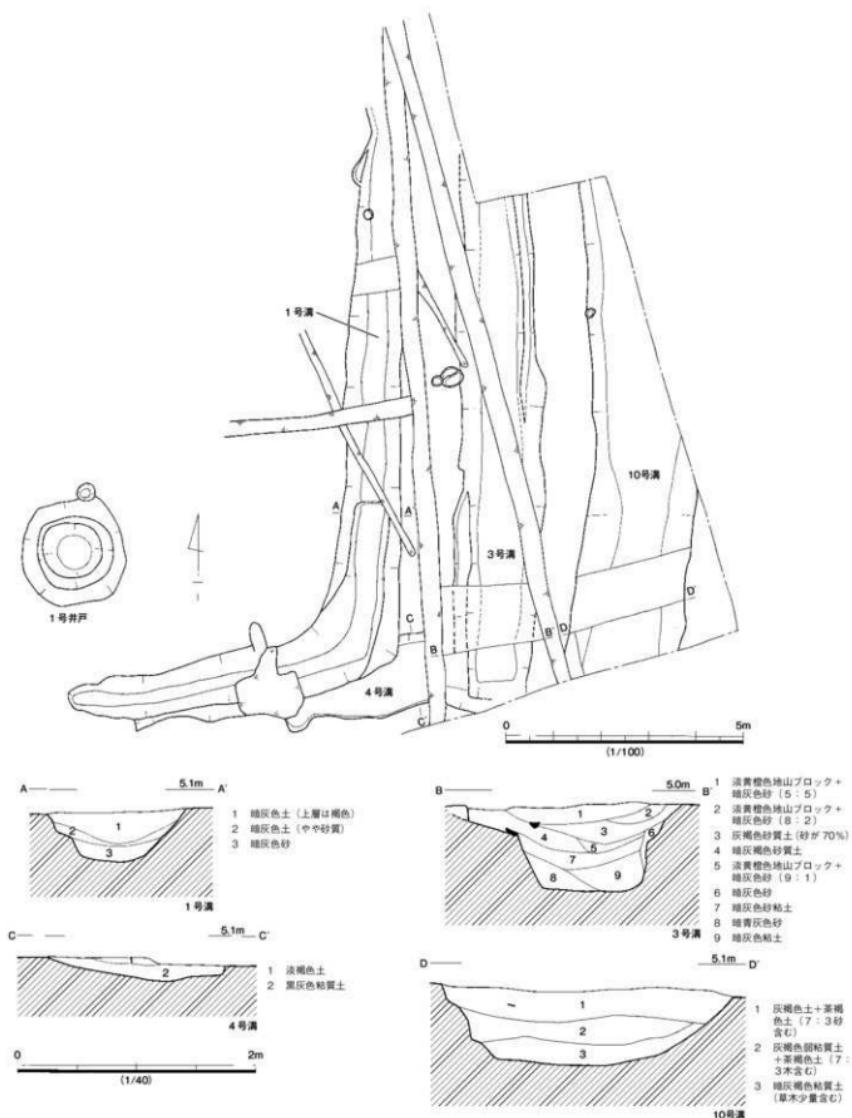
4・5は瓦質の防長系足鍋で、接点はないが本来は同一個体の可能性がある。4は口径24.6cmで、長く伸びた口縁部の端部を上方に屈曲させる。足部は棒状であるが、下半部が少し外に広がる。長安分類のIV型式で16世紀後半に位置付けられる（長安2017）。本来は灰色であるが、使用によって外面にスス・コゲが付着する。

6・7は砥石である。6は側面を敲打で整形したもので長さ18.8cm、現存幅7.0cm、厚さ4.2cmを測る。右下部が比熱により黒色化している。7は被熱のせいで脆くなった砥石で、確認される三側面すべて用いており、比熱により黒色化しているが、割れている断面は変化しておらず、鋳型の可能性もある。石材は砂岩系である。8は紹聖元寶で1094年初鑄である。

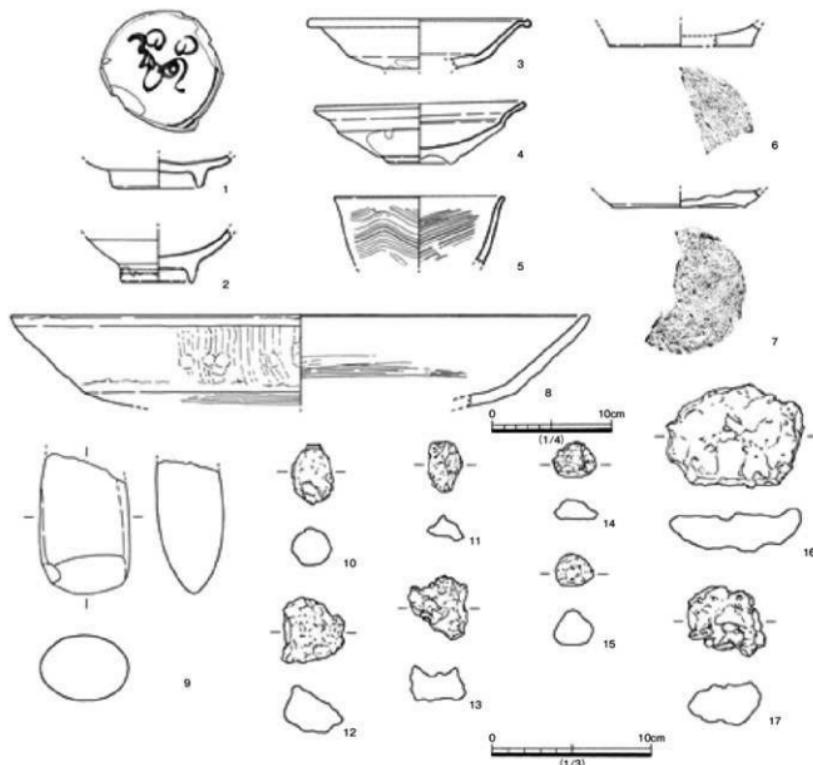
**16号井戸**（第37図4）調査区南西隅で確認された素掘りの井戸で、半分は調査区外に伸びる。平面は直径3.0m程度の丸みを持つ方形を呈し、検出面から2.1mで底に至る。湧水が著しく、調査区際ということで安全面から完掘は断念した。埋土はオリーブ灰色粘質土で、当遺跡で確認されたほかの井戸の埋土とは異なることから、時期的にやや新しい可能性がある。出土遺物はない。  
(秋田・平尾)

#### 4 溝

**1号溝**（第39図）調査区の南東で確認された溝で、南北方向に延び、北は調査区外にまで伸



第39図 1・3・4・10号溝実測図、土層断面図 (1/40・1/100)



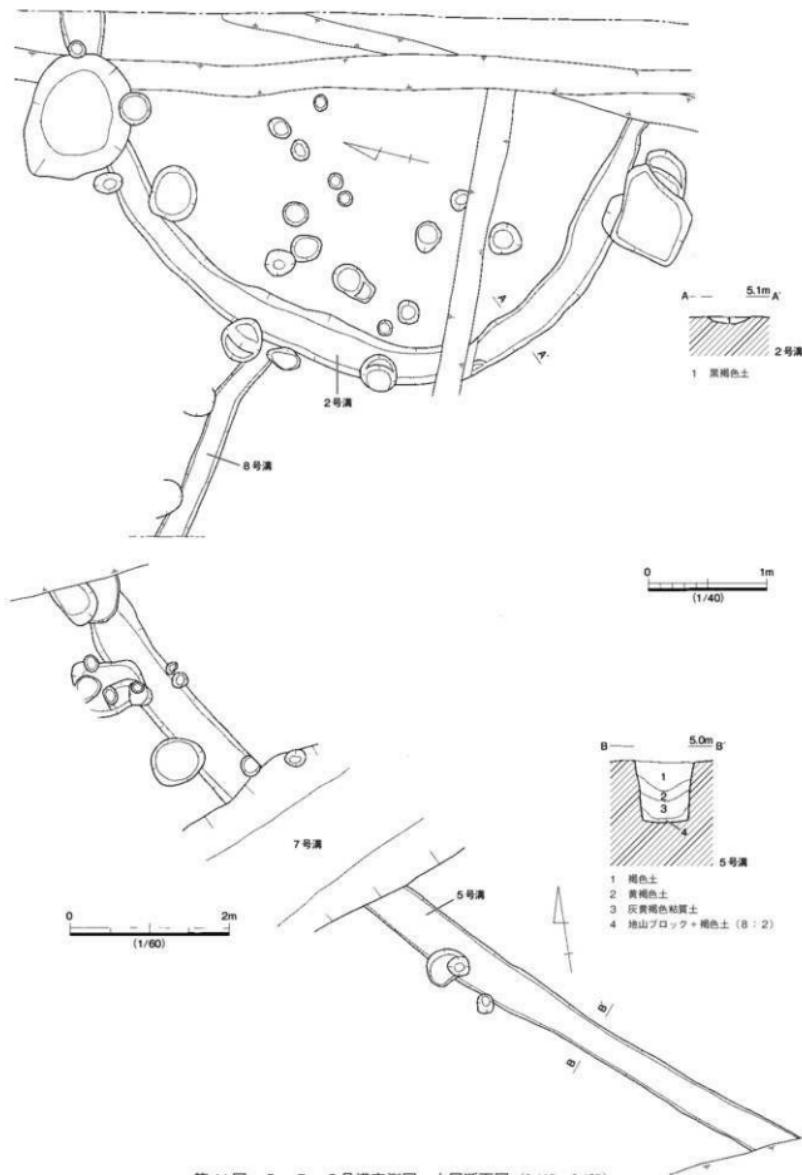
第40図 1号溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)

びる。南は調査区際で西側に直角に曲がり、5mほど続く。その端部は3号土坑を切る。また、東には1.2mほど離れて3号溝が並走する。幅1.25m、深さ0.42m、断面逆台形を呈する。埋土の最下層は暗灰色砂であることから、流路として用いられたと判断される。

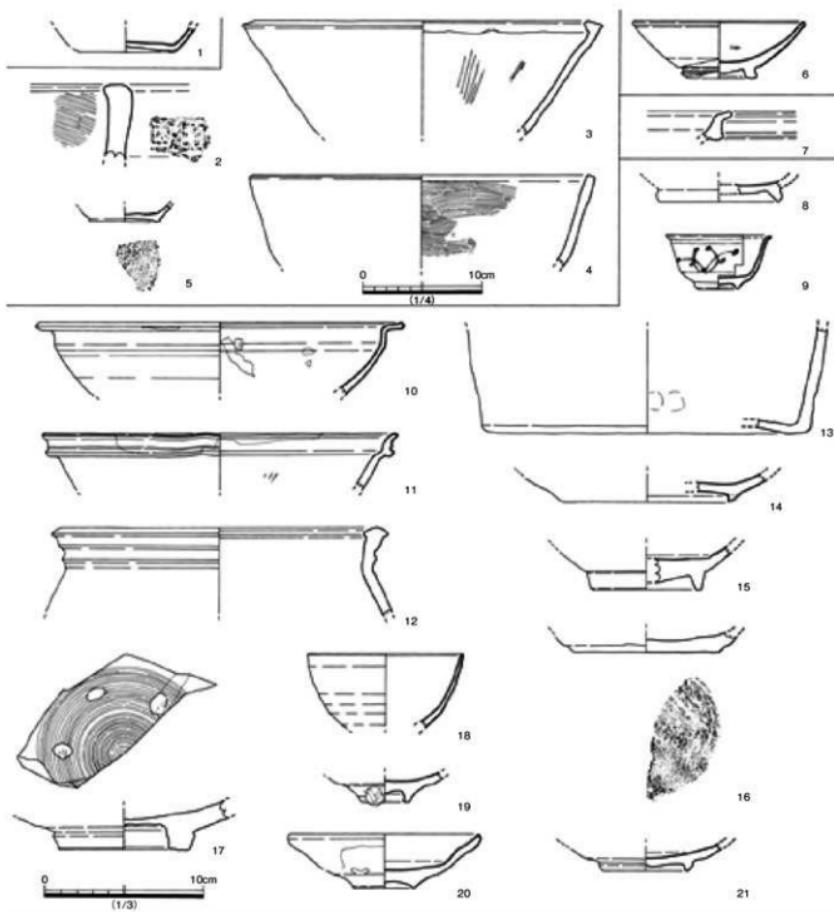
**出土遺物** (第40図) 第40図1は染付の碗である。見込に文字状の文様を描く。高台径5.7cmを測り、疊付は露胎である。2も染付の碗である。高台径4.6cmで、疊付は露胎である。

3は陶器の皿である。口径14.0cmを測り、口唇部に溝をめぐらす溝縁皿である。見込には砂目地が残り、外面下部には釉が及ばない。4も3と似た形であるが、口唇部に溝は巡らない。外面ともに縁から灰色釉がかかるが、外面下部には及ばない。口径13.2cm、底径4.1cm、器高3.9cmで見込には砂目地が4か所残る。5は陶器の碗である。口径10.6cmで、外面ともに白化粧土を刷毛で塗り文様としている。17世紀後半か。

6・7は土器の坏である。6の底径9.0cm、7の底径は8.3cmで、いずれも回転糸切痕を残す。



第41図 2・5・8号溝実測図、土層断面図 (1/40・1/60)

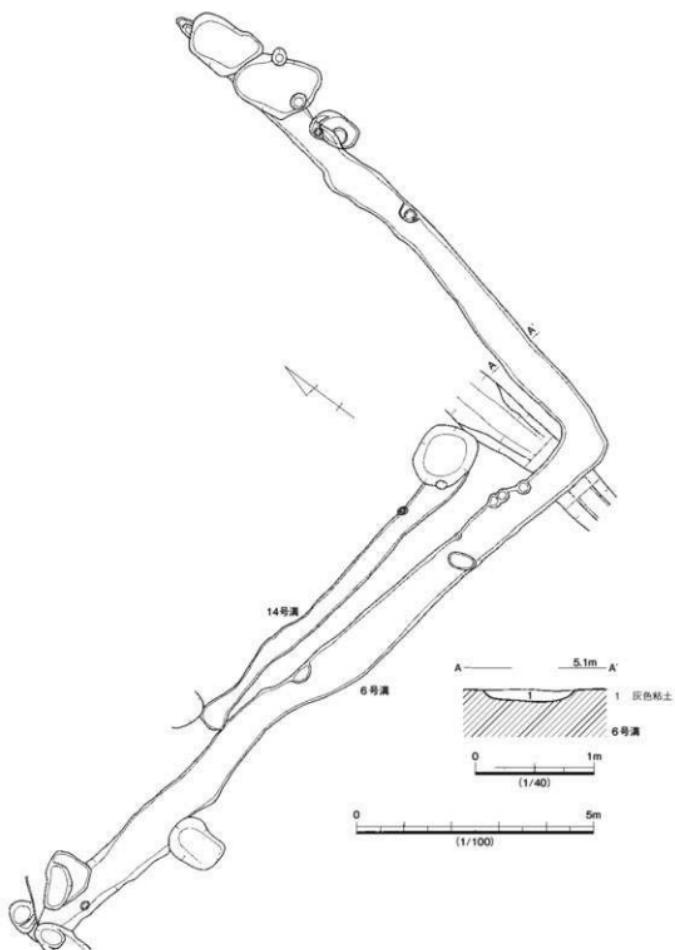


第42図 2～6号溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)

8は大型で浅底の土鍋である。口径48.2cmで、口縁端部断面は方形を呈する。外面はタタキの後に縦ハケ、内面にナデを施す。

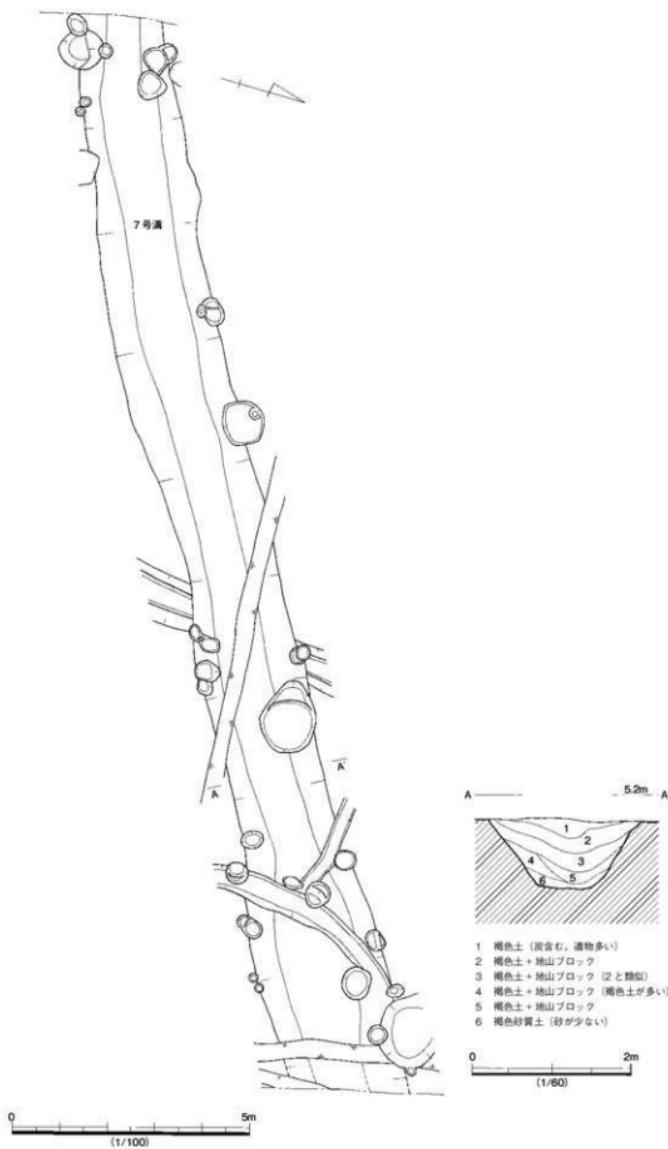
9は両刃石斧の刃部付近の破片である。幅5.65cm、厚さ4.15cmで、火成岩系の石材を用いる。全体的に丁寧な研磨が施されているが、刃には2mm程度の面がある。

10は棒状鉄製品である。幅1.2cm、厚さ0.6cm、長さ3.8cmで、鋸彫れが著しい。11～17は鉄滓である。11は断面三角形を呈する。長さ3.2cm、幅2.2cm、厚さ1.4cm、重さ6.7g。12は長さ4.2cm、



第43図 6・14号溝実測図、土層断面図 (1/40・1/100)

幅3.6cm、厚さ2.5cm、重さ56.82 g。13は長さ3.6cm、幅3.3cm、厚さ2.3cm、重さ27.62 gで流動溝か。14は長さ2.7cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ9.63 g。15は丸みを帯びた鉄滓で長さ2.4cm、幅2.0cm、厚さ2.25cm、重さ8.6g。16は椀型溝である。長さ8.2cm、幅6.3cm、厚さ2.3cm、重さ150.74 g。17は長さ4.5cm、幅4.0cm、厚さ2.5cm、重さ54.65 g。



第44図 7号溝実測図、土層断面図 (1/60・1/100)

**2号溝**（第41図）調査区の中央東端部で確認された半円形の溝で、幅0.38m、深さ6cmを測る。溝は7号溝を切るもの、9号井戸に切られる。溝は調査区外に延びており、本来は円形もしくは楕円形を呈すると思われる。墳墓等の周溝の可能性が考えられたため、溝の内側を精査したが、ピット以外の遺構を確認することはできなかった。

**出土遺物**（第42図1）第42図1は白磁の皿である。底径5.9cmで、裏面が薄くなるものの全面に釉が及ぶ。

**3号溝**（第39図）調査区の南東側で確認された溝で幅1.75m、深さ0.74mを測る。1号溝と並走し、4号溝に切られるか。北東側は調査区外に延びているが、南側は調査区の際で終わっている。深さが10号溝と近いため、同時期に掘られた可能性もある。

**出土遺物**（第42図2～5）第42図2は土師質の火鉢である。本来は瓦質を意図したものか。内面は斜ハケを施し、全面黒色化。口縁部断面は丸みを帯びた方形で、口縁部下に雷文を巡らせる。3は瓦質の擂鉢である。口縁部断面逆三角形で口径30.0cmを測る。器壁は薄い。内面には6本一単位の擂目を入れる。内外面に口縁部および、断面の一部が黒色化し、胎土も一部変色していることから、破片の状態で火を浴びたものと思われる。4は土鍋である。口径28.7cmで外面はスス・コゲが付着する。内面は横ハケを施す。5は土師皿である。底径4.5cmで回転糸切痕を残す。

**4号溝**（第39図）調査区南端で確認された東西に延びる溝で、幅1.5m、深さ0.2mを測る。西側を1号溝に切られ、東側は3号溝を切るか。3m弱しか残っていない。

**出土遺物**（第42図6）第42図6は陶器の皿である。口径10.6cm、器高3.6cmで、内外面に白釉をかける。見込に目地が残り、高台は弧状に抉りを入れる。

**5号溝**（第41図）調査区のやや南西側で確認された溝で、幅0.5m、深さ0.5mを測り、断面方形を呈する。7号溝に切られるが、北西から南東方向へ弧を描きながら延びている。

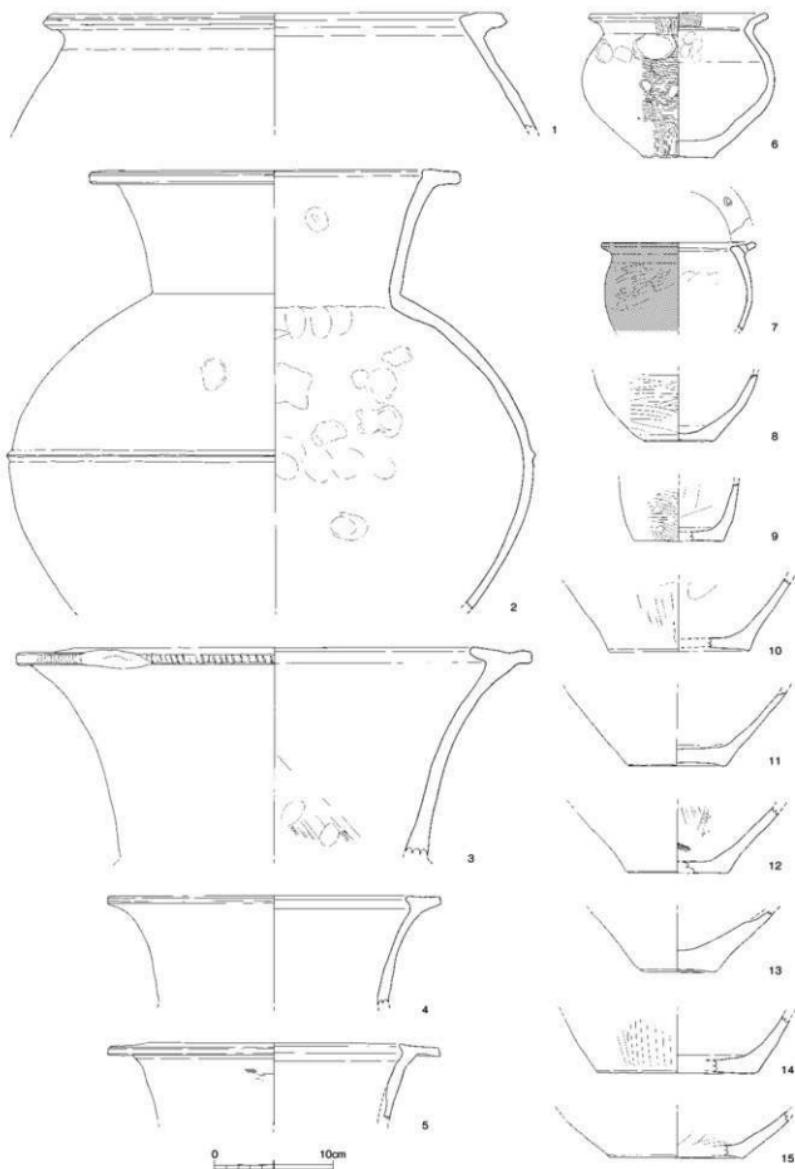
**出土遺物**（第42図7）第42図7は擂鉢の口縁部である。小片であるため、口径は復元できないが、外面に鉄釉をかける。17世紀後半か。

**6号溝**（第43図）調査区の北部から中央部で確認された区画溝である。幅0.75～0.95m、深さ0.1m程度である。ほぼ方位にあった方形区画溝で、北端部を6号・9号土坑に切られる。東西方向では13号、14号井戸に切られると判断したが、やや不安が残る。

**出土遺物**（第42図8～21）第42図8は黒色土器A類の底部片で、高台径7.5cmを測る。9は磁器の小碗である。口径6.6cm、器高3.4cm、高台径2.7cmを測り、豊付は露胎である。外面に植物文を描く。10は陶器の脚台付皿か。内外面に透明釉をかけ、丸みをもつ胴部から反転して口縁部に至る。11は陶製擂鉢の注口部分で内外面に鉄釉をかける。口径29.4cm。12は甕で、直立気味に立ち上がる口縁部に張りの無い胴部を伴う。口径21.1cmを測る。陶器であるが焼きが甘い印象を受ける。

13は土製の鉢である。器壁は薄く、上げ底気味の底部をもち底径27.3cmを測る。14は青磁の盤である。全面に釉が及び、高台内に砂目地が残る。高台径14.0cm。15は白磁の碗である。内面見込は釉が搔きとられ、目地が残る。外面高台は露胎である。16は土師器坏の底部で底径9.3cmを測る。回転糸切痕と板状圧痕を残す。

17は陶器の大皿である。高台径8.0cmで、内面にカキ目を施し、見込に砂目地を残す。18は磁器の小碗である。口径9.6cm。19は陶器の碗か。内面に黒褐釉を施し、見込に砂目地を残す。外



第45図 7号溝出土遺物実測図 1 (1/4)

面高台付近に玉状の目地が付着しており、器として不安定な状態となっている。20は陶器の皿であるが、軟質で胎土は橙色を呈する。内面と外面口縁部に灰色釉をかけるが、うまく広がっておらず、焼成不良と思われる。口径11.7cm、器高3.4cm、高台径3.8cm。21も焼成不良の陶器皿である。内面に透明釉をかけるが、気泡が目立つ。見込部分には輪状に目地が残る。

7号溝（第44図）調査区のやや南側で確認された東西に延びる溝で、東西ともに調査区外まで続く。幅2.0～2.6m、深さ0.9mを測る。断面は逆台形を呈し、湧水がある。埋土は最下層に褐色砂質土が堆積するが、その上は褐色土と地山ブロックからなる層が続き、人為的に埋め戻されたと判断される。最上層は炭混じりの褐色土で多くの弥生土器が出土した。

**出土遺物**（第45～49図）第45図1は大型壺の上半部である。口縁は肉厚で、しまりの強い頭部から胴部に向かって大きく広がる。2は大型の壺である。端部が伸びない鶴先口縁で、頭部のしまりは強い。胴部の張りは強く、胴部最大径の箇所に小さな三角突帯を巡らせる。3も大型壺の口頭部である。口縁部は刻目を施し、意図的な打ち欠きが認められる。4・5は壺の口縁部である。4は端部が伸びない鶴先口縁で、上端は水平にちかい。5は口縁が垂下する鶴先口縁壺である。

6は短頸壺である。底部付近に縱ミガキ、張りのある胴部には横ミガキ、頭部から口縁部にかけては暗文状の縱ミガキを施す。火を受けたと思われ、口縁部から胴部にかけて器壁の剥離が認められる。7～9は無頸壺である。7は口縁部が内傾するもので、胴部に横ミガキを施す。8は下半部で上げ底気味の底部から広がりながら立ち上がる。全面に横ミガキを施す。9は平底で、筒状に立ち上がるるものである。全面に横ミガキが認められ、底部裏面も磨く。底部には黒斑が残る。10～15は壺の底部である。12は黒斑をもち、14は底径が大きく、外面に縱ハケを施す。

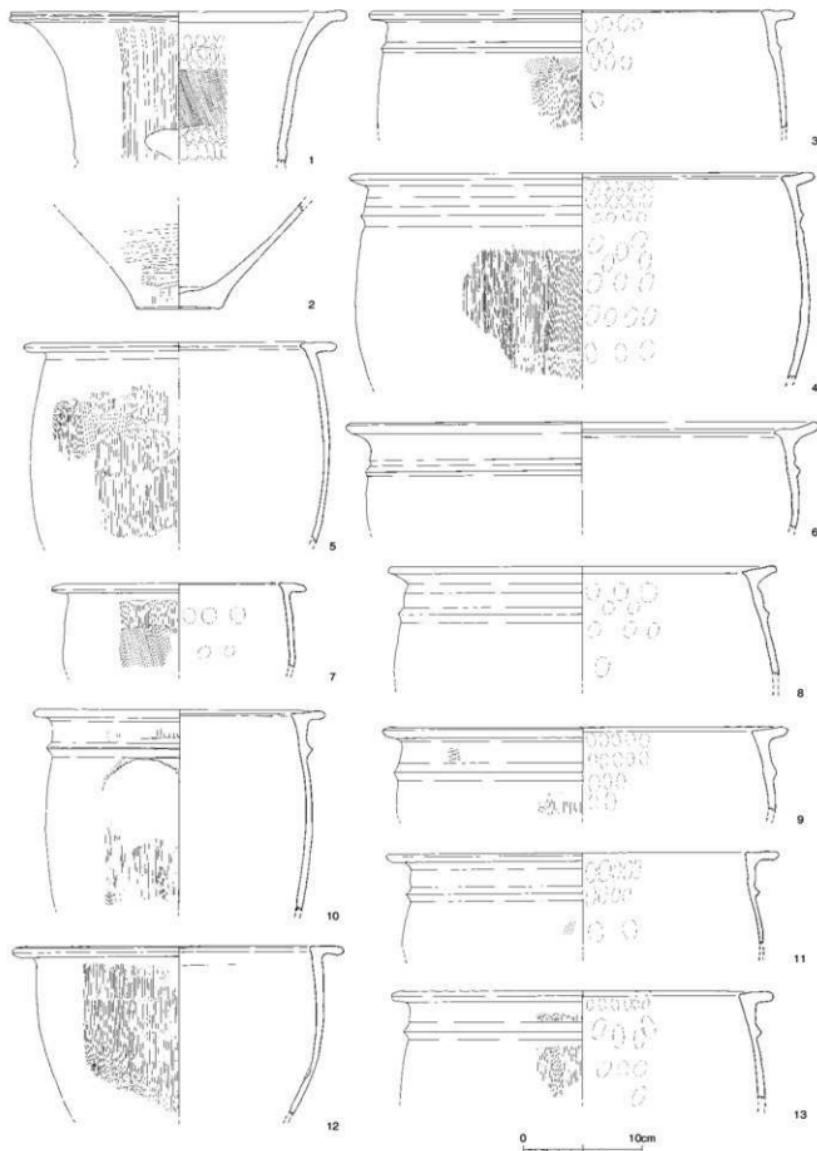
第46図1は壺の口頭部である。頭部は直線的に立ち上がり、口縁部付近でゆるやかに広がる。口縁部は鶴先口縁であるが、内部への突出は小さい。外面には暗文状の縱ミガキ、内面は縱ハケと指オサエ痕を残す。なお、頭部は黒色化しており、口縁部下面は剥離箇所が多い。2は壺の底部で、強く開きながら立ち上がる。外面に横ミガキを施す。

3～13は壺の上半部である。3は口縁の伸びが小さく、口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。4・8はやや跳ね上げ気味の口縁をもつ。6・8はやや跳ね上げ気味の口縁をもち、7は小ぶりの壺である。10は胴部を円形に打ち欠いており、窓開の可能性はある。12の内面にはコゲが付着する。

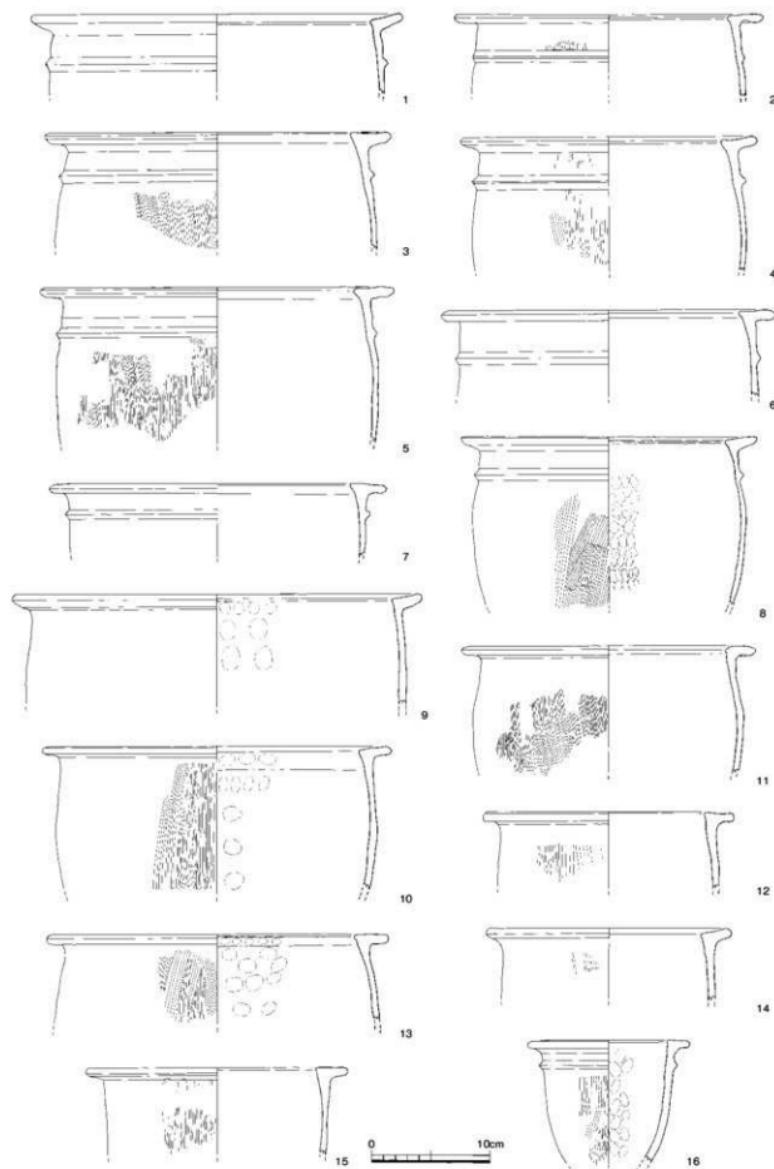
第47図1～16は壺の上半部である。1・8は内傾する口縁をもち、口縁部下に三角突帯を巡らせる。4・10は跳ね上げ気味の口縁をもつ壺で、外面に縱ハケを施す。3は水平に伸びる口縁を持つもので、口縁部下に三角突帯を巡らせ、外面に縱ハケを施す。15は小型の壺で口縁は水平に伸びる。16はより小型の壺で水平に伸びる口縁をもち、その下に三角突帯を巡らせる。胴の張りはほとんどなく、外面に縱ハケを施す。口径13.6cmを測る。

第48図1～5は壺の下半部である。1は上げ底気味で、緩やかに広がりながら立ち上がる。2は平底で、3も中央部を欠くが、平底であろう。4は全体的に器壁が薄く、5は肉厚である。6～19は壺の底部である。上げ底である15を除き、いずれも平底で、19を除き外面に縱ハケを施す。18・19は無頸壺の底部の可能性もある。

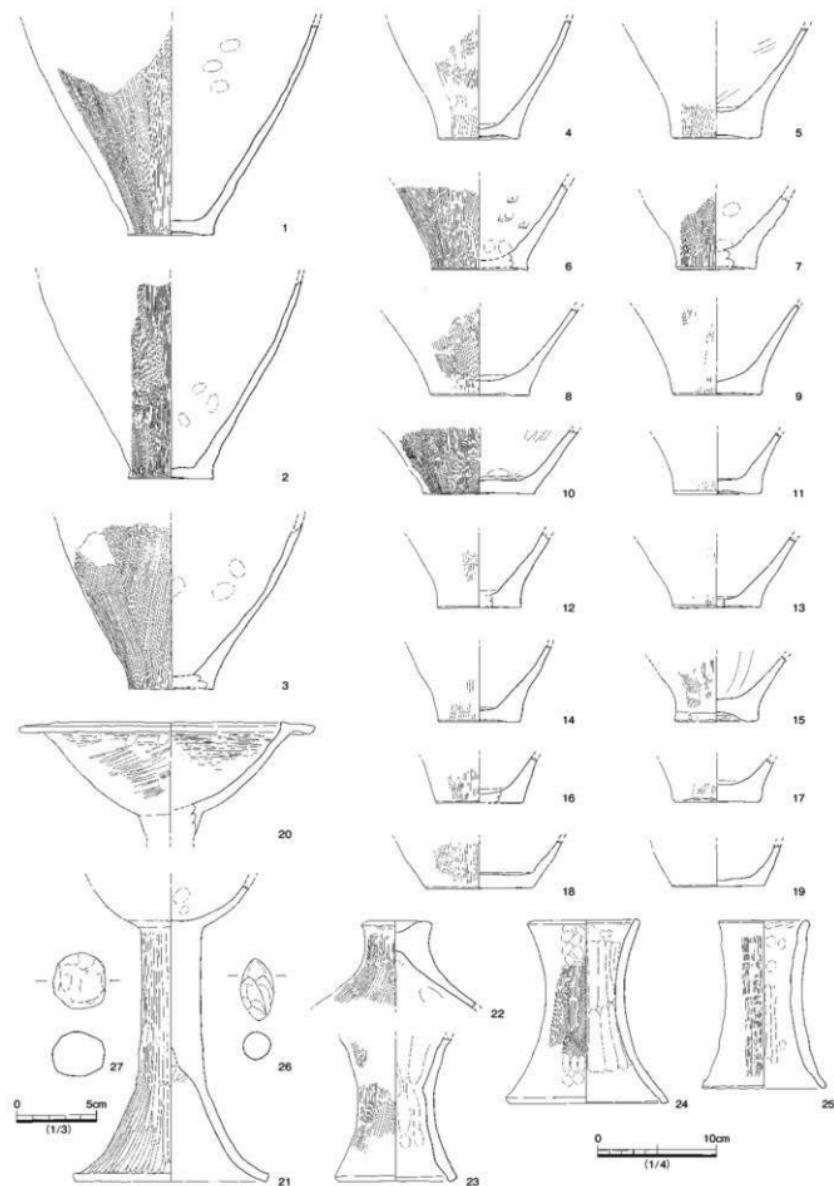
20は高壺の坏部で、内外面ともに横ミガキを施す。垂下気味の鶴先口縁である内面の突出は小さい。21は高壺の脚部である。丸みのある坏部の下に、中実の脚柱部を伴う。脚据は緩やか



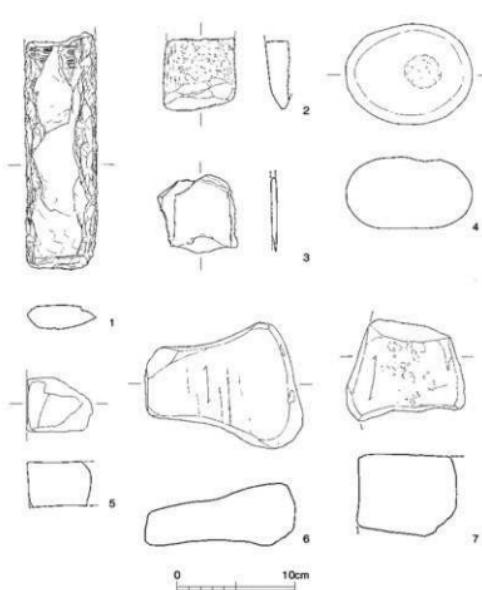
第46図 7号溝出土遺物実測図2 (1/4)



第47図 7号溝出土遺物実測図3 (1/4)



第48図 7号溝出土遺物実測図4 (1/3・1/4)



第49図 7号溝出土遺物実測図5 (1/4)

に広がり、端部断面は方形を呈する。外面に縦ミガキを施す。22は蓋である。頂部は窪み、外面に縦ハケを施す。23～25は器台である。23はくびれが中央に位置するもので、口縁部を欠く。器壁が薄い。24は脚部径がやや大きい器台で、くびれは中央に位置する。器壁は薄く、口縁部断面は方形を呈する。25はやや肉厚の器台で、口縁部の広がりは弱い。23～25はいずれも外面に縦ハケ、内面に指ナデを施す。26は投弾である。27は上層から出土した球状の鉄塊か鉄滓である。長さ3.6cm、幅3.3cm、厚さ2.8cm、重さ34.71gを測る。

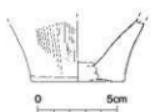
第49図1は磨製石剣未製品である。両側面からの打撃痕が残り、一部研磨痕が認められる。現存長さ19.0cm、幅5.8cm、厚さ2.0cm。2は両刃石斧で、身部は敲打痕を残す。刃部は刃潰し研磨を施す。3は板状の石材で、粘板岩系である。裏面は剥離したままである。4は敲石である。5～7は砥石である。5は定型砥石か。6は完形の砥石であるが、短軸方向の研磨が認められる。

8号溝（第41図）調査区の中央東寄りで確認した溝で幅0.33m、深さ5cmを測る。8号溝は東西方向に延びており、東側を2号溝に、西側を攪乱に切られる。

**出土遺物（第50図）** 第50図は弥生土器の甕で、混入品である。

9号溝（第51図）調査区の中央部で確認された溝で、南側から北に4.5mほどの箇所で、東西溝に合流し、西側調査区外に延びる。南北溝は幅0.3m、深さ5cm程度、東西溝は最大で1.95m、深さ0.24mを測る。この溝は2・6・15号井戸と接しており、両者は関連する遺構の可能性がある。また、15号溝を切る。

**出土遺物（第52・53図）** 第52図1～8は磁器である。1は皿で見込に三方割銀杏を描く。口径14.2cm、器高3.5cm、高台径7.0cmを測り、疊付は露胎である。2も見込に三方割銀杏を描く皿



第50図 8号溝出土遺物 実測図 (1/3)

である。口径13.7cm、器高3.0cm、高台径6.8cmを測り、豊付は露胎である。3は見込に竹と帆船を描く皿で、豊付は露胎で目地の砂が残る。口縁部の割れ口にススが付着しており、火中に投じられたものか。4も染付の皿で見込に草を描く。5は青緑釉をかけた皿で、見込部分は釉を搔きとる。口径14.1cm、器高3.5cm、高台径4.4cm。6も青緑釉をかけた皿で、見込部分は釉を搔きとる。見込と高台には砂目地が残る。口径12.6cm、器高3.7cm、高台径5.1cm。7は碗に近い皿である。口径13.4cm、器高4.5cm、高台径5.0cmを測り、内外面に青緑釉をかけるが、高台部付近と見込は露胎である。8は鉢か。磁器であるが、胎土はやや軟質である。内面は青緑釉、外面に白釉をかける。口径18.0cm。

9～12は陶器の皿である。9は口径12.0cm、器高3.6cm、高台径4.0cmを測り、内面と外面口縁部に透明釉をかける。見込には砂目地が残る。10は口径12.4cm、器高3.7cm、高台径4.0cmを測り、口縁部はつまみ出す。半透明釉をかけ、見込には砂目地を残す。11は灰釉をかけた皿で、見込に砂目地を残す。口径12.3cm、器高2.8cm、高台径3.8cm。12は焼きしまりの強い皿で、内外面に灰色釉をかけるが、口縁部の一部は釉が剥がれている。口径13.2cm、器高2.8cm、高台径4.3cm。13は土師皿である。底径4.4cmで、裏面の状態は摩滅して不明である。

14～16は猪口である。14は外面に「寿」を記すもので、口径6.7cm、器高3.8cm、高台径2.7cmを測る。焼成は陶器に近い。15は口径6.2cmの磁器の猪口である。外面に草葉文を描く。16は磁器の猪口で、外面に櫛歯文を入れる。内外面に白釉をかけるが豊付から高台内側は露胎である。

17は擂鉢である。口縁端部はほぼ水平で中央部を少しくぼませる。口縁部の外外面には鉄釉をかける。口径25.9cm。18も17と同様の形態の擂鉢であるが、口縁部がやや内傾する。櫛歯状工具で8本一単位の擂目を入れる。口縁部外外面に鉄釉をかける。

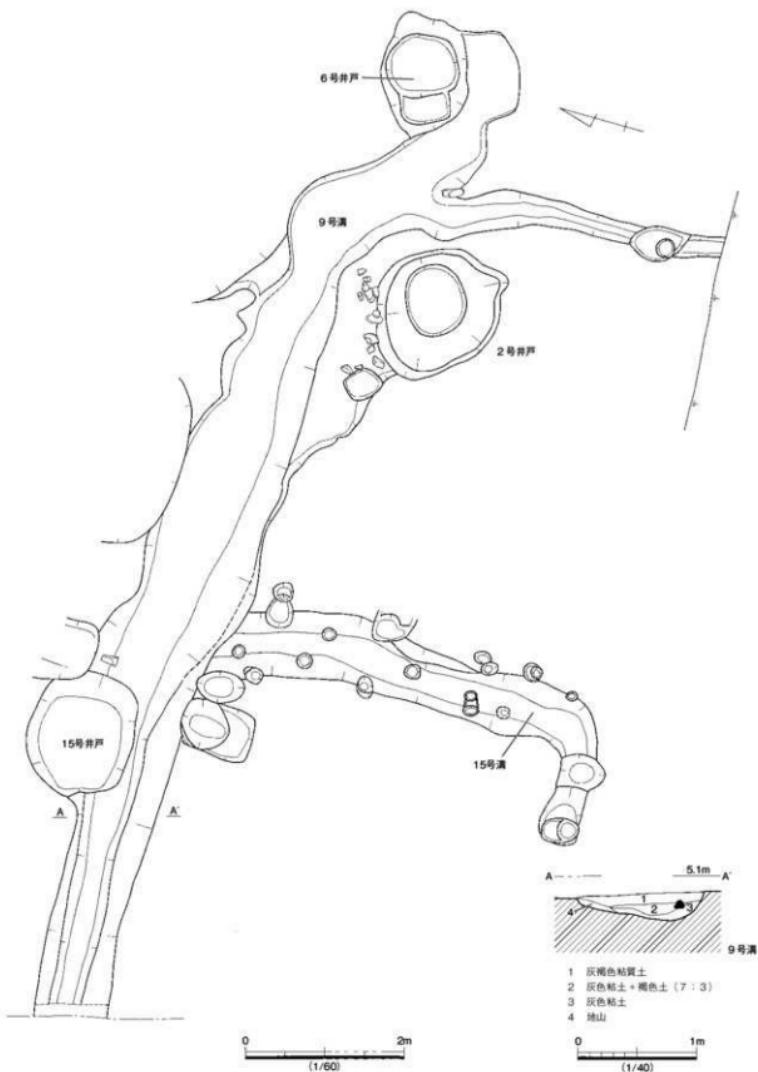
19は土鍋である。内面に横ハケを施し、外面にはススが付着する。口径28.4cmを測る。20は土師質の鉢で、バケツ状に口縁部に向かって直線的に広がる。口縁部の下に三角突帯を巡らせる。口径32.2cm。

21は鉄滓である。長さ5.3cm、幅3.2cm、厚さ2.6cm、重さ52.33gである。22は滑石製品である。長さ29cm、幅21.5cm、厚さ0.6～0.75cmを測る。平面長八角形で中央付近に直径0.3cmの孔を設ける。その右斜め下には5mmほどで穿孔をやめた痕跡がある。側面は横研磨でそれぞれの稜が明瞭に残る。

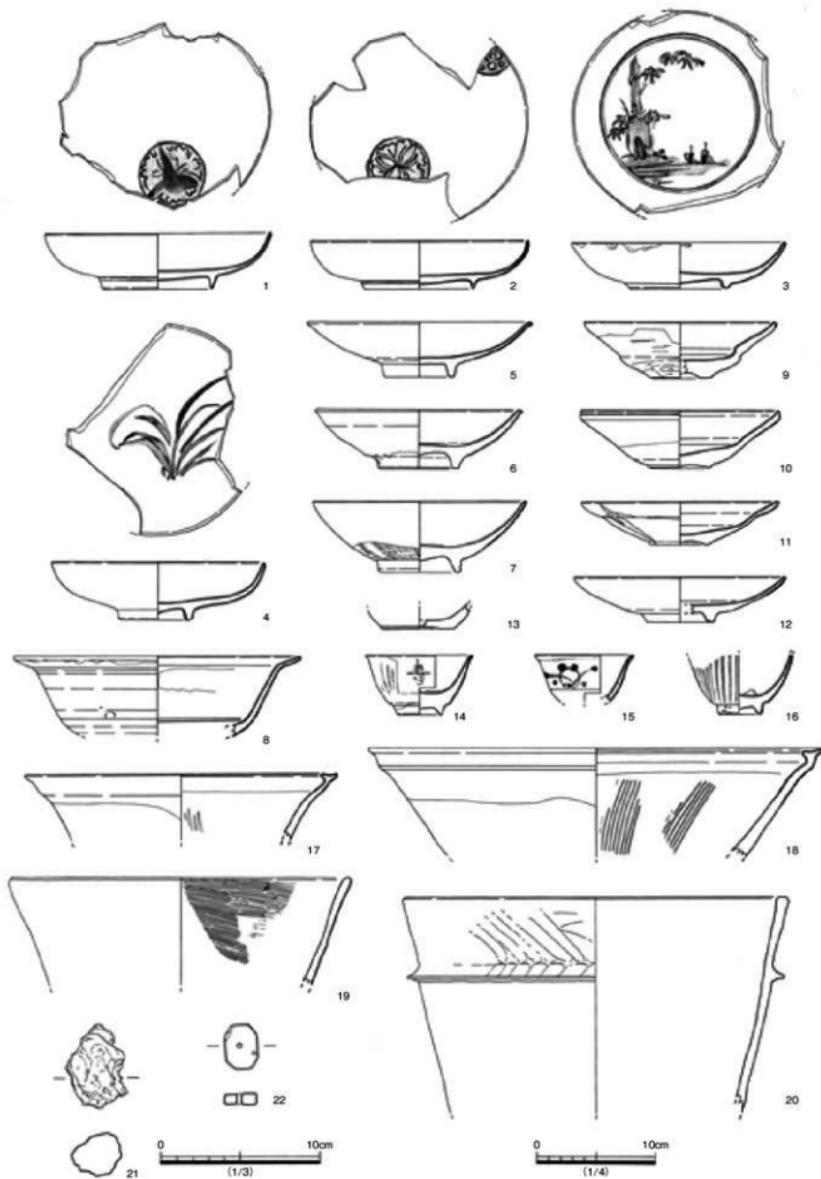
第53図1・2は大型の砥石である。いずれも砂岩製である。1は現存長34.2cm、幅10.4～16.8cm、厚さ6.5cm、6.88kgを測り、断面は長方形を呈する。2は現存長20.0cm、幅11.8cm、厚さ4.4cm、重さ2.32kgを測り、断面長方形を呈する。3は庖丁である。全面を鋸びに覆われ、詳細は不明であるが、現存長24.3cm、最大幅3.7cm、厚さ0.6cmを測る。

10号溝（第39図）調査区の南東部で確認された南北に延びる大型の溝で、南北ともに調査区外に延びる。幅2.5m、深さ0.65mを測り、断面は逆台形を呈し、若干の湧水もある。なお、埋土からツバキの実の殻が出土している。

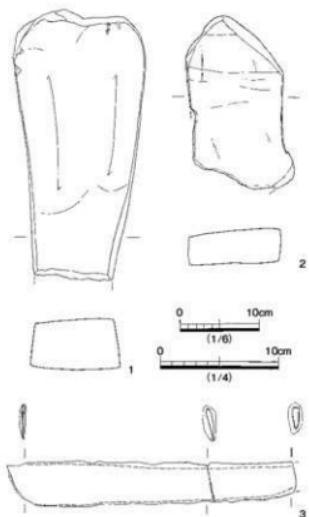
**出土遺物（第54図）** 第54図1～3は磁器の皿である。1の内面口縁部には鳳凰を描き、中央部には「日」を記すか。低い高台の豊付は露胎で砂目地が残る。口径16.2cm、器高2.75cm、高台径6.5cmを測り、1650～1670年代に位置付けられる吉田2号窯に類似がある。2はやや大ぶりの



第51図 9・15号溝、2・6・15号井戸実測図、土層断面図 (1/40・1/60)



第52図 9号溝出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



第53図 9号溝出土遺物実測図2 (1/4・1/6)

る。内面に細かい斜ハケ、外面に粗い板ナデと斜ハケを施す。

9～11は足部片である。9は瓦質で、上部が屈曲し、部分的に黒色化していることから、足鍋の足部と思われ、7と同一個体の可能性もある。10も瓦質で、短脚であることから火鉢か風炉の足と思われる。11は土師質のものである。前2者と比べて細いことから、足部片でない可能性もある。

12・13は土師皿である。12は底径4.0cmで回転糸切痕を残す。外面は黒色化している。13は口径7.0cm、器高1.7cm、底径5.3cmを測り、回転糸切痕を残す。14は石臼の小片で、擂面のみ生きている。15は銛である。長さ17.6cm、幅8.1cm、厚さ3.2cm。16・17は鉄釘である。16は先端部を欠く釘で、現存長3.7cm、幅0.6cm、厚さ0.5cm。17は扁平な釘で、長さ4.2cm、最大幅1.2cm、厚さ0.6cmを測り、断面は長方形である。

11号溝（付図）調査区の中央北寄りで確認された攪乱溝で東西方向に延びる。幅0.6m、深さ5cm程度で、断面は方形を呈する。図化できる遺物はなかった。

12号溝（付図）調査区の中央北寄りで確認された攪乱溝で東西方向に延びる。11号溝と1.5m離れて平行に伸びていることから、農業関係の攪乱と思われる。幅0.5m、深さ5cmで、断面は方形を呈する。

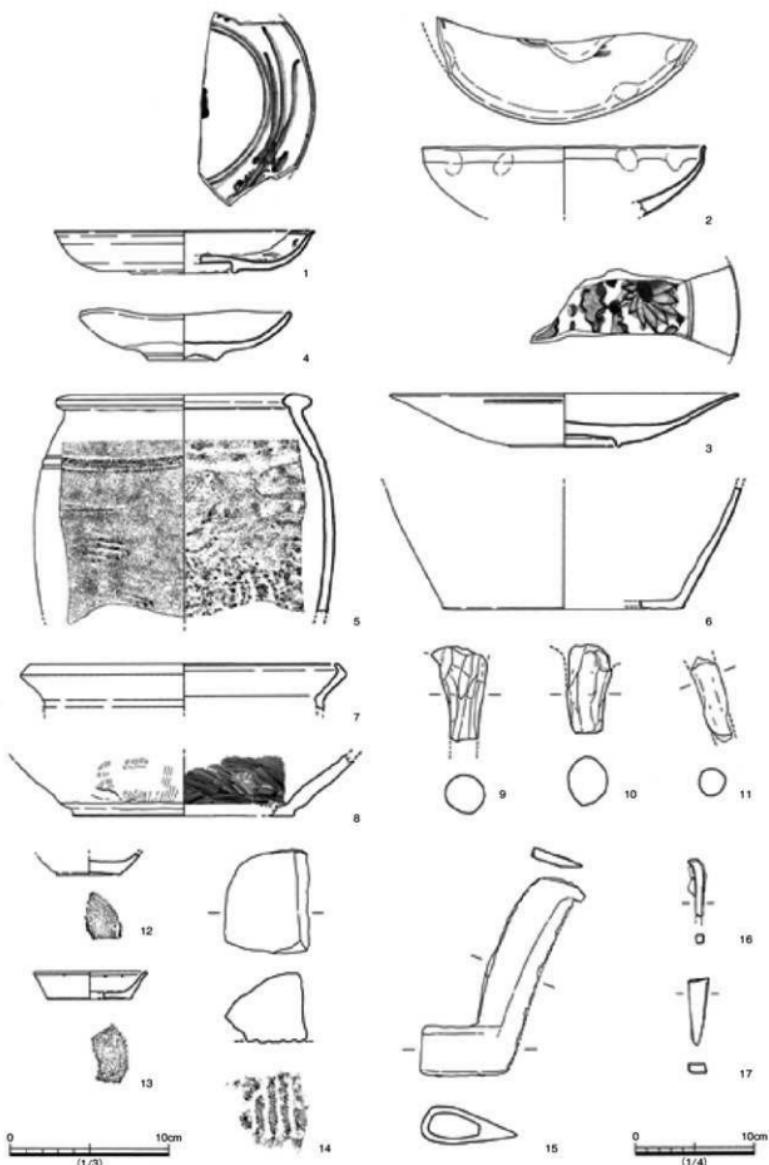
出土遺物（第55図1）第55図1は甕の底部で、混入品である。

13号溝（付図）調査区の北東壁際で確認された攪乱溝である。幅40cm、深さ6cm程度で断面は方形を呈する。南北方向に延びる。図化できる遺物はなかった。

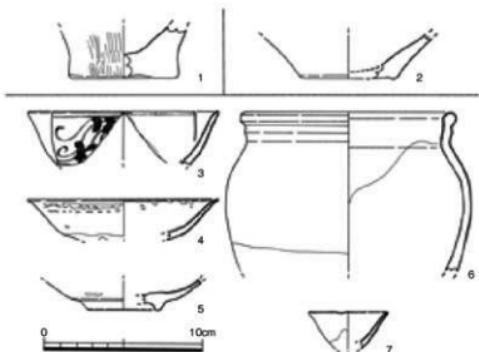
皿である。口縁部は部分的に指でおさえてゆがみを作り出している。口径17.7cm。3も大ぶりの皿で、口径21.8cm、器高3.4cm、高台径6.8cmを測る。見込部分に花文を描く。

4は陶器の皿である。焼き歪みが大きく、釉も部分的に光沢を失い、白色化している。見込と高台内側に砂目地を残す。口径13.1cm、器高3.0cm、高台径4.5cm。5は陶製の甕である。口径16cmで外への張り出しが小さく丸みを帯びた口縁部をもつ。口縁下には二本の沈線を巡らせる。胴部外面に平行タタキ痕、内面に同心円の当具痕を残し、内外面ともに薄く釉がかかる。6は壺か甕の底部である。器壁は薄く、底径20.3cmを測る。同心円の当具痕がかすかに残る。

7は足鍋の口縁部で長安IV型式である。内面は灰色を呈するが、外面は黒色化している。8は瓦質土器の甕の底部か。小片から復元しているため、底径には不安が残る。



第54図 10号溝出土遺物実測図 (1/3・1/4)

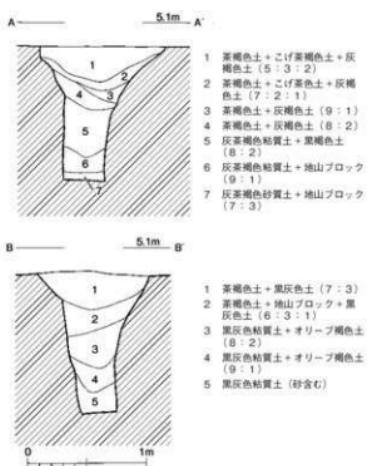


第55図 12～15号溝出土遺物実測図 (1/3)

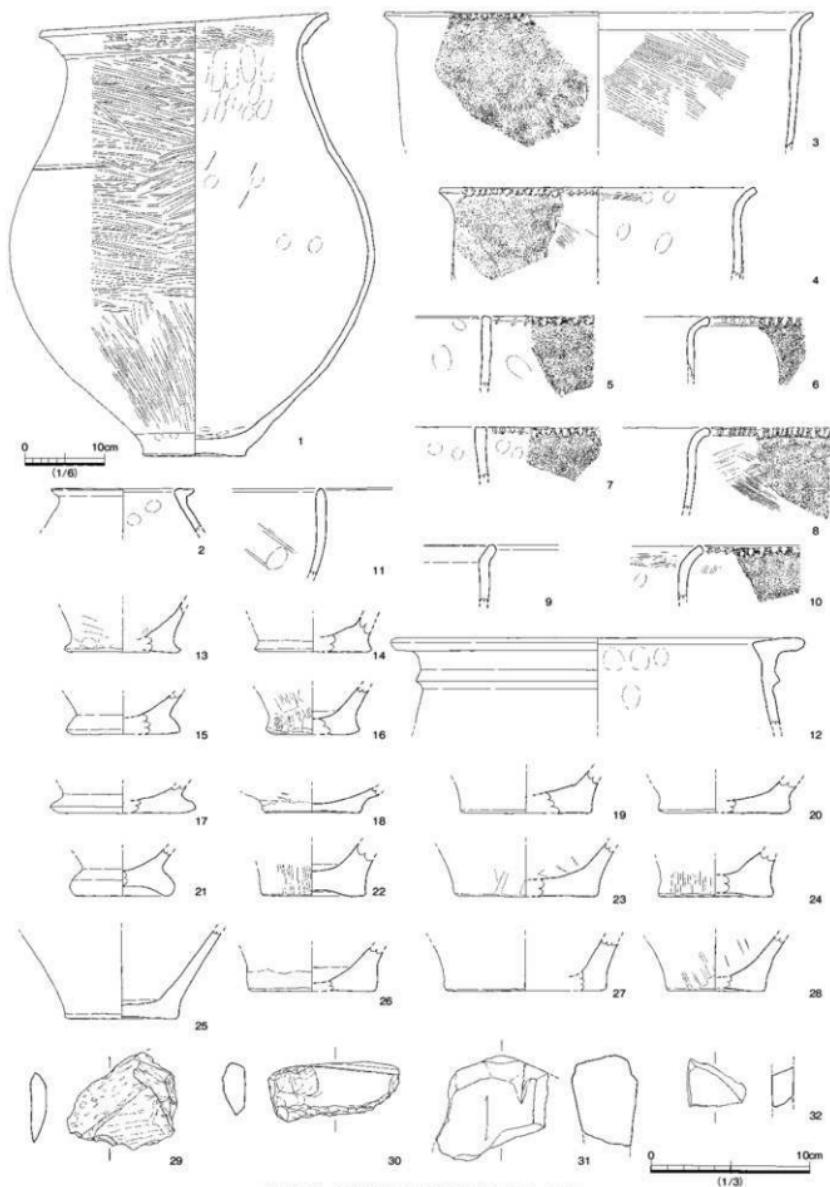
出土遺物（第55図3～7）第55図3は磁器の碗である。口径12.0cmを測り、外面に蔓草文を描く。4は陶器の皿である。内外面ともに線軸をかけるが、口縁部付近の軸が白色化して薄くなる。口径12.0cm。5は陶器皿の高台部付近である。内面と外面上半部に透明軸をかけ、見込に砂目地を残す。高台径4.6cm。6は陶器の壺である。口径13.6cm、胴部最大径15.6cmを測り、外面と内面口頭部まで鉄軸をかける。口縁部は張りの弱い胴部から直立気味に立ち上がり、端部は丸く

取める。7は磁器の猪口である。口径5.0cmで、内外面に透明軸をかける。

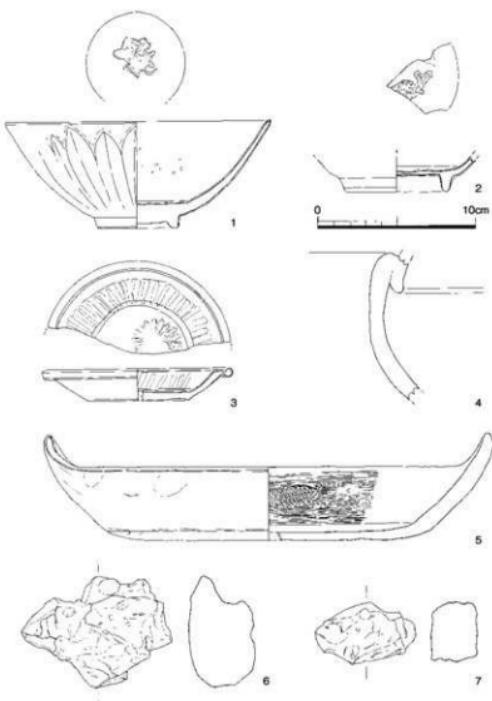
16号溝（付図、第56図）調査区の南西から北東に継続する溝で、調査区外に延びている。調査区内で約50m確認した。北東側については調古屋敷跡で平面確認された溝につながる可能性がある。溝の幅0.96～1.06m、深さ1.14m～1.18mを測り、断面Y字形を呈する。溝の上層は茶褐色土で、くびれ部以下は粘質土と砂質土から構成され、実際に水が流れていたと思われる。遺物は溝の北東端部から南西側に7～10mの地点の上層から大型壺が一個体分まとまって確認されたが、そのほかは壺の口縁部など小片が点々と



第56図 16号溝土層断面図 (1/40)



第57図 16号溝出土遺物実測図 (1/3・1/6)



第58図 ピット出土遺物実測図1 (1/3)

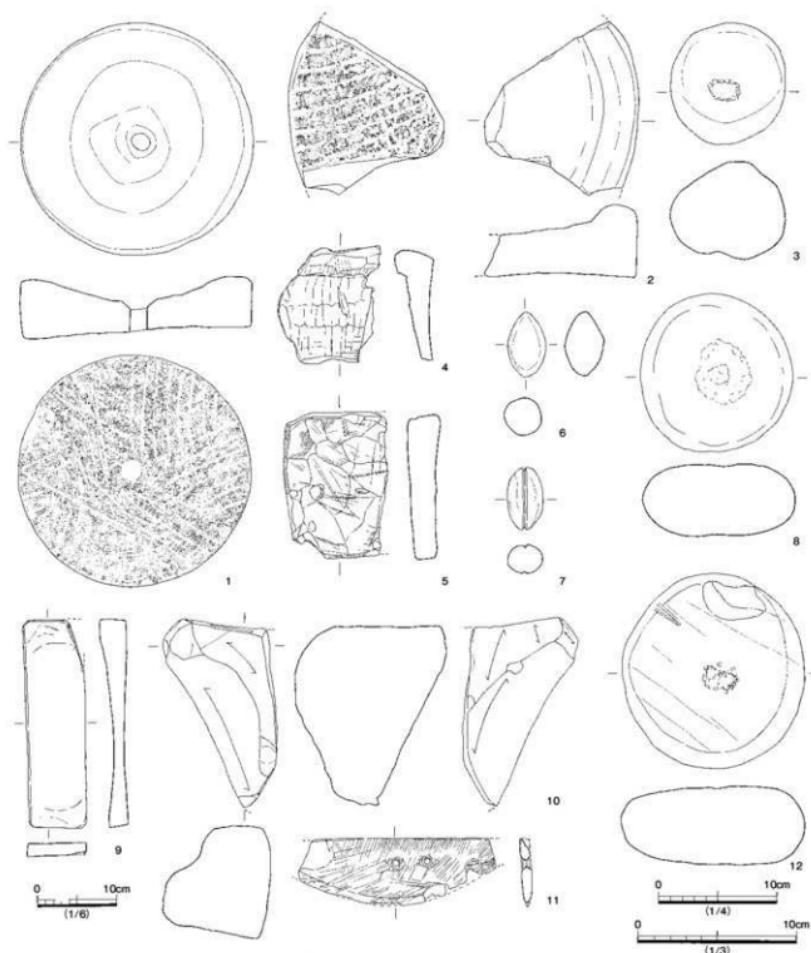
出土したに過ぎない。

出土遺物(第57図)1は胴部を1/4ほど欠く大型壺で、全体的に縦長的印象をうける。口径36.7cm、器高56.8cm、底径13.2cmを測る。底部から内湾しつつ立ち上がり、卵状に丸みを帯びた胴部をもつ。胴部最大径は46.5cmで、その上12~13cmの箇所に胴頸部を区切る沈線を巡らせるが、一部、胴部の横ミガキに消されている。頭部は内傾しつつ立ち上がり口縁部に至る。口縁部は外面に粘土を張り付け肥厚させ、明瞭な段を形成する。口縁端部はナデにより瘤む。調整はミガキを主体としており、底部から胴部下位まで縦ミガキ、胴部から口縁部まで横ミガキを施す。なお、胴部の2か所に黒斑がある。2は無頭壺の上半部である。混入品か。

3は壺の上半部である。

口径は27.0cmであるが、小片から図化したため、やや不安が残る。口縁の伸びがなく、外面にナデ、内面に斜ハケを施す。拓本では口縁端部に小さな刻目があるように見えるが、口縁端部の剥離等によるものである。4も壺の上半部で、口径20.0cmに復元されるが、やや不安が残る。張りの無い胴部から如意形口縁に至り、口縁下端に刻目を密に施す。外面に斜ハケ、内面口縁部に横ハケ、胴部にナデを施す。外面にはススが付着する。

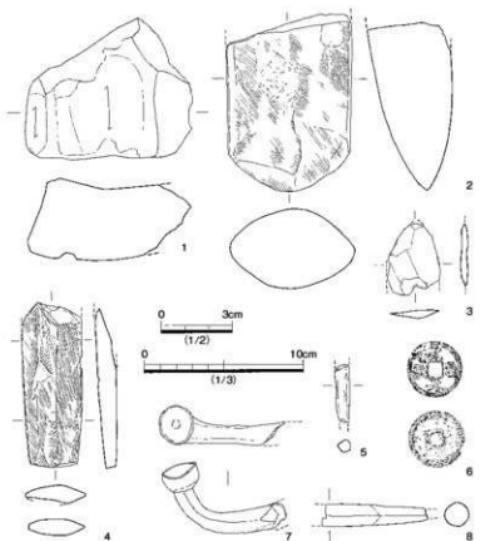
5~12は壺の口縁部である。5は素口縁の壺で、端部に刻目を施す。口縁端部にベンガラ状の赤色顔料が付着する。6は如意形口縁の小片である。口縁端部の面に刻目を施す。外面は部分的に黒色化する。7は素口縁の壺と考えたが、刻目が途切れ、上端部が淡橙色を呈し外面の色と全く異なることから、上に内傾する口縁部が伴う突帶文系の壺と思われる。8は如意形口縁の壺で、口縁端部の面に細い刻目を施す。外面にナデに近いハケ、内面に強いナデを施す。9は壺として図化したが不安が残る小片である。高坏の可能性もある。10は如意形口縁の壺で、口縁下端に刻目を施す。外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。11は丸みをもつ素口縁の壺であ



第59図 ピット出土遺物実測図2 (1/3・1/4・1/6)

る。12は甕の上半部で混入品である。

13～17は甕の底部片である。13は底径6.6cmを測り、やや上げ底である。底部外面に指頭痕が残る。14は底径7.3cmを測り、平底である。底部外面は剥離部分が多い。15は底径7.1cmで、底部外面に横方向擦過痕を残す。16は底径6.0cmで、底部外面に縦方向擦過痕を残す。17は底径9.1cmで底部外面に丁寧な横方向擦過痕を残す。底部裏面も丁寧にナデており、わずかに上げ底か。初



第60図 ピット出土遺物実測図3 (1/2・1/3)

残す。27は底径10.0cmに復元したが、小片のため不安が残る。内面にコゲが残る。28は底径6.0cmを測る。

29は剥片石器でスクレイバーか。下片が刃部と思われ、二次調整が施される。上面は自然面が残る。緑色細砂岩か粘板岩である。30もスクレイバーか。下面に二次調整を施し、刃部とする。石材はサヌカイトか。31は砥石である。図の表裏を用いており、現存長5.6cm、幅4.4cm、厚4.1cmを測る。石材は砂岩である。32も砥石である。図の表裏面を用い、厚さ1.3cmを測るが、側面はすべて削れている。目は細かい。なお、図化していないが、黒曜石片が91点出土している。(平尾)

##### 5 その他の遺構（第58～60図）

第58図1は567号ピット出土の龍泉窯系青磁碗である。外面は蓮弁文、見込には花文印刻が施されている。大宰府編I-5Cに分類できる。2は698号ピット出土の龍泉窯系青磁の皿である。見込には貼付双魚文が施され、高台の釉は剥いでいる。3は118号ピット出土、陶器の皿で鍔縁状の口縁部もち、見込には花文をあしらう。4は399号ピット出土、常滑焼の壺の口縁部である。5は507号ピット出土の土鍋で、外面にスス、内面にコゲが確認できる。底部や胴部に接続痕が見られる。また全体が歪んでおり、側面の厚みも均一でない粗雑な作りである。6、7は胎土に長石や石英、金雲母を含む焼土である。6は204号ピット出土で外面は浅い黄橙色を呈し、内面は橙色である。7は231号ピット出土で外面は橙色、内面は黒褐色をしている。

第59図1は82号ピット出土の石臼である。出土状況から礎石として転用されていたと判断される。凝灰岩製で径は29.8cmを測る。臼目のほとんどは摩滅しているが、臼目の上に新しく刻

状の圧痕を残す。18は壺の底部で、底径6.0cmを測る。19～28は壺の底部である。19は底径8.3cmで、底部外面に縦方向擦過痕を残す。20は底径8.2cmで、底部はわずかに上げ底である。外面は剥離が多く調整不明。21は上げ底で、底部外面は横方向擦過痕を残す。内面は黒色化している。22は上げ底で、外面に縦ハケを施す。混入品であろう。23は底径9.0cmで、底部外面に縦方向擦過痕を残す。24は上げ底で、外面に縦ハケを施す。底部裏面に黒斑をもつ。混入品か。25は平底で、内面にコゲが付着する。26は底径8.0cmで、底部外面に縦方向擦過痕を

まれた線を確認できる。表面は手斧などを使用し整形加工している。2は587号ピット出土の石臼の破片で、復元径は29.1cm。全体的に摩滅しており、加工痕などが不明瞭である。3は80号ピット出土の敲石で側面に擦った痕跡が見受けられる。4は298号ピット出土の滑石製鉢付石鍋の転用品である。側面に転用時のケズリが確認できる。内面には石鍋として使用した際のススが残る。5は543号ピット出土の滑石製石鍋の転用品である。側面の一部が縱方向に削られ、中央部に外面からの穿孔を確認できる。6は308号ピット出土の土製投弾。7は479号ピット出土の有溝石錐で側面を面取り、研磨している。8は536号ピット出土の敲石で、花崗岩製。側面に敲打痕が見られる。9は609号ピット出土の砥石で、砂岩製。側面には整形時の粗研磨が残り、表面にタール状の物質が付着している。10は608号ピット出土の砥石。11は86号ピット出土の石包丁である。刃部には使用痕、側面には整形時の研磨が残る。穿孔部は細かい敲打痕が確認できる。また、全体が若干湾曲している。12は表採の敲石で敲打面が焼成を受け、黒色を帯びる。なお、一部欠けている箇所についても欠けた後に火を受けている。

第60図1は684号ピット出土の砂岩製砥石。一部やや粗い使用痕が見られる。2は606号ピット出土、玄武岩製の石斧である。刃部はシャープで密な研磨が施され光沢がある。側面は刃部に近い箇所は細かい研磨が施されるが、刃部から離れると粗い研磨となる。上面は敲打で整形する。3は267号ピット出土、石劍先端部か。粗く仕上げられ、欠損部分が多い。4は表採の石劍柄である。端部は内傾し、丸みを持たせるためか横向に研磨している。上面は縱研磨を中心に一部斜め方向の細かな研磨が見られる。5は86号ピット出土の鉄釘か。上下ともに欠損しているが断面方形を呈する。6は表採の寛永通宝で、重さは3.12gを測る。7は375号ピット出土の煙管である。火皿は若干歪み、内部には灰が付着している。火皿の付け根に補強帶の痕跡があることから小泉編年Ⅲ期、おおよそ17世紀後半に位置付けられる。8は203号ピット出土、煙管の吸口である。全体に刷毛目状の線が刻まれ、中央部の斜線を起点に、線の向きが変わる。(秋田)

#### 【参考文献】

- 小川望2000「出土遺物から見る江戸の「タバコ」「江戸文化の考古学」吉川弘文館  
 桐山秀穂1996「日本における茶臼の研究」「古代学研究所研究紀要」6  
 小泉弘1983「江戸を掘る」柏書房  
 鈴木康之2010「中世の木材加工における技術革新」「中世のモノづくり」国立歴史民俗博物館研究叢書5  
 長安慧2017「防長型足錨の編年」「七隈史学」19  
 宮崎亮一編2000「太宰府多坊跡XV」太宰府市の文化財 第49集 太宰府市教育委員会  
 本村充保2006「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究」「櫻原考古学研究所紀要 考古學論叢」第29冊 奈良県立櫻原考古学研究所  
 山本信夫・山村信榮1997「九州・南西諸島」「国立歴史民族博物館研究報告」71

## 第4章　まとめ　潤遺跡群の変遷について

潤遺跡群の性格や位置づけについて、岡部裕俊氏がこれまでの調査成果をもとに考察を進めている(岡部1998・2017)。その結果、潤地区は標高4~5m程度の平坦な風景が広がっているが、本来は雷山川沿いや潤番田遺跡の南~西側で南北に延びる大きな谷が存在し、起伏にとんだ地形であったと指摘されている。これらの成果に、今回の調査結果を追加して本報告のまとめとしたい。

潤番田遺跡1次調査では包含層から打製石斧が出土しているが、それ以外に縄文時代の遺物は

ほとんどなく、潤遺跡群では基本的に弥生時代から人々の生活が確認される。その始まりの遺跡が志登支石墓群である。志登遺跡群は雷山川の東側で展開するが、志登支石墓群は飛び地的に川の西側に所在し、潤地頭給遺跡の北東部に近接することから潤遺跡群の一角に含めて記述する。ここでは支石墓10基のはかに弥生時代早・前期の壺棺墓も確認されるが、その後は潤地頭給遺跡の南北約100m、東西約30mの範囲で展開する壺棺墓群の時期的上限である弥生時代前期末頃まで空白期が存在していた。しかし、潤番田遺跡2次調査（以下本調査区とする）16号溝では、前期中頃～後半に位置付けられる大型壺が上層から出土し、溝の埋没期に廃棄されていること。また、より古相を示す壺の小片も認められることから、この溝は弥生時代前期に一定期間機能していたことがわかり、前述した空白期を埋める遺構として重要である。

弥生時代中期は潤地頭給遺跡の壺棺墓群の最盛期である。本調査区では7号溝が弥生時代中期前半～中頃の大溝として確認された。同様な遺構は潤地頭給遺跡Ⅲ区東で中期前半～後半に位置付けられる大溝が存在する。ただ、本調査区では数は少ないながらも両刃石斧、石劍の未製品が出土していることが注目される。石器の未成品は著名な今山遺跡のはかに、原田大六氏により雷山川をはさんだ東側に所在する志登松本遺跡から出土した柱状片刃石斧や大型石庵丁の未製品が紹介されているが（原田1963）、共伴遺物等は不明であった。今後、潤番田例など近隣遺跡出土の石器未製品との比較が必要である。また、両刃石斧の素材である玄武岩の流通の面でも検討が求められよう。なお、7号溝の最上層からは球状鉄塊が出土している。溝の検出面上は現代の水田であることから、混入の可能性は否定できないが注目すべき資料である。

本調査区では古墳～鎌倉時代の遺構はほとんど見られず、これまでの成果に追加することはないが、今年度実施した個人住宅建設に伴う潤古屋敷遺跡5次調査で5世紀代のタキ目をもつ多孔瓶や肉厚で全体的に丸みをもつ3b類鉤錘車が出土しており（平尾2008）、潤遺跡群の北側に集落が展開する可能性が高まった。

室町時代になると潤番田遺跡1次調査等で居館や井戸が多数確認され、西接する本調査区でも同時代の遺構が展開すると想定していたが、江戸時代の遺構が主体となる。ただ、3号井戸は結筒を井戸枠とするもので、糸島市では初例である。時期は16世紀後半台で全国的な展開期に位置付けられる。今回は井戸枠の残りもよく、市内初例ということですべての部材を取り上げ、実測を行ったが、他地域では多数確認されることも珍しくなく、その調査・報告方法は検討を要する。なお、長垂山以西の糸島地域では井戸は約120基存在するが、そのうちの40基ほどが潤遺跡群で確認されており、井戸の集中地域といえる（平尾2020）。

近年、小学校の建設や道路の拡幅、九州大学の移転等を契機として潤遺跡群における試掘・発掘調査件数が増加傾向にある。今後はより詳細な遺構の変遷や地形の復元等を行い地域全体の歴史像復元の取り組みが求められるだろう。（平尾）

#### 【参考文献】

- 岡部裕俊1998「推定される伊都国の構造」『古代探求 森浩一70の疑問』中央公論社
- 岡部裕俊2017「雷山川旧河口域における埋蔵文化財調査の手引き」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』12
- 原田大六1963「抉入片刃石器の再検討」1・2『古代学研究』34・35
- 平尾和久2008「鉤錘車の編年とその画期」『伊都国歴史博物館紀要』3
- 平尾和久2020「糸島地域における井戸の時期的変遷と画期」『糸島市立伊都国歴史博物館紀要』15

## 第5章 分析

### 潤番田遺跡2次調査出土の動物遺存体について

福岡市文化財部埋蔵文化財課 屋山洋

#### 1. 遺跡の立地

潤番田遺跡は背振山系から北流する雷山川が糸島半島の丘陵に遮られて西に折れる屈曲部の左岸側に位置する。一見雷山川の沖積地のようであるが、1次調査で本来起伏に富んだ地形を中世に整地したことが判明している。中世段階では旧海岸線が遺跡近くまで入り込んでおり、河口にちかい微高地であったと推定される。1次調査では弥生時代の甕棺や土坑の他、中世末から近世にかけての集落が出土した。堀とその中を区画する溝、掘立柱建物群が確認され、出土した朝鮮青磁の数の多さなどから朝鮮半島との深い関連が伺われ、朝鮮貿易に携わる集落であったと考えられている。

#### 2. 動物遺存体

出土した動物遺存体は大きく弥生時代中～後期と中世末～近世前期の2時期である。出土した骨の詳細はP79の表2に記載している。

##### 1) 弥生時代

P143 弥生時代中期前半

イノシシの右桡骨遠位部が1点出土した。成獣で切痕はみられない。

P262 弥生時代中期

細片化した骨群で同定できたのは左側肩胛骨の前縁部の一部と肋骨の小片である。いずれもイノシシ・シカ程度の大きさで、切痕はみられない。

P638 弥生時代後期

細片化した骨群である。0005は魚骨で背鰭棘などの遠位部か。切痕は無く、火を受けて白色化している。0004は哺乳類の下顎と歯根で歯冠の小片が1点混じる。下顎は細片化している。

P662 弥生時代中期

鹿角が1点出土。自然落角で第1枝角部分で枝角を刃物で切り落とした後、角幹の緻密質部分にV字の切れ込みを入れてから齶部分を折っている。根元部分にもこまかに刃物痕がみられる。全体が火を受けて白色化している。

##### 2) 中世末から近世前半

3号井戸（第14図3 21頁）16世紀後半

井戸の底部付近からカメ類の甲羅がまとまって出土した。詳細は後述する。

8号井戸（第27図4 36頁）17世紀中～後半

哺乳類の長骨幹部が出土した。遺存不良で細片化が進んでいる。比較的大きな破片は8点あり、そのうち2点は接合するが、その他が同一の骨であるかどうかは不明である。一部にこまかに刃物痕とナタ状の刃物痕がみられる。大きさからウシもしくはウマと推定される。

11号井戸（第31図3 39頁）17世紀後半

魚類の骨が1点出土。フグ類の右下顎で近位側が欠損している。刃物痕はみられない。遺存部分で3cmと大型である。破損により全形が不明なため断定はできないがトラフグに似る。

13号井戸（第37図1 40頁）17世紀後半

鳥類の骨が2点出土。0008はキジ・ニワトリ類の左上腕骨で遠位端は刃物により切断されている。

近位部内面にも刃物痕があるが、調査時にいた可能性がある。0009は遺存状態が悪く、2片に分離している。変形しているが脛足根骨の可能性がある。両端欠損、後背面欠損。刃物痕はみられない。  
10号溝（第39図 60頁） 17世紀中から後半

哺乳類の骨で細片化している。表面の緻密質は残っておらず髓部のみの遺存である。細片化が進んでいる。皿状に凹んでおり、肩胛骨や寛骨の関節窩の可能性がある。大きさはウシ・ウマ程度である。

弥生時代のイノシシ・シカは当時よく利用されていた動物である。鹿角は周囲の緻密質に刃物でV字形の切れ込みを入れてから中央の髓部をへし折っているが、この方法は中世遺跡で出土する鹿角でも見られるものである。中世末から近世はウシ、ウマ、キジ・ニワトリ類と弥生時代とは利用する動物種に変化がみられる。

### 3号井戸出土のカメ類について

カメ類は3号井戸の底部付近から出土したが、出土状況は不明である。出土部位は甲羅のみで、それを5つに分けて取り上げており、045～048と056の取上げ番号がつく。いずれも淡水生のバタクールガメ科に属するもので、生息域からするとイシガメかクサガメのどちらかである。甲羅は甲板、骨板共に遺存するが、遺存状態は悪い。当初接合作業を試みたが、軽く触れただけで端部から細片化するため中止した。また表面全体に黄褐色の付着物があり、それを剥がそうとしたところ一緒に甲板も剥離したため中止した。このため年輪などの表面観察が行えていない。今後は劣化を防ぐ保存処理と共に汚れを除去できれば、部位の特定や年齢の推定などの分析が進むものと期待される。

#### 045 背甲（0012）75頁

小片が約20点。椎骨板、肋骨板、縁骨板で小片のため正確な位置は不明である。写真の0012-2は縁骨板である。その他は肋骨板でクサガメに特有な隆条はみられない。

#### 045 腹甲 5点（0013～0017）75頁

0013は腹甲の右前側の約3/4で剣腹骨板を欠き、左側腹甲は内腹骨板と中腹骨板の一部が遺存する。0014は腹甲の前側部分で左右共に上腹骨板、内腹骨板、中腹骨板が遺存し、左右とも中腹甲板の後縁を欠く。0015は左右の上腹骨板と内腹骨板である。0016は左側の中腹骨板と下腹骨板の一部で0014・0015とは位置的に重ならない（接点はない）。0017は左側下腹骨板の縁部と思われる。0013・0014・0015は上腹骨板と内腹骨板が重なるため別個体である。

#### 046 背甲（0018・0019）76頁

0018は椎骨板と左右の肋骨板である。左側肋骨板は1枚で遠位側を欠き、右側は3枚で1枚は近位側を欠く。クサガメ特有の隆条はない。0019は上臂骨板と左右の肋骨板である。

#### 046 腹甲 2点（0020・0021）76頁

0020は腹甲中央部で右側中腹骨板と左右の下腹骨板である。現在は骨板の接合線で3つに分離している。全体に平坦で丸みはみられない。0021は右側の剣腹骨板の後縁部と思われる。0020と同一個体のものは不明である。

#### 047 背甲（0022～0025）76頁

0022は項骨板から椎骨板①にかけて中央の隆条がみられる。0023は左後ろ側の肋骨板と縁骨板と思われる。縁骨板は4枚分ほどで前半部は端を欠くが、後半部は縁端まで遺存し弱い鋸歯状を呈す。肋骨板に隆条がないためイシガメと思われる。0024は縁骨板で正確な位置は不明。0025の3点は肋骨板で正確な位置は不明。隆条はみられない。

#### 047 腹甲（0026・0027）77頁

0026は左右の中腹骨板・下腹骨板である。左下腹骨板は遠位側を欠く。0027は0026の欠損部の可能性があるが接点はない。全体に丸みを帯びており、イシガメの雌である可能性がある。

#### 048 腹甲（0028・0029）77頁

0028は左の肋骨板である。隆条は見られない。0029は背甲と思われるが部位は不明

#### 048 腹甲 2点（0030・0031）77頁

0030は左側の上腹骨板・中腹骨板・下腹骨板で下腹骨板は後側を欠く。中央から縁側にかけて丸みを帯びておりイシガメ雌の可能性がある。0031は左側の中腹骨板・下腹骨板である。0030と同様に丸みを帯びる。イシガメ雌の可能性がある。

#### 056 背甲（0032～0034）78頁

0032は項骨板から椎骨板①にかけてで中央の隆条が見られる。0033は肋骨板で位置は不明、隆条はない。0034の8点は縁骨板であるが、小片のため正確な位置は不明である。

#### 056 腹甲 小片が2点出土。部位は不明で緩やかに湾曲する。

#### まとめ

腹甲は0013・0014・0015は上腹骨板・内腹骨板が重なるため別個体である。0020・0026・0030・0031は0015とは重ならないが0013・0014とは重なる。0015・0020・0030は重ならないため最小個体数は5体となる。そのうち048出土の0030・0031は緩やかな丸みをおびる。丸みは0026が微妙で0013・0014などは0030・0031に比べると平坦である。

背甲は小片が多く位置が特定できなかったため出土部位の重なりを判断できなかった。ただ0022・0032は項骨板であることから少なくとも2体分の背甲が含まれる。0012・0018・0025・0028・0033は肋骨板で骨板・甲板とともに遺存しているが、クサガメに特有な隆条はみられない。

調査跡群は雷山川沿いの平野部に位置し、山麓にも近いためイシガメ、クサガメとも遺跡周辺に生息するものと思われる。両種の甲羅の見分け方としては①イシガメの背甲の隆条（稜線）が中央のみなのに対しクサガメは左右の肋骨板にも隆条があること、②イシガメ雌の成獣は腹甲が丸みを帯びること、③イシガメは背甲後縁が鋸歯状を呈すの3点があるが、今回は③が小片で観察が困難なことから①と②について観察をおこなった結果、①は出土した肋骨板に隆条はない。②は0030・0031がその他の腹甲に比べて丸みを帯びる。これらから出土した甲羅がイシガメである可能性は高いが、0013・0014・0020の平坦な腹甲はクサガメ、イシガメ雌（若獣）の可能性もあり全部がイシガメとは断定できない。今回解体痕は確認できていないが、出土部位が甲羅のみで四肢骨や調査時に目にとまり易い頭蓋骨がないのは解体後に中身を持ち去ったためと思われ、井戸に落下して自然死した可能性は考えにくい。背甲の破片が小片であることや、腹甲が中腹骨板・下腹骨板の途中で割れているのは解体の仕方によるものであろうか。『本朝食鑑』などによると淡水生のカメのうちスッポンは料理法の記載があるので対し、イシガメ（クサガメ）は尾や尿などが薬として利用されると書かれており、食材としては積極的に利用してなかつたようである。ただ中世以前においては戦国大名である山口県の大内氏関連の文書でカメを鷹の餌にすることを禁じていることから淡水生カメ類の肉を利用するところがあったことが判る。中世のカメの出土例は近年増えつつあるが、その多くはスッポンでイシガメ・クサガメの出土はそれに比べると少ない。今回の資料はイシガメ・クサガメの利用例として貴重な例といえる。

\* 75～78頁の写真的縮尺は統一しておらず、小さな骨はかなり拡大して記載している。

\* カメ背甲のうち椎骨板、肋骨板、縁骨板また腹甲の一部は正確な位置が不明なため75～78頁の出土部位図はおおよその推定位置である。

\* カメの甲羅の写真、出土部位図は外面（背甲は上から、腹甲は下から）から見た状態である。

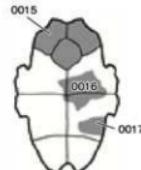
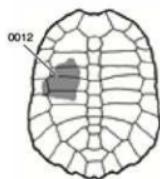
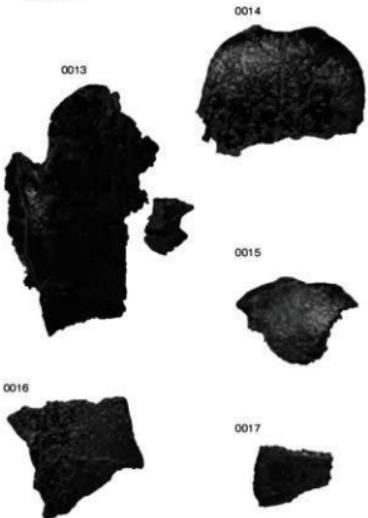


背甲・腹甲構成図

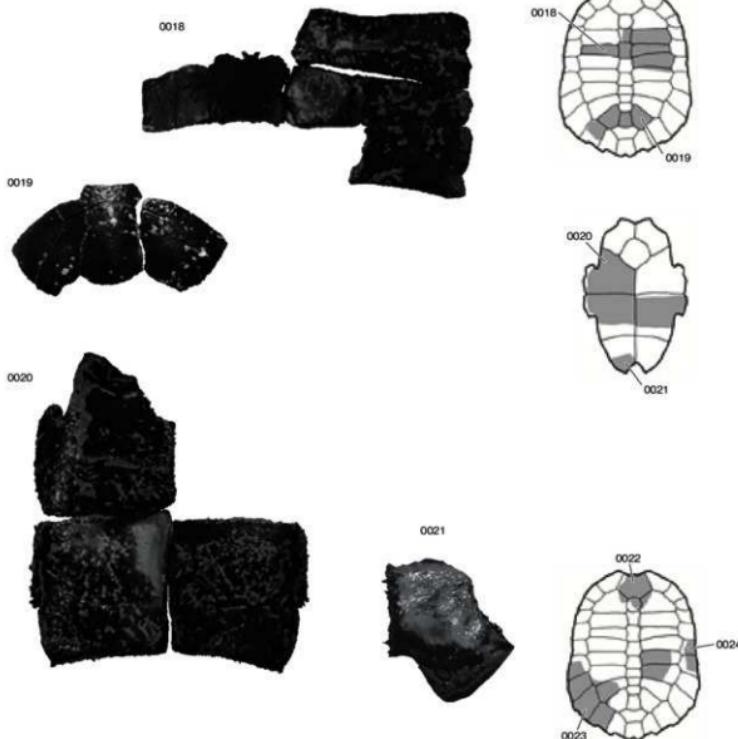
045 背甲



045 腹甲



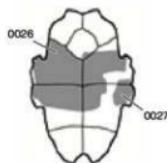
046 背甲



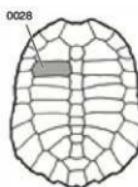
047 背甲



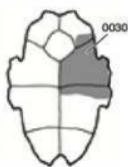
047 腹甲



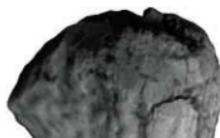
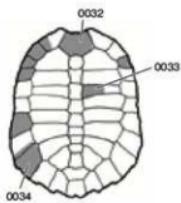
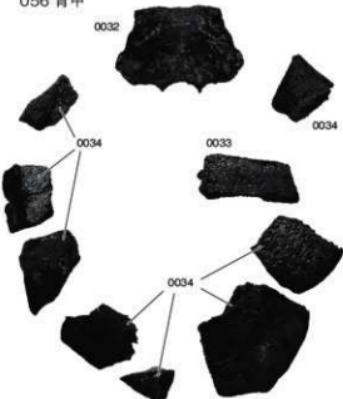
048 背甲



048 腹甲



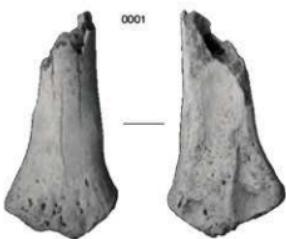
056 背甲



0007



0001



0008



0009



0004

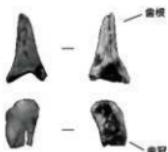


表2 洞番田遺跡2次出土動物遺存体

参考文献

日本のかメ・トカゲ・ヘビ増補改訂 2019 山と溪谷社

「山口県山口市内低齢化問題について」(第55次調査)の十箇から出たなかの具体的な事例について、(2002) 年度二

2011年新辦公用品

BLK 132-1-4 off base and the other 2000 ft. S.E. 2000 ft. S.E. 1000 ft. S.E. 1000 ft. S.E.

愛用媒體文化財モジタ=調整報言書第2回

財團法人愛知県埋蔵文化財セミナー 年報9

八坂書房  
「日本動物史」梶島孝雄著

# 図 版



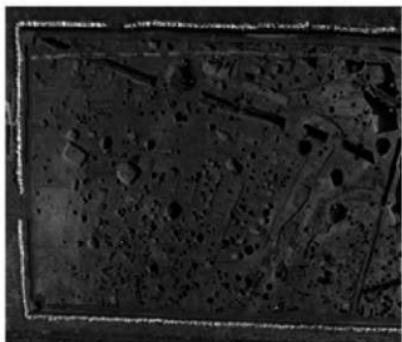
図版 1



1-1 潤番田遺跡 2次調査区から北を望む



1-2 潤番田遺跡 2次調査区全景



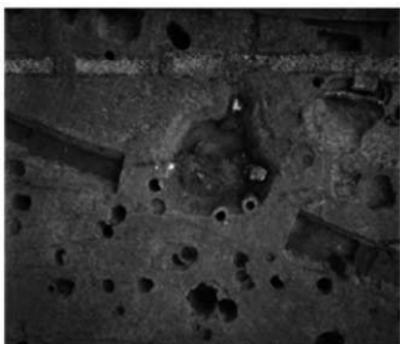
2-1 調査区北側全景



2-2 調査区南側全景



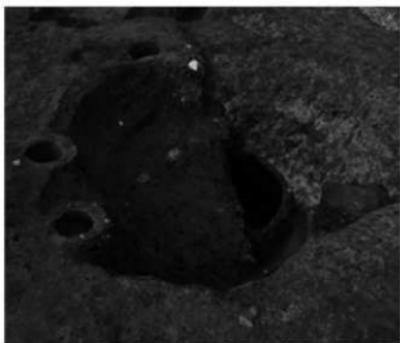
2-3 1・3号土坑、1・5号井戸



2-4 3号井戸、16号溝



2-5 2号井戸

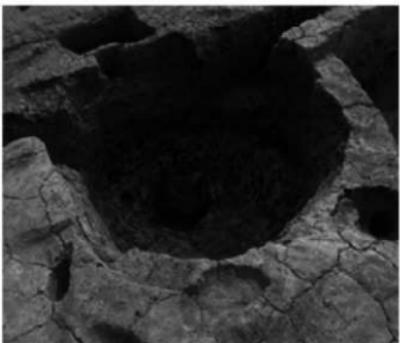


2-6 3号井戸

図版 3



3-1 5号井戸土層断面



3-2 9号井戸



3-3 5号土坑、12号井戸



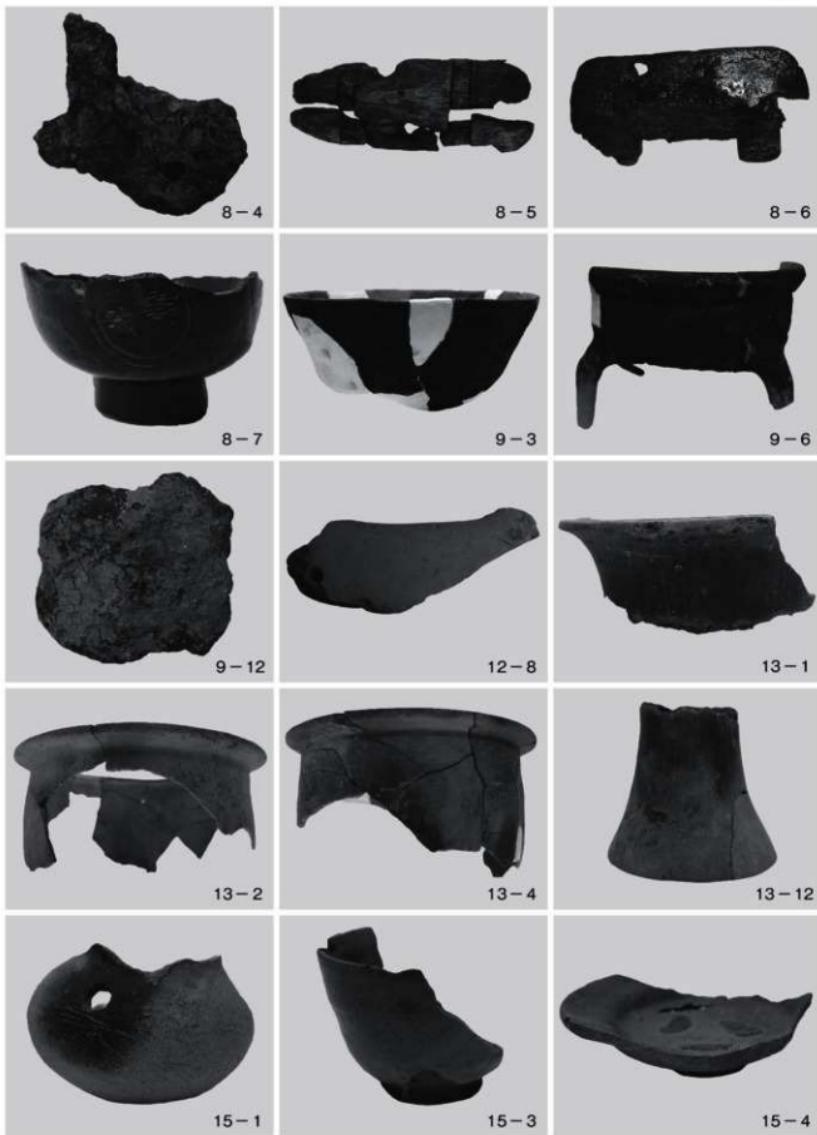
3-4 13号井戸



3-5 7号溝



3-6 16号溝

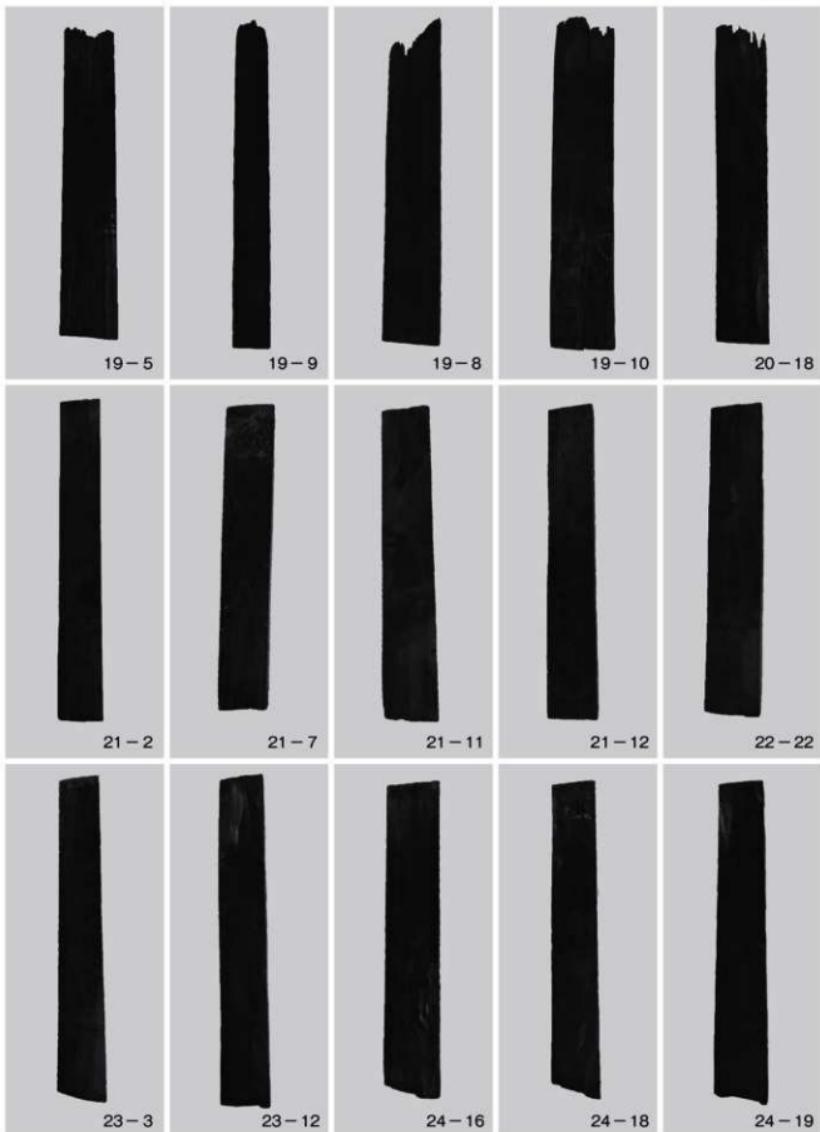


洞番田遺跡 2 次調査出土遺物①

図版 5

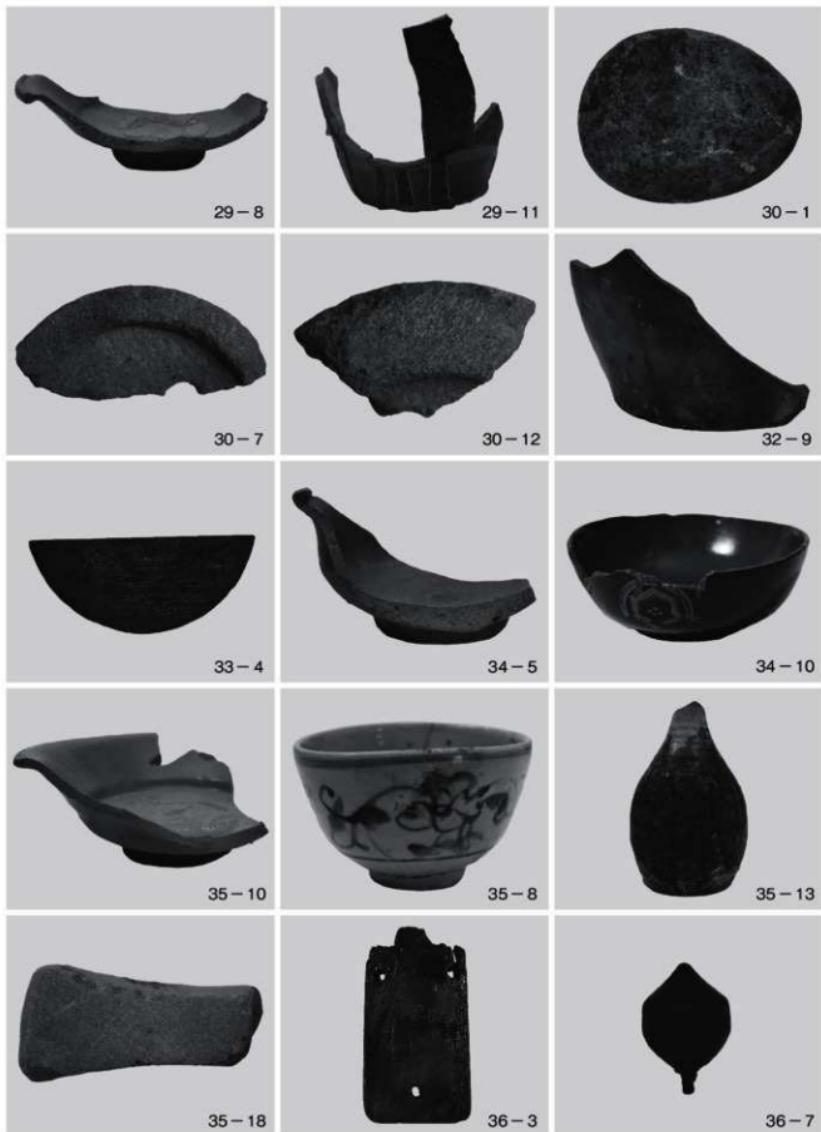


洞番田遺跡 2 次調査出土遺物②



洞番田遺跡 2 次調査出土遺物③

図版 7

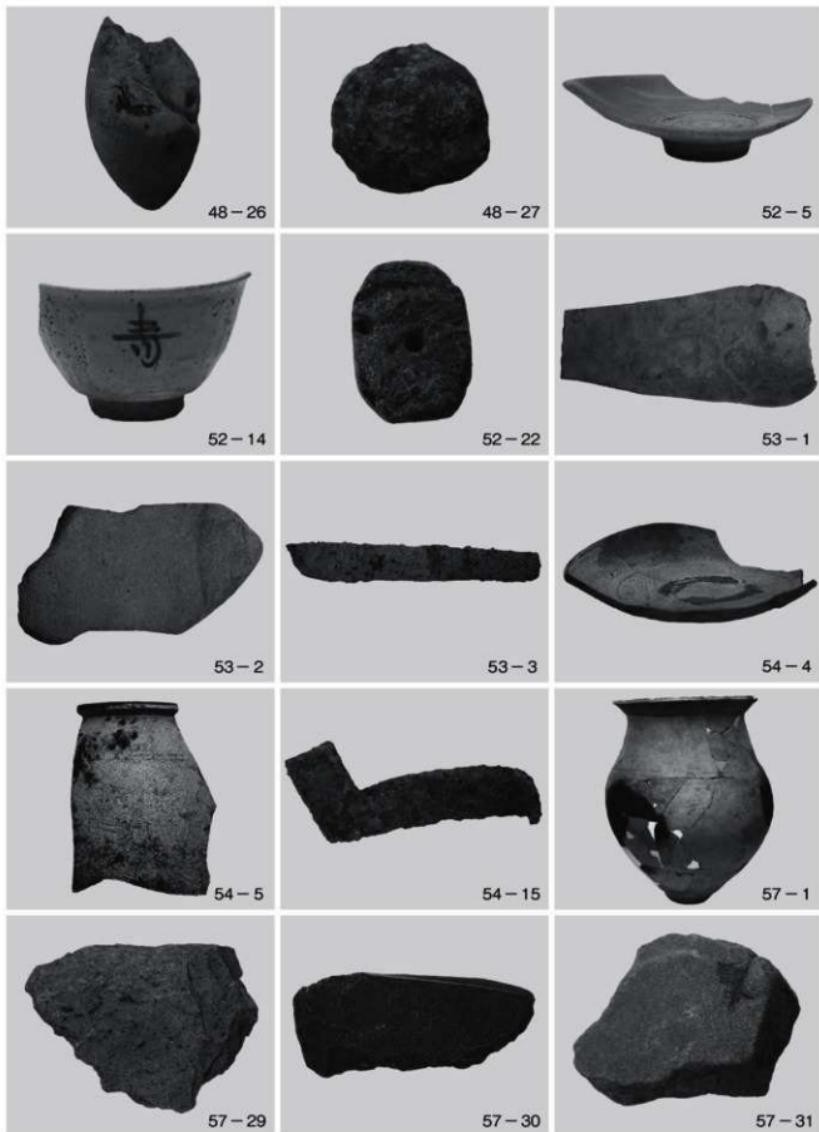


洞番田遺跡 2 次調査出土遺物④



洞番田遺跡 2 次調査出土遺物⑤

図版 9



洞番田遺跡 2 次調査出土遺物⑤

## 報告書抄録

フリガナ	ウルウパンダイセキ					
書名	潤番田遺跡					
副書名	病院建設に伴う潤番田遺跡2次調査					
巻次						
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第22集					
編著者名	秋田雄也・平尾和久(編集)・屋山洋					
編集機関	糸島市教育委員会					
所在地	〒819-1192 福岡県糸島市前原西一丁目1-1					
発行年月日	令和2(2020)年3月31日					
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積
		市町村 遺跡番号				調査原因
潤番田遺跡	糸島市 潤三丁目 456・458・459-1	40230	33°56'53"	130°21'60"	2018/11/15 ~ 2019/3/31	1.152m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
潤番田遺跡 2次調査	集落	弥生、中世、 近世	溝、井戸、土坑、掘立 柱建物	弥生土器、陶磁器、土師 器、木器、铁器、石器	3号井戸からカメ類 甲羅が出土。	

### 潤番田遺跡

—病院建設に伴う潤番田遺跡2次調査—

糸島市文化財調査報告書 第22集

令和2(2020)3月31日

発行 糸島市教育委員会

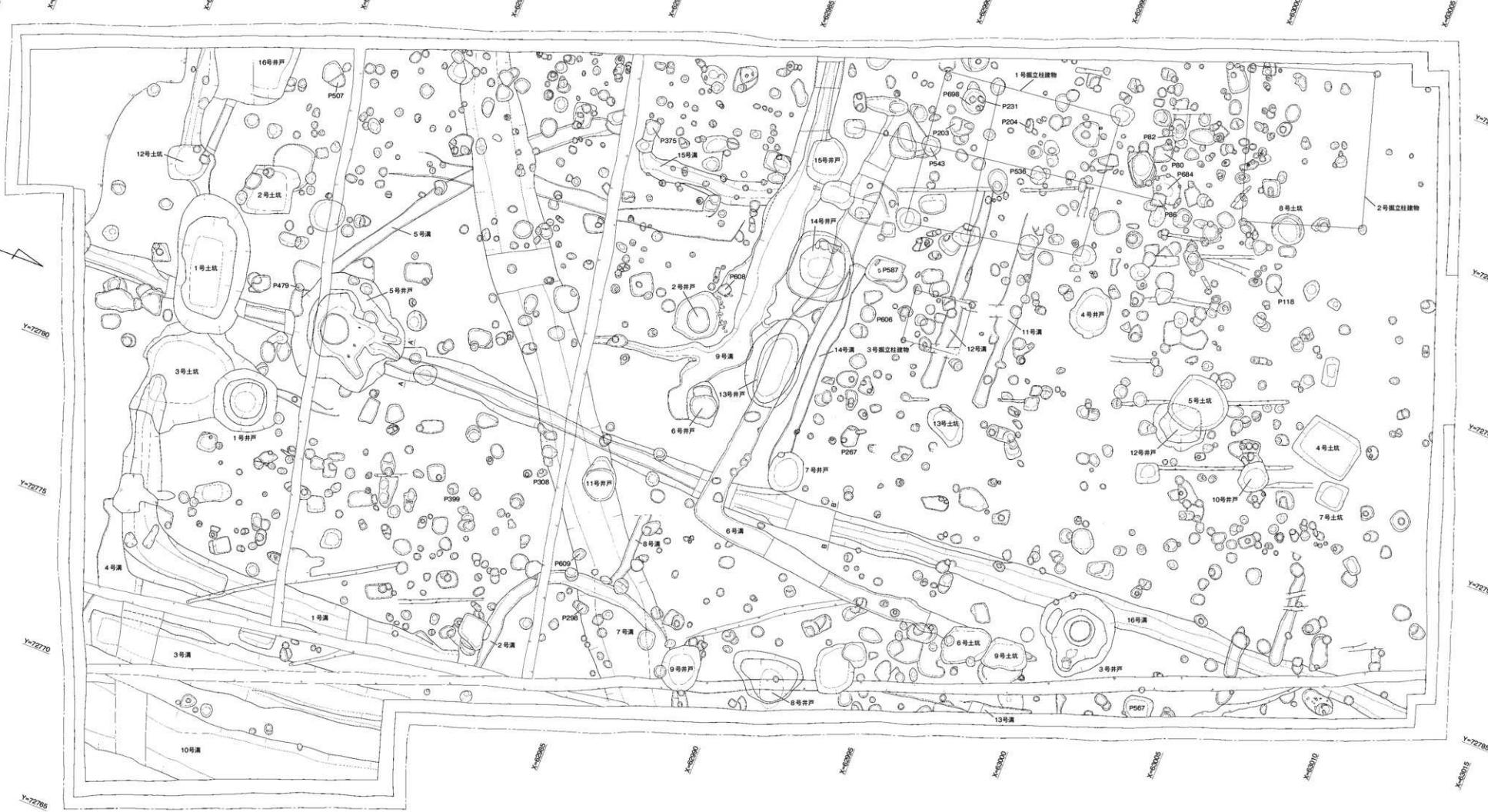
福岡県糸島市前原西一丁目1番1号

TEL 092-332-2093

印刷 株式会社 西日本新聞印刷

〒812-0041 福岡県福岡市博多区吉塚8-2-5





付図 潤番田遺跡 2次調査区全体図 (1/100)

0 10m